
DOG DAYS ~ 誤召喚されし者 ~

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS（誤召喚されし者）

【Nコード】

N8133W

【作者名】

TR

【あらすじ】

その世界……フロニヤルドは普通の世界とは異なっていた。それはそこに住む人たちも然り、戦と言う文化も然り。そこに勇者として召喚された少年、シンク。しかし、彼のほかにもう一人誤って召喚された者がいた。これはそんな不運な少年の物語です。

* 不定期更新ですが、よろしく願いします。

またヒロインについての希望や、アドバイス等がございましたら何

なりとお知らせください*

前書き（必ずお読みください）

初めての方は、初めまして。

それ以外の方はご無沙汰しております。

今回は数多くある作品の中から、本作のような駄文を選んでいただきありがとうございます。

読んで頂くにあたって、お願いと言う名の注意点がございますので、お知らせしたいと思います。

・本作品は『魔法少女まどか マギカ〜革命を促す者〜』で”涉がもし見滝原氏ではなくフロニヤルドに向かったら”というIFをもとに作成しております。

そのため本作では原作とは場違いな技や設定が多々出てくる可能性がございます。

・物語の進行上、ご都合主義と思われる設定などが出てくる可能性がございます。

・本作はかなりひどいチート&厨二現象が発生する可能性があります。

以上の点をご了承いただけると幸いです。

もしそういったものが苦手な場合は読まれないことをお勧めします。

それでは、本作をお楽しみください。

プロローグ（前書き）

いよいよ本篇が始まります。

どうぞ、よろしくお願いします。

プロローグ

それはとある世界でのこと。

そこはまるで重役会議のような重苦しい雰囲気の漂う一室だった。

「やはりガレット獅子団の兵士たちは、ミオン砦を攻めに来るようですね」

「ガレットの連中、本気でこの城まで侵攻してくる気でしょうか？」

男性の言葉に、緑色の髪の少女が疑問を投げかけた。

「ガレット獅子団のレオンミシエリ閣下は勇猛な方ではあったが、かような無茶をされるような方じゃったかのう？」

「理由はどうであれ、この数戦はひたすら負け戦じゃ」

「せめてダルキアン卿やテンコ様がいてくれたらなのう」

老人たちが次々に意見を出し合う。

「騎士ブリオツシユやユキカゼにも使命がありますれば」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪の場合このフィリアンノ城まで」

男性の言葉に老人が不安げに呟く。

「それは」

「させません！」

男性の言葉を遮り、緑色の髪をした少女は叫びながら立ち上がった。

「姫様の為にも、ビスコッティの民の為にも、この戦は我々が！」
「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ」

栗色の髪をした少女がエクレと呼ばれた少女を咎めた。

「あ……失礼しました」

「ありがとうございます、みんな」

そんな中、上座の席にっていた少女が沈黙を破った。

「我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今回は本当に負けることはできない戦です。ですから、最後の切り札を使おうと思います」

ピンク色の髪の少女の言葉に、その場にいた者達がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルフィオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します！」

それはどこでも見られる状況だった。

唯一異なると言えば、そこにいる者達の頭には”犬耳”が生えていたことであつた。

DOG DAYS 誤召喚されし者

プロローグ

天界、そこは周りが白面の世界。
言うなれば何も無い世界だ。

そんな中、俺は何をすることもなくのんびりと過ごしていた。

「ここにいたのか」

「何の様だ？ ノヴァ」

俺は声をかけてきた創造の神、ノヴァを睨みつけながら用件を尋ねる。

「そう睨まない。仕事の話じゃ」

「……………」

俺はノヴァの口から出た”仕事”と言う単語に表情をこわばらせる。
俺の仕事、それは管轄の世界を安定させると言うものだ。

それは、世界の意志と言う存在であるからなのだ。

「前にも話したと思うが、ある世界で異常な時間経過の減少が発生しておる」

「ええ存じ上げております。地名は見滝原でしたよね。何か進展でもあったのですか？」

ノヴァの言葉に、俺は少し前にノヴァから伝えられた仕事の内容を思い出しながら答えた。

「そうじゃ。実は出発の日には世界移動用の次元空間の状態が悪いらしいのじゃ。よって比較的安定している今向かって貰いたいの

じゃ」

「随分と急ですね」

俺はノヴァの言葉に、皮肉交じりに答えた。

世界移動用の次元空間はどの空間よりも安定しており外部からの干渉は一切受け付けない。

但し、それも周期的に不安定となってしまうことがあるのだ。

それが出発予定日と重なってしまったらしい。

「わかりました。それではすぐに行くとしましょう」

「本当にすまない。お主の要望通りの武装だが、念の為に現地に到着したらすぐに確認するように」

ノヴァの言葉を聞き流しながら、俺は支度を済ませる。

「あ、それと言い忘れたがお主の名前は、小野 涉じゃ。健闘を祈る」

「了解です。では世界の意志、小野涉任務に向かいます」

ノヴァから貰った名を手に、俺は次元空間を開くとそこに身を投じた。

世界移動用の次元空間は白とピンク色が合わさったような空間だった。

俺はそこを目的地に向けて只々降りて行く。

「目的地までの距離は502キロ………かなり離れた世界の様だな」

俺はモニターに出た残りの距離の長さに絶句した。

まあ、これでも12時間あればたどり着ける距離だが。

「まあ、長旅になりそうだし。気を楽にするか」

俺はそう呟くと、体中の力を抜いて、ただ前に進むことを考えた。

出発から5時間半が経過した。
俺はモニターをチェックする。

「残りの距離は270キロ……まだ半分にも行っていないな。次元空間の状態も良好」

ここまでノンストップで来ているので、さすがに疲れも出る。

「世界の意志と言うのも因縁な仕事だ」

俺はそう呟きながら移動を続ける。

もちろん不満があるわけではない。

俺のような愚か者を二度と作り出さないようにするべく、俺は今まで頑張ってきたつもりだ。

だが、時々考えてしまう。

俺も普通の人のように生活してみたい。

世界に縛られずに暮らしたいと言う願望が。

まあ、考えたらすぐに消すようにしている。
世界の意志にあるまじき思想だからだ。
しかし、その時は近づきつつあった。

それは6時間が経過した時だった。

「な、何だ!？」

突如として次元空間内にノイズが走ったかと思うと、流れがおかしくなった。

『涉! 聞こえるか!? 涉!!!』

「おい、ノヴァ! これはどういう事だ!!!」

突然頭に聞こえてきたノヴァの声に、俺は叫んで問いただした。

『強い空間干渉じゃ! ものすごいエネルギーの為にそっちの空間にまで影響が生じ始めているのじゃ! 早く戻るのじゃ!! さもないと二度と帰れなくなるぞ!!』
「なッ!?!」

ノヴァの言葉に、思わず固まった。

この次元空間は、どのような干渉をも受け付けないはずだ。それをも覆らせると言うことは、かなりの最上級レベルの術式のようだ。

『わしのミスじゃ。ともかく急いで脱　　ザ　　ザ　　ザ　　』
「お、おい！！」

ノヴァの声にノイズが走り出し、とうとう完全に聞こえなくなった。

(これって完全にやばいよな)

俺は本能で察すると、急いで方向を180度変えて進む。

帰る時はのぼりになるため霊力を使って加速しなければいけないのだ。

俺は最高速度で空間を突っ走る。

突然けたたましく鳴り響くサイレン音とともに、モニターが表示された。

『異常発生。後方29キロにて不正ゲート出現、拡大中』
「何だと！？」

俺は最高速度で進みながら下を見る。

そこにはピンク色の陣が出来ていた。

あれは、魔法陣か！？

しかも拡大中ということ、こっちに迫って来ていると言う事かよ！？

不正ゲートと言うのは次元空間内に外部から強引に生成された出入り口の事を言う。

『警告！　不正ゲート後方15キロまで接近！』

サイレン音はアラートへと変化する。
下を見ると確かにその魔法陣は大きくなってきていた。

(とはいってもこれが最高速度だったの！)

「天界まで残り100キロ。逃げ切れるか!？」

それは賭けだった。

展開にたどり着ければあの魔方陣の干渉は受けられないはずだ。
しかし、先ほどまで断続的に鳴り響いていたアラート音が連続して
鳴り響き始めた。

『警告！ 不正ゲート後方5キロまで接近!』

モニターに出てきた警告に俺は心の中で毒つきながら駆け抜ける。
そして天界まであと25キロと言うところまで来た時だった。

『警告！ 不正ゲート後方1キロまで接近！ 至急緊急離脱をして
ください』
「っちい!」

俺は状況が悪化したことに舌打ちをした。

見ればもう目前にまで魔法陣が迫って来ていた。

ちなみに、緊急離脱と言うのは不正ゲートに飲み込まれる前に、ど
こかの世界に出ると言うものだ。

やってもいいのだが、出た世界が安全な世界であると言う保証はな
い。

最悪の場合には命まで取られかねない。

なので、俺は緊急離脱に踏み切れなかった。

「天界まであと5キロ。あと少しで」

俺の希望の心は、即座に消された。

そう、目の前に迫ったピンク色の魔法陣によって。

「うわああああ!!」

そして俺はその魔法陣に飲み込まれた。

辺りは真っ黒でピンク色の稲妻の様なものが走っていた。

そこで俺の意識は途切れていた。

今思えば、これが俺にとって運命を変えるきっかけとなる事件の序章でもあった。

第1話 たどり着いた世界は……… (前書き)

大変お待たせしました。

第1話になります

第1話 たどり着いた世界は……

「ん……」

俺はうるさく鳴り響く花火の音で目が覚めた。

「いつつ……ここはどこだよ」

俺は毒ずきながら辺りを見回す。
そこは何の変哲もない森だった。

（確か不正ゲートに飲み込まれたんだよな？ 俺）

状況を把握した俺は即座に行動に移した。

「コネクト」

俺はこの世界にアクセスすることにした。
俺が知りたいのは、ここがどこなのかという情報だ。
そして世界の因果情報や世界の根源を見れば、少しは分かるのだ。
しかし……

「弾かれた!？」

俺は驚きのあまりに思わず大きな声で叫んでしまった。
何と俺のアクセスを世界が拒否したのだ。

「管轄外の世界か。面倒な」

俺は状況の悪さに舌打ちをする。

俺の管轄する世界ではない場合、その世界をまとめる神にアクセス権を譲渡されなければいけない。

もちろんだが、ここに具現化している場合はそれがどの人物かを見分けるのは難しい。

まあ、理由の一つに力が弱いと言つのもあるが。

「それじゃ、まずは誰かがいる場所に行くとするか………ん？　なんだあれは」

歩き出そうとした時、俺は地面に落ちている二本の短剣を見つけた。

「どうやら僕は運がいいらしい。ここに来て新たな武器が手に入るとは」

俺はその二本の短剣を手に取りながら呟いた。

自分の持つ武装に不安がないと言ったらうそになる。

少しでも武器は多い方がいい。

「にしてもこれはちょっとな………」

俺は短剣を観察する。

それはリーチが異様に短く、しかも刃には罅が入っていた。

おそらく二、三回打ち合えば折れてしまうような感じもする。

「まあ、いいか　　ッ!？」

俺は突如伝わってきた黒い波動に短剣を放り捨てた。

「……………最終審判、レクリエム!!」

そして俺は超必殺技を使い、二本の短剣を破壊した。

「何ッ!？」

しかし、二本の短剣はまるで何事もなかったかのようにそこにあったのだ。

俺はこの時自分の運命と浅はかさを呪った。

「こいつは呪剣か」

呪剣

それはその名の通り呪われた剣の事を言う。

そのほとんどが持ち主に災いをもたらすもので、決して破壊も出来なければ手放すこともできないのだ。

「仕方がない。これを持って長い時間をかけて浄化するしかないか」

俺に出来る事はそれだけだった。

俺はそれを格納空間にしまつと歩き出そうとする。

「ッ!？」

その時、俺は何かを察知して後方に下がった。

その瞬間、俺の目の前を何かを通り過ぎたかと思った瞬間、まるでやわらかいものを切るように樹木が切り倒された。

「斧!？ 敵か!」

俺はすぐに辺りに気を配った。
しかしその人物はすぐに姿を現した。
茶髪のおじさんだった。

「ほう、この俺の奇襲を躲すとは、只者ではないようだな」
「突然攻撃してくるとは……………命知らずもいたものだ」

俺はそう言いながら己の武器である斧を取りに行くおじさんを見る。
そして気づいた。

「……………は？」
「どうした小僧？」

俺は目を疑った。

目の前にいるおじさんの頭にはなんと猫耳がついていたのだ！
しかもしっぱまで…！

（なつほど、ここはそつ言う世界か）

俺も色々な世界を見ているという自負がある。
なのですぐに納得がいった。

「何でもない、さてひ弱な物にこれを使うのも申し訳ないが、これ
しか武装はないのだ。許しておくれ」
「言いよるな小僧。くるがいい…！」

俺は両手に神剣、吉宗正宗を展開する。

「おりゃ…！」
「つぶ…！」

おじさんが放ったのは、鉄球だった。
しかしそれを俺は難なく躲す。

「はぁ!!」

「甘い!」

次はこっちに向かって突進しながら斧を振り下ろそうとする。
俺はそれを躲しながら正宗の柄で軽く小突く。

「ぐう!?!」

「不届き者よ、我が前にひれ伏したまえ! 拘束の壇上歌」

そして俺は痛みで動きを止めた一瞬のすきを突き、おじさんを白銀の光で縛りつけた。

「な、何だこれは!?!」

「貴方との戦いは非常に心が躍りますが、今はその時間がない故これにてお開きとさせていただきます。では、失礼」

俺はおじさんにそう言い残すと、素早く走りながら森を立ち去った。

第2話 勇者との遭遇（前書き）

今回、いよいよシンクたちが登場します

第2話 勇者との遭遇

さて、俺の今の状況は。

「だ、誰だ

ウギヤ!？」

「邪魔だ!！」

目の前にいる邪魔な人たちをひたすらに斬って斬って切り裂いていきます。

なんでそうなるのか、それはほんの数分前にさかのぼる。

「全く一体全体何なんだ？」

俺は頭を抱えながら走っていた。

周りの様子からに戦争の様なものであることは理解できる。
なのに……………

「この勇者、とても強い!！」

なぜ実況がいるんだ？

と言うつより、まるでスポーツのような雰囲気がある。なのに、目の前で行われるのはどう見たって戦争だ。

「はあ！」

「つと?!」

突然剣での襲撃があった。

目の前にはあのおじさんと同じ色の服を着た傭兵のようなものだった。

「ふん！」

「ぐあ!?!」

俺は剣劇を避けると正宗で思いっきり切りつけた。

その瞬間、目の前にいた人は煙に包まれた。

「……………は？」

煙が晴れた時に見た光景に、俺は思わず言葉を失った。

なぜなら、そこには猫の顔をしたボールのような生物がいたからだ。

「お前、ビスコッティの兵士だな!?!」

「かかれ!?!」

そして今に至る。

() と言うつより俺は今どこに向かっているんだよ!?!)

俺は当てもなく一直線に走っている。

「速い、速すぎる！！ この謎の人物は一体何者なのでしょうか！！」
「ん？」

再び実況をしている人の声が聞こえてきた。

空中に浮かんでいる正方形の物を見ると、そこには俺が映し出されていた。

「俺かよ！」

「もしかしたらビスコッティ共和国が召喚した二人目の勇者なのかもしれませんね」

だから勇者って何ぞ？

俺はツッコみたい気持ちを抑えてただひたすらに走る。

そして目の前にいる敵を切って行く。

けがはしてないから、大丈夫……だよな？

そんなこんなで走って行く行き止まりとなっていた。

そして下の方では短めの金髪に頭には青い鉢巻をした少年と、緑色の髪をした少女がいた。

話が聞けると思い、下に降りようとした瞬間向かいの崖に、下の二人に向けて攻撃を放とうとしている銀色の髪をした女性の姿が見えた。

「二人とも、後ろの上から攻撃が来るぞ！！！」
「ツ！！！！？」

俺は大きな声で下の二人に伝えたと、緑色の髪の少女が両手にある短剣でその攻撃を防ぐが、防ぎきれずに吹き飛ばされた。

「ほんのちびっと期待してきてみたが………所詮は犬姫の手下か」

「ッ!? レオンミシエリ姫!」

攻撃を放った人物に、少女はその女性の名前と思われる単語を呟いた。

「ちつち、姫ときやすく呼んでもらっては困るの」

その人物は何やら変わった生き物に乗っていた。

「わが名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子両国の王にして百十段の騎士」

そう言っへんな生き物が一步踏み出す。

「閣下と呼ばぬか、この無礼者が!」

「来たー!! 来ました! レオンミシエリ閣下、戦場到着!」

実況の人が何やらわめいている

「ははは! それはさておき、私は先に進ませて貰おう」

そう言って銀色の女性は去って行った。

「よっど!」

俺はすぐさま二人の横に着地した。

「うっ!?!」

「え、あ、うめん」

そして二人を見ると少女が上で、少年がしたに横たわっている状態だったが、少年は少女の胸を掴んでいた。

（何やってるんだ？ この二人）

その少年は自分の手を……というより感触を感じて少女を見て一言
呟く。

「女の子？」

「ッ！？」

その少年の言葉に少女は固まる。
俺も固まる。

「この……すつとこ勇者がああ！！！」

「吹っ飛べ！！！」

やることは一緒だった、俺と緑色の髪をした少女は少年を吹き飛ばした。

「おっと仲間割れか！？ そしてこの勇者、意外とあほか？」

「いちいち実況すな！」

今更突っ込んで遅いツッコミをする。

「まったく、胸揉んで拳句の果てには女の子だなんて失礼極まりない
だろ。どこをどう見れば彼女が男に見えるんだ？」

「ッ！？」

僕の言葉に横にいた少女が頬を赤くしていた。

まさか怒らしたか！？

「と、ところでだ。あんたは何者だ？」

「あーそれは後々、今はあの馬鹿者を連れて追いかけないと」

「そ、そうだな」

俺の提案に少女は頷くと俺達は少年の元へと走って行くのであった。

第3話 恐怖の紋章砲（前書き）

今回は少々短いです。

それでは、第3話をどうぞ

第3話 恐怖の紋章砲

今、俺達は閣下の走って行った方向に走っていた。
そして何やらクレーターのようになっていている場所に、そこを飛び越えている閣下の姿があった。

「させるかああ!!!!」

「あ、こら待て!!!!」

俺は駆けだす二人を止めようとしたがそれを聞かずに特攻していく。
むやみやたらに特攻をしてもいいことは一つもない。

現に閣下は変な生き物から離れて二人の武器がかち合った所に砲撃を放った。

俺は急いで、二人の元に駆けよる。

「おい、大丈夫か………つて」

今度は少女が下で少年が上になって倒れていた。
と言うより少女の服が一枚無くなってるんだが？

「勇者、お前は何なんだ！ 戦いの邪魔をしに来たのか!？」

「いや、お前ら二人のミスだから」

言い合っている二人に、俺はそうツツコんだ時だった。

背後からエメラルド色の光が輝き始めた。

俺は慌ててその方向を見ると、そこには閣下の背後には何かのマークのようなものが浮かび上がっていた。

その体にはエメラルド色の輝きを纏っている。

「おりゃ！」

手に持つ何かを地面に振り下ろした瞬間、何かの模様があしらったものが現れた。

「な、何だよ、あれ？」

俺がそう呟いた瞬間だった。

「獅子王炎陣！」

閣下の言葉と同時に、地面から火柱が吹き上がってきた。どう見ても危険な物には違いがない。

「のわぁ！？」

さらには上空からの溶岩まで飛んでくる始末だ。俺は急いで逃げた。

「紋章術って、こんなことまで！？」

「レオ姫は桁が違う！ 倒されたくなければ」「とにかく逃げる！！」「」

二人は意味不明の単語を呟いて走って行く。

「お、おい！！ これは一体なんだ！！」

俺の問いかけに答える人はいない。

「これはやばい！！ 万物よ、我を守りし」

「

俺はとつさに日本の神剣を十字に掲げて防御術の詠唱をする。
だが……

「大爆破!!!」

閣下の一言によって、周囲が赤一色になる。
やがて、けたたましい爆音が響き渡った。
俺はそのあまりにもすごい威力に目を閉じた。

3人称 S i d e

レオンミシエリの紋章砲、『獅子王炎陣大爆破』によって火玉と、
衝撃波が辺りを襲う。

「爆破あ！ レオンミシエリ閣下必殺の、獅子王炎陣大爆破!!!
範囲内にいる限り、立っていられるものは誰もいないと言う、超絶
威力の紋章砲。味方も巻き添えにしてしまうのが玉に傷ですが、そ
れにしても強い」

そしてそれが止むと再び大きな声で実況された。
レオンミシエリも勝利を予想した時だった。

「おっと！ その大技を受けながらも立っているものが一人います
!!!」

「何!?!」

男性の声にレオンミシエリは驚きを隠せなかった。
そして土煙が晴れ、その人物の姿が露わになる。

「先ほど突然現れた謎の勇者です！！ 謎の勇者がレオンミシエリ
閣下の紋章砲を受けて無傷で立っています！！！」

そこにいたのは、渉であった。

S i d e o u t

第4話 激闘！ レオンミシエリ閣下

「ふう、危なかった」

俺は両手に十字架に構えた神剣の構えを解く。

あの時、間一髪のところまで防御術の詠唱を終わらせることが出来たのだ。

「なるほど、さすがは閣下と呼ばれるだけはある。かなり強い」

「お主、一体何者じゃ？」

俺は閣下の驚きようを見ながら吉宗をしまつ。

「さあ、どうでしょうかね？ ですがとりあえずは降ってくる二人のための布石を打たせていただきます！！」

俺はそう告げると、卑怯とは思いつつも停止石を閣下に向けて投げる。

ちなみに形状は砂の様だが名前は石と言う字がついている。

「ツぐ！？」

これの効果はほんの2秒間、だがその2秒を俺は見逃さない。

「封陣滅殺！」

相手がせいこい技を使うのであれば、俺もそう言つのを待つまで。まさに目には目を、齒には齒をだ。

「それでは、後は二人の勇者に任せましようかね」

「そう簡単に………やられるかあああああああ——」

「にしても高すぎない？　ねえこれ高すぎない？」

上空には少女と少年の姿が。

おそらく上空に逃げていたのだろう。

するといきなり少女が少年を蹴り飛ばす。

「ひでえええ！——！」

少年は落ちながらも棒状の武器を振りかざす。

だが、閣下の斧とぶつかり合い、少年は吹き飛ばされる。

少年が着地すると同時に少女も閣下を挟むように着地する。

そして二人は同時に駆けだすと己の武器を振りかざす。

それを閣下は斧と盾で受けるが粉々に砕けた。

さらに二人は追撃する。

やがて二人の攻撃は閣下に命中した。

（あれ？　今のって）

その時、俺はあることに気が付いた。

だが、それを言うよりも早く、閣下の防具は粉々に壊れセクシーな姿になった。

「このまま続けてやってもよいがそれでは、ちと西国民へのサービスがすぎてしまうのう」

そう言ってセクシーポーズを決める閣下。

「レオ閣下、それでは……」

「ん……わしはここで降参じゃ」

その声と同時に花火が打ちあがった。

『まさか……まさかのレオ閣下敗北、総大将撃破ボーナス350点
が加算されます。今回の勝利条件はあくまで拠点制圧ですので戦終
了とはなりません、このポイント差は致命的、ガレット側の勝利
はほぼないでしょう』

もうポイントとかの意味もあまり分からないが、これでこっち側の
勝利だと言うことは分かった。

（つて、俺は何時こっち側の人間になったんだ？）

そんな疑問に駆られていると閣下がこっちに向かってきた。

「お主、名は何じゃ？」

「小野……小野渉です」

俺は閣下に言われて自分の名を名乗った。

「ワタルじゃな。わしの事はレオ閣下と呼ぶと良い」

「はい。レオ閣下」

俺はレオ閣下に言われた通りにすることにした。

「それと、ワタルとは次また機会があれば正々堂々と戦うつもりじ
ゃから、覚悟するように」

俺にそう言い残してレオ閣下は俺から離れて行った。
と言うより、あの卑怯なやり方の事根に持ってたんだ……
俺は苦笑いをしながら少女の方に向かう。
俺は向かう時に脱いでおいた礼装の上着を差し出した。
俺の礼装は上着が青と白の色合いだがその下は黒一色だ。

「な、何だこれは？」

「俺の礼装。良いから着ておけ。まあ、全員にサービスをしたいのであれば別だが」

俺はそう言ってその場を立ち去る。
少女は渋々と礼装を羽織っていた。
それからしばらくして礼装以外の服が破け、下着を残して裸になった。
た。

ちなみに原因は少年の武器が少女に当たっていたからだが。

「なんとという幕切れだよ」

しかしこの後が災難だった。

「この！ この！ この！」

「うわ！？ なんで俺まで追いかけてるんだよ！」

なぜか俺は少女に少年と共に追いかけていた。

「教えてくれなかったからだ！！」

まさに災難だった。

「しかしこの勇者達、強いすごいがやっぱり若干アホかもしれません」

「ほっという！」

「一緒にするな」

僕と少年はナレーターに突っ込んだ。
と言うより一緒にされるのは嫌だ。

「そして騎士エクレール、おいしい映像ありがとうございました！」
「ええい、やかましい！」

本当に勘弁してくれ。

第5話 事情説明（前書き）

かなり時間がかかりました。
第5話です

第5話 事情説明

あの後、この戦はビスコッティと言う国の勝利に終わったらしい。

「それから団長、今回華々しいデビューを果たしました勇者さん達にもお話を伺いたいんですが」

「え、あー。ゆ、勇者殿については追々明かしていくという事で、今回はその……」

実況の人の言葉に、取材に答えていた男の人　確かロランと言ったか？　は語尾を弱める。

「今回は謎だと？　ああ分かりました。ではその分団長からたつぷりとお話を伺いましょう！」

「はあ……ナイス判断です、兄上」
「だな」

俺は少女の眩きに答えながらある場所を見る。

「帰れない〜、僕はここから、帰れない〜」
「それにしても暗っ！」

あの金髪の少年勇者は、ここから帰れない事を知ってからずっと体育座りで落ち込んでいた。

「ところでだ、あんたは誰なんだ？」

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は小野 渉、世界を旅するしがない男だ。世界の移動中に突然こっちに飛ばされたんだ」

俺は自己紹介をしながらここに来る敬意を簡単に説明した。

「私はエクレール・マルティノツジだ。呼び方はエクレールでいい」

少女……エクレールと互いに自己紹介を果たしたところで、少年勇者を連れて町へ行くことになった。

町に着くと、近くにあったベンチに俺と少年勇者が座り、近くにあった台座らしきものにエクレールが座った。

「まあ、そつだよなあ……」

少年勇者は”けいたい”と言うものを取り出すと、その画面に表示されている”圏外”という文字にため息を吐いていた。

「異世界だもんな……」

「まったく覚悟もないのに召喚に応じたりするからだ」

少年勇者の言葉に呆れたようにエクレールはそう言う。

「覚悟っ！？ 覚悟も何もこのワンコが！ 踊り場から降りようとしたら、落とし穴を仕掛けて！」

少年勇者は俺の横で丸まっている犬を恨めしそうに睨んでから、エクレールに涙目で訴えた。

「落とし穴？ タツマキが」

すると”タツマキ”と呼ばれた犬は丸まった状態からその場に座り、首を振ってから世界移動中に見たのと同じような小さな物を地面に浮かび上がらせた。

俺達は興味津々にその小さなもの……紋章陣を見る。

「何々………ようこそフロニヤルド、おいでませビスコッティ」

紋章陣に描かれた文字を読むエクレールに犬は、紋章陣を指差すように手を紋章陣に向ける、

よく見るとものすごい小さな文字で何かが書かれていた。

「注意、これは勇者召喚です。召喚されると帰れません」

「え?!」

少年勇者はエクレールの言葉に青ざめながら声を上げた

「拒否する場合はこの紋章を踏まないで下さい」

「あ……あ……あ」

みるみる少年勇者が燃え尽きて真っ白になる。

良いように燃え尽きてるな。

「そんなん分かるかああああい!!」

燃え尽きた少年勇者はまたもや涙目で立ち上がりエクレールに詰め寄った。

「知るか！ 私に言うな！」

若干理不尽な少年勇者の問い詰めに、エクレールは少々キレ気味で答える。

だが、それも俺に言わせれば……

「これってある意味詐欺だぞ」

その一言に尽きた。

と言うよりこれは一体何語だ？

「……ふん、まあ貴様を帰す方法は学院組が調査中だ、時期に判明するぞ」

「……だといけど」

エクレールの言葉に少年勇者は涙を必死に堪えていた。

(何だか子供っぽいな)

俺は少年勇者の様子を見て思わずそう思ってしまつたのであった。

「とりあえず……まあ……その……なんだ、ワタルは別だがアホといえど貴様らは賓客扱いだ、ここでの暮らしに不自由はさせん」

エクレールは俺達に背を向けて言うと言つと懐から何やら袋を2つ取り出

少年勇者には大きな袋を、俺には小さな袋を手渡してきた。

「まずはこれを受け取っておけ」

「これお金？ いや、さすがにお金は……」

「戦場での活躍褒賞金だ。受け取りを拒否などすれば財務の担当者が青ざめる」

「というか何で俺までそんな大層な物をもらえるんだ？」

俺はエクレールに疑問を投げかけた。

確か俺がやったのは、二人に攻撃が来ることを知らせ、レオ閣下の紋章術を防いだことぐらいだが。

「お前はレオ閣下の紋章術を防いでさらには敵の兵士たちを倒していたことの褒賞金だ」

「そう言えば、あそこまで向かう時何かを切り裂いていたような気がしたんだけど……あれが敵だったのか」

「全く、お前は……」

思い出しながら呟いていると、エクレールは俺を呆れた様子で見ている。

「兵士達も楽しいから戦に参加している者も多いだろうが、褒賞金の支給は自分がどれだけ戦に貢献できたかが大切な目安だ。少なくとも参加費分は取り戻したいというのも本音だろうしな」

「え?! 参加費」

エクレールの言葉に少年勇者が驚気ながら声を上げた。

俺も少なからず驚いていた。

「やれやれ、これはかなり初歩的な所から教えてやらんといかな」

そう言っただけエクレーはやらやれと言わんばかりの様子で自分の頭に手を置いた。

その後街を散策しながらエクレーの説明が始まった。

「戦は国交手段でもあるが、同時に国や組織を挙げてのイベント興行でもある。今回はガレットと戦ったが、もっと規模の小さい……村同士や団体同士の内戦もあるな」

「村対抗の競技大会兼、お祭りみたいものか？」

「まあ、そんな言い方も……できるか」

少年勇者の例えに、エクレーが頷いた。

と言っただけ戦がお祭りって、本当にどうなってるんだこの世界は。

「戦の興行を行う際は、興行主が参加希望者から参加費用を集めて、それを両国がそれぞれに計上する」

再びエクレーが説明を始めた。

「そして戦を行い戦勝国が約六割、敗戦国が残りの約四割を受け取る。これは大陸協定で決められた基本の割合だ。分配した費用の内、

最低でも半分は参加した兵士の褒賞金に当てられる。この割合も協定で決まっている。そして残り半分が戦興行による国益だ」

本当にスポーツみたいだ。

普通の戦は協定もないし勝利した側がすべてを奪い取るというシステムだ。

まあ、不意土がある時点でシステムも減ったくれもないが。

「病院を建てたり、砦を作ったり、公務の為に働く者を養ったりなど、国を守る為に使われる」

「へえー」

エクレールの説明は終わったみたいだ。

「あとさ……えっと、本物の戦争っていうか、大陸協定つてのを守らなかつたり、人が死んじゃったりするような戦いとかは……」

「……歴史を紐解けばそういった争いも無くはない」

少年勇者の問いかけに、エクレールが答えた。

「特に魔物との戦いなどではな」

魔物って……… 本当にここは何でもアリだな。

「我々が戦で負傷せずにいられるのは、戦場指定地に眠る戦災守護のフロニヤカのおかげだ。それ以外の場所なら怪我もするし死にもする」

どうやら俺がここに来たときに感じた気はフロニヤカのようなだった。

「じゃあ、守護されている場所ってどれくらい？」
「元々守護力強い場所に国や町、砦が出来ているんだ。海道や山野は危険な場所が多いな、とくに海道は大型野生動物の危険度も高い。だが戦の為に移動する隊列に加われば逆に安全な旅が出来るとい
う利点もある」

そんな話をしていると大きなお城にたどり着いた。
どうやらここがフィリアンノ城と言う場所らしい。
そして俺は”リコ”と言う人物に会うべく中に入るのであった。

第6話 新たな出会いと今更の……（前書き）

今回はヒロイン候補にも挙がった人物が登場します。
そしてようやく名前が明らかになります。

第6話 新たな出会いと今更の……

早速だが今の状況を簡単に説明しよう

「もうし訳ないであります!！」

ビスコッティ城内の図書館の様な場所に響き渡る声、そして目の前で深々と頭を下げるオレンジ色の髪をした犬耳の少女だ。

名前は『リコッタエルマール』

学術研究院の首席らしい。

とは言え、それがどのくらいすごいことかは分からないが。

「このリコッタ・エルマール、誠心誠意、勇者様にご帰還される方法を探していたであります……力及ばず、未だ何ともどうにもこうにも」

そう言いながら何度も何度も頭を下げる少女に、俺は何ともいたたまれない気持ちになった。

(何だか俺達がいじめているような感じが……)

しかも周りにいる人たちも何事かとこっちを見ているし。

「いやリコ落ち着け。私も勇者達もそんなにすぐに見つかるとは思っていない」

「え!？」

エクレールの言葉に俺の隣にいる少年勇者が驚きの声をあげた。

「まあ、俺としては戻れる戻れないなんて関係ないし」

「えう……そ、そうだよ、うん」

「本当でありますか？」

俺達の言葉にリコッタ（本人曰く呼び捨てでいいとのこと）は心配そうにそう言いながら顔を上げ俺達を見る。

「期限について何か言ってたな、いつまでだ？」

「ええつと……春休み終了の三日前………の前日には、家に居ないといけないから………あと16日だ」

エクレールの問いかけに少年勇者は考え込むと期限を提示した。

「俺の場合は期限は31日ぐらいでいい」

それに倣い、俺も期限を言った。

「16日に31日！ それなら希望が湧いてきたであります！」

少年勇者の言葉にリコッタは笑顔でそう言った。

「うん、お願いします。でもその前に……」

そう言いながら少年勇者は、携帯電話を取り出してリコッタに見せた。

「召喚された穴の所に行ったら、電波通ったりしないかな？」

「……………でんぱ？」

少年勇者の言葉にリコッタは不思議そうな顔をする

もしかして電波の事を知らないとかではないよな？
俺の場合は見たことはないが、知識はあるのだが……。

「そういえば勇者様、こちらの方は勇者様のご友人でありますか？」
「え？ 違うけど……そう言えば君は誰だっけ？」

リコッタの問いかけに、少年勇者が今更な事を聞いてきた。

「今更それを聞くか……まあいい、俺の名前は小野 渉だ。呼び方は任せる」

「シンク・イズミです。呼び方はシンクでいいよ。よろしく」

俺の自己紹介に、少年勇者……もといシンクはそう言いながら笑顔で、片手を差し出してきた。

俺はその手を取ると握手を交わす。

「渉様ですね！」

「リコッタ、様付けはやめて……寒気がするから。それに俺は様付けされるほど大層な身分でもない」

俺はリコッタにそう告げた。

俺は様付けされるのが微妙に嫌いなのだ。

元々俺の場合はそんなに偉い人物でもないのだ。

「それでは、渉さんで」

「うん。それでよろしく」

とりあえず一通り自己紹介が終わったので、俺達はシンクが召喚された場所へと向かうのであった。

第7話 訪れた先は……（前書き）

未だにアニメで換算すると第3話です。
それでは、どうぞ

第7話 訪れた先は……

今俺達は高台へと来ていた。

どうやらここがシンクが召喚された、召喚台になるらしい。

「くっ………ぬううううう！！ やっぱり通れないっ！！！」

そんな中、シンクはエクレールに紋章を出してもらって通ろうとしているが、結局無理だったようだ。

ちなみにリコッタは大きな動物 セルクルと言ったか？ に積んでいる機械を操作していた。

「だから言っているだろうが」

紋章から手を抜いたシンクに、エクレールが呆れながら言った。

「人生なんでもチャレンジ！ ネバーギブアップ！！」

エクレールの言葉にシンクは熱血教師のような台詞を言いながら再び紋章に手を入れようとしていた。

「時には諦めることも肝心なんだけどね」

俺はボソリとつぶやいた。

ちなみに俺は時空間の移動ゲートを出そうとしたが、何かに弾かれてうまくいかなかった。

(まあ、転送術が使えるだけでも儲かりものかな)

俺が使える転送術は半径500m範囲内ならどこへでも一瞬で行くことができる物だ。

使いどころとしては奇襲程度しかないが。

「勇者様、準備整ったであります！」

その時間こえたりコッタの声にシンクとエクレールは後ろを振り向いた

「えっと……それは？」

シンクは、アンテナのついた機械を指差しながら聞いた。

「これは放送で使うフロニヤ周波を強化・増幅する機械であります。自分が五歳の時に発明した品ですが、今は大陸中で使われているのでありますよ」

ある意味天才だなと俺は心の中で思っていた。

そんな中、リコッタはレバーを操作して機械を動かした。

「では、勇者様」

先程からポカーンとしているシンクにリコッタはそう言う。

「あつ、ああ、うん」

シンクは自分の携帯を取り出し、画面を確認する。

俺は少し興味があったので、シンクの横から携帯の画面を覗き見ると圏外と表示されていたのがアンテナのマークに変わった。

「うおおおおお！ 立ったああああ！！ 凄い！ リコッタ凄い
！！」

「ありがとうございます！ 感激であります！！」

シンクの言葉にリコッタも嬉しいのか敬礼のポーズをとった。

そしてシンクはどこかに電話をかけた。

俺は話の内容に興味もなければ聴く気もないので、少し離れた場所
で辺りを見ていた。

しばらくすると、電話を終えたのかシンクは携帯電話を閉じた。

「リコッタごめん、もうちょっと繋げてていい？ まだ他にも連絡
したい人がいるんだ」

「大丈夫でありますよ」

シンクのお願いに、いやな顔一つもしないリコッタ。
そう、ここまでは。

「あ、勇者様」

「ん？」

「良ければその”でんわ”と言う機械、後で調査させていただきな

いでしょうか？」

リコッタはそう言うと、シンクの方に迫って行った。

「え、え、え!?!」

「ちよおっただけ分解して、構造を知りたいのであります。見知らぬ機械を見ると自分は、尻尾の付け根と研究心がキュウキュウしちやうのであります」

あ、さつきから腰を振っていると思っていたら、しっばだったのか。と言っよりツッコミどころ満載だな。

「ああ、いやいやいや!」

シンクは慌てて携帯を後ろの方に隠した。

「平気であります、後でちゃんと元に戻すのであります」

「分解しちやうと保障が聞かなくなるんだって!」

シンクはそう叫びながら逃げ出した。

「大丈夫であります! 自分が補償するであります」

「うわ! その補償じゃなくて、電話会社の!」

僕は二人が走っているのを呆れてみていた。

「天才となんとかは紙一重と言っが……あれは一種の病気だな」

いや、病気と言っよりは中毒か?

と言つよりシンクはさつきからアクロバティックな回避をしている。

「はは！ それは心強い」

いつの間にか俺から離れていたエクレールが、嬉しそうな声を上げた。

と言つより、あれって電話か？

「エクレ、何か朗報が？」

シンクの手首を掴んでいたリコッタが、手を離してエクレールの方を見る。

「ダルキアン卿が戻ってこられる！」

「本当でありますか！？ ならユッキーも一緒でありますね」

「ああ！」

どうでもいいんだが、一体誰なのだ？

「誰？」

そう思っているとシンクがエクレールに尋ねた。

「ビスコッティ最強の騎士、ダルキアン卿と我らの友人ユキカゼだ」

「二人ともとっても頼りになります」

シンクの問いかけエクレールとリコッタが答える。

（最強の騎士か。強いんだろうな）

俺は今度手合わせでもして貰おうかと考えていた。言っておくが、俺はバトルジャンキーではない。

ただ単に相手の力量を見るのが好きなのだ。

ちなみにリコッタはそう言いながら、シンクの携帯に目の焦点を合わせていた。

その眼は完全に獲物を狙う目だ。

そんな俺の耳に何かの鳴き声が聞こえてきたので、その声の方向を見ると……

「ああ〜珍しいでありますな、土地神様であります」

半透明のカエルのような生物と目玉一つで妖怪みたいな生物がいた。と言うより、今聞き捨てならない単語を聞いたような気がした。

「土地神？」

「貴様は本当に何も知らんな……土地に暮らす精霊に近い生き物だ」

「土地神様がいらっしやるのは自然の実りが豊かな証なのであります！」

シンクの問いかけにエクレールの説明に続けて、リコッタもそう言った

「へえ〜」

（土地神？）

俺がこの世界に干渉する絶対条件は、ここを担当する神に許可を取ること。

ここで言うなれば土地神だ。

今日の前にいるのは絶対にこっちの言葉を理解できない。

もし出来ても俺が向こうの言葉を理解できない。
つまり、俺の希望は潰えた事になる。

(まあ、それならそれでいいか)

俺は天界に戻ろうという気はないので、戻れないのならそれはそれでいいかなと考えていたのだ。
但し問題は体の方だ。

「涉、ぼさつとしてるんなら置いていくぞ」

「お、おい！ まってくれ！！」

俺は立ち去るエクレールを見て、考えるのを中断すると慌てて後を追った。

(ま、いつか)

それが俺の出した最終的な結論だった。
そして俺達は、召喚台を後にするのであった。

第8話 お約束の（前書き）

今回はお約束のお風呂突入です。

第8話 お約束の

召喚台からお城の方まで戻ると、辺りは暗くなっていた。

「姫様のコンサートに汗臭い姿でこられても困る。コンサート前に風呂を使って来い」

「風呂ってどこで？」

エクレールの指示にシンクがお風呂の場所を尋ねる。

「案内図もありますし、中の人間に聞けばわかるでございますよ」

リコッタの説明に、俺達は納得した。

そして俺達はお風呂場へと向かったのだが……

「誰もいないんだけど」

「……………」

お城の中には誰もいなかった。

案内図らしきものもあることにはあったが、字が読めない。

「ねえ、渉。みんなコンサートの準備で忙しいのかな？」
「さあな。というより、風呂場ってどこにあるんだ？」

シンの疑問に、俺は適当に答えると風呂場を探す。
あれからかれこれ数十分はお風呂場を探し回っている。

(あ、そう言えば異国の字を読めるようになる術があるんだった)

俺はいまさらな事を思い出した。

異世界に行くときに字が読めないのは、非常に危険だ。
よって字が読めるようにする神術があるのだ。
それを俺は忘れていた。

(……………掛けておこ)

俺は気を取り直して神術をかけた。

これでこの世界の文字は俺の知る言語になるはずだ。

「ん？ あれかな？」

そんな中、シンクが立ち止まりどこかを見ていた。
そこにはなにやら大きな建物がある。

「とりあえず行ってみるか」
「そうだね」

舗装された道を小走りで進むと沿道が俺達の動きに合わせて光って
いった。

本当にここの文化レベルがわからない。

すごいんだか、そうでないんだか……。

なかは明るく解放的な空間になっていた

奥の方は敷居で遮ってあり、その向こうにも何かがありそうだった。

「あ、ロッカー。イエス！ 大正解！」

テンション高めに喜ぶシンクをよそに、俺は服を脱いでいく。

そして神術で創造したタオルを腰に巻くと、浴場の入り口の張り紙に目を通した。

そこにはこう書かれていた。

『Open spa . This time for ladies
only』

(なんで英語なんだよ)

どうやら翻訳の指示を間違えていたらしい。

直訳すると『大浴場。この時間は女性専用』と記されていた。

(下の方にも何か書いてある)

張り紙の様な紙に誰かの絵が描かれていて、再び英語が書かれていた。

『In miru hiore now』

(ミルヒオレが中にいます………どういう意味だ)

「どうしたの難しそうな顔をして。早く入ろうよ」

俺は首傾げていると突然シンクに手を取られた。

「え、あ、おい！！」

「ひゃっほおー！」

俺は突然の事になすすべもなく大浴場へと強制的に連れていかれた。もう嫌な予感しかしない

「うわーすごいやー。露天だ」

確かに中はすごかった。

横には数本の柱が立っていて、中世のヨーロッパにきたような印象を受けた。

そんな中、俺とシンクは階段を下りて行く。

すると、シャワーの音がした。

「あれ？ 先客さんかな？ って、どうして浴は後ろを向くの？」

「……………」

突然後ろを向いた俺にシンクが聞いてくるが、俺は何も答えない。

俺はシンクを浴場から連れ出そうとするが、シンクは音のした方に近寄って行く。
そして……

「勇者様？」

「……………」

一瞬静かになった。

俺は振り向かないとばかりに出口の方を見続ける。

そしてその静寂は桶が地面に落ちる音で一気に消え去った。

「きゃあ！」

「うわあ！ 見てません！ 何も見てません！！」

慌てた様子で騒ぐシンク。

俺はため息も出なかった。

つて、そう言えば俺もここにいるんだからシンクの共犯！？

「すみません。勇者さまの前でこんなはしたない」

（あんたが謝るのかい！！）

俺は心の中で突っ込む。

「え、いやあの僕、まさか人がいるだなんて……まさか姫様がいるなどと思わなくて、本当にすみません」

シンクはそう言いながら俺の横まで移動すると、地面に落ちた桶に足を取られた。

「うわあ!?!」

そして俺を巻き込んでお湯の中に落ちた。
俺はすぐに後ろ向きで浮かび上がった。

「ごめんなさい、私普段はこの大浴場には入れない物ですから、こ
ういう時ぐらいはって」

「えっと、こっちも色々とすみません」

俺は出鼻をくじかれながらもなんとか謝れた。
諸悪の根源のシンクはお湯の中に沈んでいた。

「あ、あの私もう上がりますので、勇者さまたちはどうぞいゆっく
り!?!」

そう言ってその人は去って行った。

「ぶは!?!」

沈んでいたシンクは思いつきり立ち上がった。

「シンク!?!」

「あ、あの、勇者さま」

俺が怒り心頭に叫ぶのと同時に声がした。

「は、はい!」

声のした方を見ると、そこにはバスタオルを巻いた桃色の髪をした
少女の姿があった。

この時、俺は初めて少女の姿を見たのだ。

「召喚の事とか、これからの事とか。勇者さまたちにお話したいこととかいっぱいあるんです。ですから、コンサートが終わったら少しお時間頂けますか？」

「は、はい！ それはもちろん」

「ありがとうございます。また後程」

そして少女は去って行った。

「はあ」

「シンク、貴様」

俺はシンクを睨みつける。

「な、何かな？」

「明日鍛錬に付き合え！！ 徹底的にしごいてくれる！！」

俺の機嫌も最悪な状態だ。

「そ、そう言えば、ここ女湯じゃ……ないよね？」

「それはな」

俺が答えようとした時だった。

「きゃああー！！」

突然何かが割れるような音と共に、少女の悲鳴が響き渡った。

「姫様！」

「うちらはミオン砦で待つてるからなあ」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けにこられますか？」

そんな事を突っ込む間もなく、どんと話を進めていく三人。

「つまり大陸協定に基づいて要人誘拐奪還作戦を開始させていたできたと思います。こちらの兵力は200。ガウル様直下の精鋭部隊」

「で、ガウル様は勇者様のどちらかとの一騎打ちをご所望です」

「勇者さんが断ったら、姫様がどうなるか」

(どいつもこいつも……)

俺の中で何かが切れて何かが目覚めた。

「受けてたつに決まってる！ 僕は姫様に呼んでもらったビスコッティの勇者シンクだ！ どの誰とだって、戦ってやる！！」

「上等だ！！ 貴様ら諸共、この小野 渉が灰にしてくれる！！！」

なのでそう叫んでしまった。

こうして、姫様奪回戦は幕を開けてしまったのである。

第9話 姫様奪還戦開始！（前書き）

と言いつつで、今回よりいよいよミオン砦戦です。

第9話 姫様奪還戦開始！

ナレーターが実況を初めているさなか、俺とシンクは外へと向かっていった。

それはエクレールと合流するためであったのだ。

「あ、エクレール！ 丁度いい所に…… 大変なんだ。姫様が攫われちゃって、だから僕達急いで助けに」

そこにいたのはものすごい速度で走りながら、こっちに向かってくるエクレールの姿。

（こ、怖ッ！？）

その表情はまるで鬼を思わせるような感じだった。

なので俺は何があっても大丈夫のように回避する準備をした。

「こっの、ど阿呆おおがああああー！」

そして俺の予想も的中し、エクレールがとび蹴りを仕掛けようとしてきた。

ちなみに俺の位置はシンクの左側、つまりはエクレールのとび蹴りの攻撃範囲内だった。

俺は即座に後方にバックステップで回避するが、シンクはものの見事にとび蹴りを喰らい柱の方に吹き飛ばされた。

「痛いよ！ 何すんの?!」

「それはこっちのセリフだこのど阿呆！ 勝手に宣戦布告を受けてどういうつもりだ!!」

「はっ、はい？」

エクレールの罵声に、シンクが首を傾げた。

そしてこつちをものすごい形相で睨みつけてきた。

「そして涉は避けるな！！」

「避けるわ！！ 誰が嬉しくてわざわざ痛い目にあうか！！」

俺はエクレールにもう反論した。

俺は別にマゾではないからな！！

その後俺達は急いで姫様のいる場所へと向かうのであった。

3人称Side

「宣戦布告を受ければ、公式の戦と認めた事になる。普段の戦闘ならいざ知らず、よりによって姫様をあまつさえこんなタイミングで……」

ミオン砦に動物……セルクルに乗って向かっている時、エクレールはシンクに対して怒鳴っていた。

「コンサートの姫様の出番まで、あと一刻半しかないんだぞ？ ……聞いているのか勇者！」

後ろにいるシンクに、エクレールは若干キレ気味に怒鳴った。

「きつ、聞いてっつわあああ!? 聞いてる!」

「大体、貴様は何でまともにセルクルにも乗れんのだ!! 黒音は普通に乘れてただろうが!」

今にもセルクルから落ちそうなシンクに、エクレールが怒鳴りつける。

宣戦布告の一件でエクレールの機嫌は最悪であった。

「そんな事言われてもー!」

「エクレ、あんまり怒ると血管切れるでありますよ?」

リコッタの心配そうな言葉に、エクレールは前方へと顔を向けた。

「……エクレール、リコッタごめん。勝手な事して」

しばらくの間無言であったが、突然シンクが口を開いた。

「僕の世界では、悪者が姫様を誘拐するのって、大変な事なんだ、だから」

シンクはそう言いながら体制を整えた。

シンクの言葉に、リコッタやエクレールは少なからず驚いている様子だった。

「黙っていられなかった! ……でも大丈夫! 姫様も助けるし、コンサートにも絶対間に合わせる!」

シンクはそう言いながら神剣『パラディオン』を手に具現化する。

「ふんっ！ ……当然だ」

「自分も微力ながら、頑張るでありますよー！」

「うん！ ありがとう！！ リコッタ、エクレール」

エクレールとリコッタにお礼を言うシンク達は、ミオン砦へと向かう。

「む、そうだ。渉はどうした！」

「あれ？ そう言えばさつきから静かで……って、いない！？」

エクレールの問いかけに、シンクは後ろの方を見るが、そこには誰もいなかった。

そう、なぜか渉の姿はなかった。

「最後に私が見たのは、セルクルがいる場所です」

リコッタが知っていることを告げた。

「と言うことは……」

「あの馬鹿者！！ こんな時に一体何をしておるのだああああ！！」

シンクの仮定をいち早く悟ったエクレールが、本日最高ボリュームで怒鳴り声を上げた。

これには二人は苦笑いを浮かべるしかなかった。

ちなみに、その頃渉はと言えば……

「ですから、セルクルにお乗りになった方がいろいろと便利ですよ、申しあげております!!」

「だ・か・ら! 俺はセルクルとかいう動物ではなく自分の足で行きたいだつて!!」

見送りに出ていたメイドの人と言い争っていた。

その原因は渉がセルクルに乗るのを拒否したからである。

「くどい!!! 一体何度言わせる気だ!!!」

「貴方こそ!!! いい加減分かってください!!!」

二人の喚き声が夜の空に響き渡るのであった。

第10話 合流（前書き）

今回の執筆に2時間はかかりました。
出来はあまり期待しないでください。

第10話 合流

3人称Side

「…………ふっ!」

「っ…………ぐう…………!」

ミオン砦内に武器と武器がぶつかり合う金属音が響く。

砲術師のリコッタのサポートもあって、何とか辿りつけた二人だが、中で待ち構えていた敵兵士の数の多さに圧倒され、ついに逃げ場が無くなった。

「ふはははは!」

そんな時高々い笑い声と共に、ガレット獅子団の將軍でもあるゴドウィン・ドリユールが姿を現した。

「親衛隊長も勇者も恐るにたらず!」

「リコからの砲撃、止まっちゃってるけど?」

ゴドウィンの言葉にシンクは、背中合わせのエクレールに小声で話しかける。

「無理もない、砲術師は歩兵に詰められれば無力なんだ…………むしろここまでよくもってくれたと褒めてやりたい」

「勇者の坊主は我らが主、ガウル殿下のご使命だ、広場まで来てもらおう!」

ゴドウィンの言葉と共に、歩兵達が一步前に踏み出した。

「小娘の親衛隊長に用はない。降参するなら、許してやるぞお？
んん？」

「断る！」

ゴドウインの提案をエクレールは即答で答えた。

「んん?!」

そんなエクレールの言葉に、ゴドウインは眉間にシワを寄せた。

「……そうか、なならば、少々痛い目を見てもらおうかああ!!」

兵士が差し出した鉄球の付いた大きな斧を手に取りながら、ゴドウインはそう言った。

「「^{エクレール}勇者!!」」

そんな時、二人はほぼ同時に声をかけた。

「……なんだ？」

「……そつちこそ」

しばらくの静寂ののち、二人はそれぞれの提案を話す。

「いいかよく聞け!!」

「エクレこそ！」

「「僕（私）がここに残るからエクレ（貴様）は先に！」」

二人はほぼ同時に言いきった。

しかも内容も同じだ。

「……………え？」

「だああああ！！　なんでかぶるの！！」

「それはこっちのセリフだ！　このスットコ勇者が！！」

そして二人は痴話げんかを始めた。

Side out

俺は迷彩と気配の遮断をしてミオン砦内に侵入することに成功した。
ちなみにメイドさんの隙を狙って強行突破した。
そんな俺を待っていたのは……

「いいから行けって！　ここは危ないんだし、エクレなら砦の中とか詳しいでしょ？！」

「足止めなんて難しい戦場、貴様に務まるわけなかるうが！　貴様こそさっさと行け！」

二人の痴話げんかだった。

いや、これは言い争いとも言った方がいいか？

シンクとエクレールの二人はこの世界に来たときに軽く戦ったおじさんと、歩兵達の前で痴話げんからしき言い争いをしていた。

理由は、どっちがここに残るかであった。

そしてこの二人のやり取りにおじさんの眉間のシワも、だんだんと大きくなっていった。

俺は不意打ちが出来るようにタイミングを見計らっていた。

「女の子を危険な目に合わせる訳にはいかないの!」

「いいから行けて、言ってるんだろ?!」

それを知ってか知らずかは分からないが言い争う二人。

「ここは僕に任せて!」

「いいから行け!」

(おい、そろそろおじさんが限界を超えるぞ?)

心の中でそう警告を出す。

「もおう! 頑固だなー!」

「うるさい!」

そして、とうとうその限界が来た。

「ガキ共お! この土壇場で、楽しいやり取りしてんじゃねええ!

!」

「ッ!?!?」

おじさんは怒鳴りながら鉄球をシンクに向けて放り投げた。

「呼ばれなくても、ド派手に登場!」

俺は今だと思い、シンクの前に迷彩を解除して移動すると正宗を前方に突き付けるように構える。

「盾！」

その次の瞬間、とてつもない重圧が俺を襲う。

「涉！？」

「……つく！ おまけに一発！！」

俺がそう叫んだのと同時に、目の前にいた歩兵の半分が獣玉になった。

そして俺の横に突き刺さるのは、神剣吉宗だ。

「うおりゃああ！！」

そして俺は鉄球を横にそらせることで、対処すると盾を解除した。

「悪い、かなり遅れた」

「遅れすぎだ！！ 一体何をしていた！！！！」

エクレールの怒鳴り声が耳に響く。

「あー、それは後で。今は……」

「お主は、今朝の小僧か」

俺は目の前にいるおじさんに意識を集中する。

「ええ、そうです。それにしてもこれは偶然？ それとも作為？」

「そおんなことはどうでもいい！ 今朝の決着を、つけさせてもらおおうではないか！！」

おじさんは手に斧を、俺は両手に神剣を構える。

と言つより、あのおじさん縛り付けられて負けたのがよっぽど嫌だったようだ。

そんな時、紫色の何かが何処からともなく、おじさんの背後を狙うように向かってきた。

それをおじさんは斧で受け止める。

「ぬおおおお!!」

やがて斧の方が勝ったのか、それは大きく弾かれ、俺達の後方に突き刺さった。

「この刀は……!!」

エクレールが刀を見て声を上げた。

「塔馬より失礼仕った!!」

その声と共に俺達はミオン砦の屋根の方を見上げた。

そこには笠のようなものをかぶり、右手に杯を持った凜々しい顔の女性と何やら小動物がいた。

どうやらこの人がさっきの奇襲を仕掛けたらしい。

「おお、久しぶりでござるなエクレール。しばらく見ない内に大きくなつた」

「ダルキアン卿!!」

「ダルキアンだとお?!」

エクレールの言葉に、おじさんはそう言いながら、その方向を睨んだ。

「いかにも、その斧將軍と勇者殿達には、お初にお目にかかる。
ビスコッティ騎士団自由騎士、隠密部隊棟梁『ブリオツシュ・ダル
キアン』」

ブリオツシュはそう言つと、巻物を取り出しそれをこちらに向けて
広げた。

「騎士団長ロラン殿からの要請を受け、助太刀に参つた！」

そんな時、やぐらのような場所から光何かがあった。

「危ないっ！ 後ろ！！！」

それに気づいたシンクはブリオツシュにそう告げると、刀を構えた

「紋章剣」

その台詞と共に、ブリオツシュの背後に紫色の紋章が現れた。

「烈空一文字ッ！」

そしてブリオツシュは身体を回転させながら、居合いと共に矢が射
られた方へ刀を払う。

さらにその斬撃は矢を吹き飛ばし、弓兵達のいるやぐらを弧月状に
斬り裂いた。

斬り裂かれたやぐらは斜めに傾き、そのまま地上にいる歩兵達を道
連れにして地面へと落ちた。

俺はその一連の動作に、言葉を失った。

その動きに無駄はなく、そう言つた催し物であれば間違いなく一番
華麗で、最強の座に君臨できるほどの力だった。

「いやあく助かったでござるよ、勇者殿」

そんな俺の驚きをよそに、ブリオツシユはシンクに笑顔でそう言う。

「あつ、いえ！」

「お、口上の途中でござったな……えーと、どこまで話したか？」

ブリオツシユは隣にいる小動物にそう聞くが、鳴き声をあげた。

おそらく犬であろう。

あまり関係はないから深く考えないようにした。

「まあともかく、押しかけ助っ人の推参でござる、さあ！ いざ尋常に」

ブリオツシユの台詞と共に、城外から花火が上がり、笑顔で刀を構えている彼女を照らした。

「勝負でござるー！」

(しかし、この花火……誰がやってんだ?)

俺の疑問も尽きることはない。

第11話 ジェノワーズ（前書き）

渉の相手が、今回明らかになります。

第11話 ジェノワーズ

今俺は走っている。

と言っよりすごい光景だ。

花火が上がったかと思えば今度は空爆だ。

「エ、エクレ、涉。なんかすごいんだけど」

「ぼやくな走れ！」

「この程度まだまだ序の口だ」

セルクルに乗るエクレールをしり目に、俺は辛苦にそうツッコんだ。

「ダルキアン卿！エクレール・マルティノツジです！！」

エクレールはブリオツシュに大声で呼びかける。

「おう！」

対するブリオツシュは歩兵を切り倒しながら答えた。

「我々は中に突入いたします！ 姫様の救出に」

「おお、存分に努めてくるでござる」

エクレールの言葉に、ブリオツシュはそう答えながら歩兵の攻撃を鮮やかにかわす。

「ここは拙者とユキカゼに……」

ブリオツシュはそう言うと、剣を振り上げ紋章を発動させた。

「はあ!！」

そして剣から放たれた斬撃波で、多くの歩兵達が獣玉へと変わって行く。

「まかせるでござるよ」

おじさんに剣を向けながら笑顔でそう言った。

「俺はエクレールと共に行く。お前の獲物は一騎打ちをこそ望らしいからな」

「了解！」

「し、仕方ないな。そこまで言うのなら連れて行ってやるわ」

受け答えるシンクに対して、エクレールはそう言いながらそっぽを向く。

(俺、そこまでお願いしたか?)

俺は、そんな疑問を感じつつエクレールと共に走るのであった。

しばらく走った俺達は、ある人物たちと対峙している。

「やはり、貴様ら三馬鹿が出てくるか」

エクレールがやれやれと言った様子でつぶやく。

三馬鹿と呼ばれた三人はあの、ジエノワーズと言う奴らだった。

「誰が馬鹿ですか！」

「馬鹿っていう人が馬鹿」

「そつや！ バーカ、バーカ」

ウサギ耳で弓を手にする女性に続いて、短剣を手にする黒髪の少女、大きな斧のようなものを手にするトラの姿を彷彿とさせる姿をした少女の三人が言い返してくる。

（餓鬼か）

俺は呆れながら内心でつぶやく。

「貴様らの相手は、いろんな意味で頭が痛いが……」

「同じ親衛隊同士、このノワール・ヴィノカカオが通せんぼ」

「同じくベール・ファールタン。エクレちゃん、正々堂々と勝負です」

「まっ、三体二やけどな。ジョーヌ・クラフティ頑張るよあ〜」

ヴィノカカオは短剣を、ファールタンは弓を、クラフティは斧を構える中、エクレールも双剣を構えた。

「ビスコッティ親衛隊長、エクレール・マルティノッジ。切り抜け

て進ませてもらおう」

「同じく小野 渉。機嫌が悪い時にちよっかい出すとどっとなるか。たっぷりと叩き込ませて貰おう!」

そして、俺達の戦いが幕を開けるのであった。

第12話 戦闘(前書き)

今回は、渉がチートです。

第12話 戦闘

クラフティが大きな斧をこちらに向けて振りかざす。

「はあ!!」

「炎天の輝きよ、我らを守りたまえ」

俺はそれを目の前に防御壁を展開させるだけで受け止める。

「なッ!?!」

「っふ!」

驚く彼女に神剣を振りかぶる。

だが、感触がない。

どうやら避けたようだ。

しかしこちらは一人ではない!

「エクレール!! 今だ!!」

「分かって

」

エクレールの前方には、複数のナイフを手にしたヴィノカカオの姿があった。

彼女もそれを認識している。

そして、それは一斉に放たれた。

俺の方は壁によって守られているため大丈夫だが、エクレールの方が心配だ。

「ベール」

「はい」

ヴィノカカオの呼びかけに、ファールブルタンが矢を射る。

「させるかあ！！」

「な！？」

俺は即座に展開した防御壁で防ごうとするが、中々の威力で押しつぶされそうになる。

なので、それを上空の方にベクトルを動かすことで、なんとか直撃は回避し俺達は体勢を整えた。

(三人の連携はほぼ完ぺき。これを崩さない限り勝利は難しい。それにここは大技を出したりすれば周りにけが人を出す可能性もある)

状況は悪いの一言だ。

今やるべきことは、この三人の連携を崩すことだ。

(崩すは無理だが隔離は出来るか)

俺はある術を思い出した。

それは本来、閉じ込めるための物だが、隔離するには十分の物だ。

「エクレール、これから俺が連続攻撃を仕掛けその後二人を隔離させる。それまでのフォロー、頼めるか？」

「そんなこと、できる訳が………まあいい、渉の作戦にかけてみよう」

エクレールは渋々と言った様子で、俺の提案をのんでくれた。

「さあて、お三方よ、防御と命乞いでもしておけ！ 世界よ、我が

言葉に耳を傾けよ」

俺は詠唱を始める。

「この場に剣の雨を降らしたまえ。行け、レインソード」
「ッ!？」

俺の一言共に放たれた無数の剣は、三人に容赦なく襲いかかる。

「すごいけど」

「無駄」

「ですわよ!」

三人はそれぞれの武器でその剣を防いでいく。
だが、それは俺にとっては一種のジャブだった。

「世界よ、我が言葉を聞きたまえ。我がいる場所とかの者達二名を
隔離したまえ」

「なッ!？」

「うそ!？」

俺がやったのは空間隔離。

要するに、三人を隔離したのだ。

俺の前にはクラフティとファールブルタンの二名、エクレールの前には
ヴィノカカオがいる。

「引つかかったな。三人は最強だけど、分断されれば大したことは
なくなる。ちなみにその壁はどんなに強い攻撃をしても壊すことは
不可能だ」

「なるほど、やりますね」

俺の作戦に、そう言ってくる。

はつきし言っつて卑怯な手ではあるが、手段は選んでいられないのだ。

「では、始めましょうか。その幸せ、奪います。ロスとハピネス！」

俺は今いる空間に宿るフロニヤ力の力を吸収した。

それを使い、俺の防御力をさらに高め、二人の防御力を低くしたのだ。

「おりゃああああー!!」

「よつと」

「隙だらけですよ」

「ほいつとー!!」

二人の攻撃を、俺は余裕に躲していく。

躲すだけなら絶対に問題は無い。

だが……

「躲してるだけじゃうちらは倒れへんで」

「だろうな。だからここで切り札を使わせてもらう」

クラフティの言葉に、俺はそう答えると集中した。

使うのは紋章術。

（俺は使ったことがない。だが、気合と根性と運でやってやるさ!）

俺はそう意気込むと、いつもと同じ感覚で自分の手に霊力を集める。すると、俺の背後に明かりが見えた。

「行きます」

成功したと推測して、俺は次のステップに行く。
銀色に光り輝く二本の神剣を動かしてエネルギーをためる。
そしてエネルギーが最高レベルになったのと同時に、二本の神剣を
構える。

「裂空……」

そして俺はそれを一気に、二人に向けて振りかぶった。

「一文字……!」

「え!？」

その技はブリオツシユの使っていた技だ。
俺はそれを一目見てコピーしたのだ。

とはいっても使い方が知らないなので、不完全ではあるが……

(名前を付けるのならジョーカーか?)

そんな事を思いながら、土煙の上がった方向を注意深く見る。
やがて、土煙が晴れるとそこには、フラフラと立っているのもやっ
との様子 of 二人の姿があった。

「あの特技を受けても立っていられるなんてさすがだな」

あの一瞬で防御をするとところを見ると、本当に強いということが分
かる。

「でも、それもここまで……!」

俺は神速で一気に二人の懐に潜り込み止めを刺そうとした時だった。
突然扉が乱暴に開く音がした。
その方向を見ると、そこにはレオ閣下の姿があった。

第12話 戦闘（後書き）

紋章術：ジョーカー

自分で見た相手の紋章術をそのままコピーする。

ただし碌に使い方がわからない状態だと、本来の威力以下になったりする

第13話 あっけない結末と、新たな出会い（前書き）

今回は史上最悪な出来です。

何がと言つと展開がめちゃくちゃで、一部のキャラの口調が可笑しくなっています。

ついでにシンデレじゃないシンデレもです。

地雷を覚悟で、本文をどうぞ

第13話 あっけない結末と、新たな出会い

突然現れたレオ閣下。

「レオ閣下!?!」

その突然のご登場に俺は驚きのあまり、よそ見をしてしまった。
……………そう、神速を使っていることも忘れて。
その結果……………

「ゴベラ!?!」

壁に盛大にツッコみました。

そして、そのまま俺の意識は闇へと落ちた。

「お、おい! 大丈夫か、涉!?!」

慌てながら声をかけてくるエクレールの声を聴きながら。

「ん……………」

俺はやけにはつきりと聞こえてくる歌声に、目を覚ました。

「目が覚めたか」

「エクレールか。ああ、この通りな」

俺は立ち上がりながら答えた。

「壁に突っ込んで気絶とは、俺もまだまだだな。エクレールにも心配をかけたようだし」

「な、何を言ってる！ わ、私はお前のことなど心配などしていない！」

顔を赤くしながら俺の言葉を否定するエクレール。

何だか可愛らしい。

「ま、そういう事にしておく。で、状況は？」

「……………勇者が姫様をコンサート会場に送って行った。それで間に合った様で、今姫様が歌い始めたところだ」

エクレールの説明によれば、今回は無事解決と言っことになる。

そして今聞こえているのは姫様の歌だろう。

「中々、良い歌声だ」

「中々とは何だ！ 姫様の歌はとても素晴らしいのだ！」

”とても”を強調して言ってきた。

(感じ方は人それぞれ何だから大目に見て欲しいものだ)

俺はそう思いながら、姫様の歌に耳を傾けているのであった。

「あ、涉さん!!」

歌が終わり、しばらくするとリコッタの声がした。

声のした方に目をやると、こっちに向かって手を振るリコッタと、その横には二段のたんこぶがあるジェノワーズに、銀色の髪をした少年とブリオツシュの姿があった。

「リコッタか、その様子を見ると、問題はないようだな」

「ハイであります。勇者さまのおかげです」

俺の言葉に、リコッタは嬉しそうに答えた。

「で、あんたは誰だ」

「お、俺!? って言うか、そっちから名乗るのがセオリーだろ!」

銀髪の少年の言う事に一理があるため、俺は自ら名乗ることにした。

「俺は、小野 渉だ。好きに呼ぶと良い」

「俺はガレット獅子団領の王子、ガウル・ガレット・デ・ロワだ。
ガウルでいいぜ」

ガウルと名乗った少年は、ガレットの王子のようだと
言うより、こいつが首謀者か。

「ふん！」

「って！ いきなり何すんだよ！！」

俺はガウルの頭を、神剣の柄で軽く小突いた。

「その三人に言ったはずだ。」機嫌が悪い時にちよっかい出すと
どうなるか。たつぷりと叩き込ませて貰おう」とな。叩き込めな
かったから王たるお前に叩き込ませてもらった」

「……………俺は反省すべきなのかおこるべきなのか？」

「前者を取れば懸命だな」

ガウルのボヤキに、俺は素で返した。

「お館さま！」

「ユキカゼ、戻られたか」

そんな時、後ろの方から少女の声があったので振り返ると、後ろに束
ねられた金色の髪にキツネ耳とっぽを生やした少女がブリオッシ
ユの方に駆け寄っていた。

「……………？ こちらのお方は？」

「俺は勇者殿の”おまけ”の小野 渉だ。呼び方は好きするとい
ちなみにこんな喋り方だがこれはいつもの事ゆえ、気にしないで

らいたい」

俺はおまけの部分を強調して自己紹介をする。
もちろんこれは、ある種の皮肉だ。

「私はビスコッティ騎士団自由騎士、隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネ
トーネと申します。ユキカゼとお呼びください」

自己紹介を返してきた少女……ユキカゼと握手をする。

「ッ!？」

手が触れあった瞬間、手に電気のようなものが走った。

「どうかされたでござるか?」

「あ、いや。なんでもない」

ユキカゼの声にハッとすると、俺はそう答えて手を離した。

「なによ、デレデレしちゃって」

「ん? なんか言ったか? エクレール」

俺は後ろの方で怨念もろもろの様子でつぶやくエクレールに尋ねた。

「何でもない! 私達も戻るぞ!!」

「あ、おい!!」

歩いて行くエクレールについて行く形で、俺もミオン砦を後にした。
こうして、姫様奪還戦は幕を閉じたのであった。

第13話 あっけない結末と、新たな出会い（後書き）

次回からは日常編に移りたいと思います。

第14話 謁見と模擬戦（前書き）

ここから日常編です。

第14話 謁見と模擬戦

姫様奪回戦の次の日、シンク達はどこかに集められていた。何でも姫様の謁見があるのだと言う。

俺も来るようにと言われたが、そこには行かず、外で景色を見ていた。

「おや、これは渉殿ではござらぬか。ここで何をしているのでござるか？」

「これはこれは、ブリオツシュ殿。空を見ているんですよ」

俺に声をかけてきたのは、ブリオツシュだった。

「そのブリオツシュ殿はよしてもらいたい。拙者の事はダルキアンで良い」

「分かりました。ダルキアン卿」

俺はダルキアン卿と呼ぶことにした。

”卿”を付けるのは、一応礼儀だ。

「謁見に出なくてよいのでござるか？」

「ええ。自分はそこに出るほど活躍はしていませんし、そう言うのは苦手な物で」

俺はダルキアン卿の問いかけに、そう答えた。

まあ、どれも本当の事だが、俺のようなものに出る権利はないしな。

「そうでござるか。向こうの方も終わったでござるよ」

「えっ」

ダルキアン卿の言葉に、お城の方を見るとキレかかっているエクレールとその横にはシンクとリコッタ、ユキカゼがいた。

「ッた?!」

「この馬鹿者! 姫様の謁見に出ないとは何事だ!」

そして突然頭を殴られると、大きな声で怒鳴られた。

「俺はああいうのは苦手なんだって。なんというか固っ苦しいと言
うか、なんというかよく分からないけど」

「まあ、よい」

俺の返答に、エクレールはため息交じりにそう言った。
「どうやら諦めた様だ。」

「あれ、シンク達は?」

「む、そう言えばユキカゼの姿も見当たらない」

「どうやら俺を置いてどっかに行ったようだ。」

「あ、ちょうどよかった。ちょっと頼みたいことがあるんだが」
「む、言ってみる」

俺は顔をしかめるエクレールに頼みごとを伝えた。

場所は変わって騎士団の練習用の広場。

「兄上！」

「エクレール、それに君は確か……」

そこにいた肌色の髪をした男性が俺を見て名前を思い出そうとしていた。

「小野 渉です。以後お見知りおきを」

「これはご丁寧に。俺はビスコッティ騎士団の騎士団長、ロラン・マルティノツジだ」

騎士団長、ロランは俺と握手を交わすとエクレールの方を見た。

「で、どうした？ 今日の訓練は俺の担当のはずだが」

「実は、渉と模擬戦をしようと思っているのです」

ロランの問いかけに、エクレールが答えた。

そう、俺の問いかけはエクレールとお手合わせだった。

親衛隊長と呼ばれるだけあって、その剣筋は良いに違いないと思ったからだ。

「渉殿と？ それはいい。皆の者いったん休憩だ」

ロランは訓練中の騎士達にそう言うと、集まるように告げた。

「これから、涉殿とエクレールが模擬戦をするので、よく見ておくように」

何やら注目されているのが少々あれだが、まあやっていけば気にならなくなってくるだろう。

「それで、武器は何にするんだ？」

「俺は、この剣で行く」

そう言って取り出したのは、神剣の吉宗だった。

「分かった」

エクレールも剣を手にすると、お互いに牽制し合う。やがて、エクレールが動き出した。

「はあ!!」

「ほっと!!」

エクレールの剣劇を、俺は体を横に動かすことによって回避する。

「つく!!」

さらにエクレールは剣劇をさらに強める。

時には上から、また時には俺の脚を払いのけるように。

だが、そのすべての攻撃を俺は剣を使わず、体を動かすことで回避している。

「うむ、実に良い剣筋だ。さすがは親衛隊長だ」

「貴様、私を馬鹿にしているのか！」

俺の評価に、エクレールは剣を振りながら言い返してくる。その顔は若干本気になっていた。

「いんや。逆に尊敬しているのさ。だが、所詮はそこまで。この俺にその剣を当てるのはまだ早い」

「ツク！」

俺の軽い挑発に乗ったエクレールの表情が本気になった。

(俺も本気になりましようかね)

俺はそう考え、吉宗をもう一度握り直す。

「はあ！！」

「っふ！」

エクレールの剣劇を、今度は剣で受け止めた。

金属同士がぶつかり合う音がする。

それは、俺にとっては場を盛り上げる歌のようなものだ。

俺は、力の流れをそらしてエクレールの剣を払う。

俺が狙っているのは、剣を超えての攻撃だ。

戦いの中、一番有利になるのは、そのものの武器を失くすこと。

武器がなければ、こっちに武器が残っている時点で、それは大きなアドバンテージとなるからだ。

では、今回の場合はどうするか。

それは、エクレールの持つている剣を突き破ればいい。

力加減を間違えれば、エクレールに怪我を負わせるが、この吉宗は人体を切ることはできない特性を持つ。

「はあああー!!」
「そこー!!」

そして俺はエクレールの剣に向けて吉宗を突き刺す。
すると、剣は真っ二つに割れた。

……………俺の剣と一緒に

「!?!」

「なッ!?!」

俺はそのことに、驚いた。

神剣は並大抵の事では折れることは決してない。

なのに、エクレールの持つごく普通の剣を貫いただけで、真ん中から真っ二つに折れたのだ。

(何だか縁起が悪いな)

俺がそう思っていた時だった。

「今回は引き分けであったが。何なんだ! あの戦い方は」

「何だつて、普通にかわしてただけだ。後半はちよつと本気で行ったけど」

俺はエクレールの問い詰めに、動じずに答えた。
そんな中、拍手が響いた。

「お疲れ様二人とも。素晴らしい戦いであった」

「あ、ありがとうございます。兄上」

「恐悦至極です」

ロランたちのお褒めの言葉に、俺とエクレールはお辞儀をしてお礼を言った。

「あ、でしたらついでに皆さんに、面白いものを見せましょうか？」

「俺は構わないが、何をやる気だ？」

「ほんのちょっとした手品です」

ロランの問いかけにそう答えると、俺は地面に落ちた二本分の剣を手にする。

「エクレール、手伝って」

「し、仕方がないな、手伝ってやるっ」

そして、俺は手品を始める。

「まずは、この剣の折れた部分をつなげます」

俺は全員に見えるように、エクレールが持っていた剣の刃が折れた部分をくつつける。

「で、エクレールこの部分を指でこすってみてくれる？」

「分かった」

俺の指示に、エクレールは渋々と言った様子でつなぎ目部分を人差し指でこする。

(物体、修復)

俺は心の中で、そう念じる。

「はい、もう離してもいいよ」
「なッ!?!」

指を離れたエクレールは、剣の刃を見て驚きの言葉を口にする。

「はい、この通り剣は元通りに戻りました」
『おお〜!』

俺が剣を突き上げると、見ていた人たちが簡単の声を上げた

「同じ要領で、こっちの方もやりましょうね」
「そ、そうだな」

そして俺はエクレールと共に手品を続けた。
ちなみに、分かっているとは思うが、手品ではない。
これは俺の神術によるものだ。

そんなこんなで、模擬戦&手品ショーは幕を閉じたのであった。

おまけ

「あの二人仲がいいでありますねー」

「うん、エクレも楽しそうだ」

「仲良きことは良きかなでござる」

エクレールと渉が手品をしているころ、少し離れたところで笑顔で話しているオレンジ色の髪をした少女と、金髪の少年に茶色の髪をした女性がいたとかいないとか。

第15話 些細な異変と特別任務（前書き）

今回はかなり短いです。

第15話 些細な異変と特別任務

エクレールとの模擬戦の次の日、俺は姫様のご厚意で割り当てられた部屋で目を覚ました。

「……………」

だが、最初に感じたのは、倦怠感だった。体がまるで鉛のように重い。

しかも何だか体がほてっているような気も。

（風邪か？）

俺はそう解釈すると、自分の体に治癒能力を高める術式を組むとベツドから起き上がった。

風邪程度でどうにかなるほど、俺は軟じゃない。

そして俺はシンクが来ているようなトレーナーの色違い（青色）を着ると外に出た。

朝食を食べ終えた俺は、エクレールに連れて行かれたのはロランの

所だった。

「魔物退治!?!」

そして唐突に告げられた内容に、エクレールが声を上げた。

「そつだ。姫様によると、ここから少々離れた森の方で大きめの魔物が姿を現したようだ。まあ、野生動物とは思うが、危険であるため退治する様にとの事だ」

ロランが説明するが、俺はちつとも頭に入ってこない。体の調子が悪化した時よりさらに悪くなっているのだ。食欲がなく、体も重くてまっすぐ歩けない。

(これってもしかして……)

俺はその症状に心当たりがあった。

だが、それは今の俺にとっては最悪な事態でしかない。

「る、渉!?!」

「な、何だ!?!」

考えに耽っていると、突然耳元で大きな声で呼ばれ、俺は驚きのあまり飛び退いた。

「『何だ』ではない! 話を聞いていたのか?」

「悪い、聞いて ごふあ!?!」

答えるよりも前に、エクレールに頭を殴られた。

「魔物退治だ！ 私とお前の二人で向かうのだ！！」

「なぜに？」

「生憎、人員が割けないのだ。勇者殿も主席と共にお城内を歩いている。そこで二人に頼みたいのだ。引き受けてくれるか？」

俺の疑問に、ロランが答えてくれた。

俺の答えなど、既に決まっている。

「勿論ですよ。その任務、引き受けさせてもらいます」

「そうか。では、早速で悪いが準備を整え次第向かってくれ」

「はい！！」

俺とエクレールは元気に返事をする。

俺の体調の事が心配だ。

何も起こらなければいいが。

こうして、突如湧いて起こった魔物退治が始まった。

第16話 魔物退治(前書き)

オリジナル展開です。

少々描写があれですが、ご覧下さい。

第16話 魔物退治

俺達は、ロランから言われた場所へと向かっていた。

「おい、渉」

「何だ？」

そんな時、エクレールが若干不機嫌そうに声をかけてきた。

「なんでお前だけは歩きなんだ？」

「なんでって、こっちのほうの方が一の際に迅速に行動できるから」
「それだったらこっちの方がよっぽどできるだろ」

俺の答えに、エクレールがツッコんできた。

「戦いのときに、剣を使って動物に乗っていない者が、動物に乗っている者に対して出来る攻撃って何だかわかるか？」

「それは……………」

俺の問いかけに、エクレールが無言になった。

「動物の足を狙う事だ。そうすれば、動物が暴れて乗っているものを落としたりする。その時に奇襲をかければ勝利となるわけだ」

「つまり、渉はそれが起こらないようにしていると云う事か？」

「まあ、そういう事だ」

エクレールのまとめに、俺はそう答えた。

とうとう周りは、草木が生い茂る所となった。
所謂危険地帯だ。

「気を引き締めていくとしよう」
「言われなくても……！」

顔を赤くしながら答えるエクレールをしり目に、俺は神剣を展開して前に進む。

そしてしばらく進んだ時であった。

「……」

俺は周りの空気の変化を感じ取った。
どうやらそれはエクレールも感じ取っていたようだ。
辺りに立ち込めるのは、異様な威圧感だ。
どうやらこれが魔物なのだろう。
エクレールは無言でセルクルから降りた。

「安心しろ、お前の事は出来る限り守ってやる」
「なッ！？ お、お前は何を言ってるんだ……！」

俺の言葉に、エクレールが動揺しながら言ってきた。

「俺も男だしな。女一人守れないようじゃあ……ねえ？」
「ふ、ふん！」

エクレールがそっぽを向いた時だった。
俺達の目の前に、それは躍り出た。

「これが、魔物か」

それは色は黒くやや大きめの動物だった。
その魔物は、鋭い牙をむき出しにして威嚇している。

(攻撃は主に噛みついたり引っ掻いたりと言った所か)

俺はすぐに相手の攻撃パターンを読み解いた。
数は2頭だ。
これなら手分けすればやれるだろう。

「エクレールそっちの魔物を頼む」
「分かった」

エクレールの答えを聞いた俺は、魔物へと向かって行く。

「……………」

魔物は、俺に向けて突進してくる。

(おそらく引っ掻くなこれ)

俺はそう考えると神剣、正宗を一閃する。

「……………」

魔物が雄たけびを上げる。

俺がやってるのは足の爪の切断だった。

これで、引つ掻くと言う攻撃はなくなった。

「最終審判、レクリエム!!!」

そして、俺は超必殺技を魔物に向けて放つ。

「……………」

魔物は断末魔のようなものを上げながら、跡形もなく消滅した。

俺のやった超必殺技は、一種の浄化だ。

今のは、魔物を浄化したことによって魔物は消滅したのだ。

光と言うのは大量にあれば人を殺す武器にもなるのだ。

それは、闇にも言えるが……

(ツク!?)

その時、めまいが俺を襲った。

めまいはすぐに収まったが、体の調子がさらに悪化していくのを感じた。

「涉、そっちはどうだ?」

「お、こっちは無事完了だ。そっちは?」

俺は、ふらふらになるのを必死に堪えてエクレールに問いかけた。

「私の方は大丈夫だ。これしきの事で後れを取るようではない」
「そう言えばそうだ」

その時、俺はエクレールの背後で、鋭く光るものが見えた。
よく見ればそれは魔物の爪だ！
しかも、魔物はエクレールに向けて飛び掛かるうとしていた。
それからは反射的だった。

「エクレ！ 危ない！！」
「え！？」

俺はエクレールに注意を促しながら、魔物とエクレールの間に立つ。
防御は間に合わない。
ならば、俺自身が盾となればいい。
その瞬間、衣の切れる音が聞こえた。
その次の瞬間には、腕に痛みが走った。

「ツぐ！？」
「な！？ 大丈夫か！ 涉！！」

何が起こったかに気付いたエクレールが慌てた様子で、聞いてきた。

「大丈夫だ。礼装で攻撃は防いだ。それよりも少し下がって」

俺の傷は大したことでもなく、おそらくは擦り傷程度だろう。
なんせ、俺の着ている礼装は物理攻撃のダメージを幾分か抑える効
果があるのだから。

「あ、ああ」
「行くぞ。最終審判、レクリエム！！」

俺は、エクレールが下がったのを確認して、もう一度超必殺技を使用した。
俺にもう一度飛び掛かろうとしていた魔物は前と同じように消滅する。

「ふう。大丈夫……か」

俺はエクレールに怪我がないかを確認しようとしたが、それは叶わなかった。

それは突然襲った前のは比べ物にはならない眩暈の為であった。そして俺は体から力が抜け、そのまま地面に倒れた。

「お、おい渉!？」

俺は、エクレールの慌てた様子の声を聞きながら、意識を失うのであった。

第16話 魔物退治（後書き）

次回はエクレがちょっとぴりではありませんが、デレると思います（たぶんですが）。

第17話 相反(前書き)

もう17話、お気に入りも24件を突破しました。
本当に皆様ありがとうございます。

それでは、どうぞ

第17話 相反

「ん……………」

俺が目を覚ますと、そこは俺に割り当てられた部屋の天井だった。

（確か、あの時、魔物を退治して倒れたんだよな）

俺は簡単に倒れる前の事を思い起こしていた。

「起きたか」

「あ、エクレール」

声をかけられた俺は、その方向を見るとそこには若干強張ったエクレールが立っていた。

「全く、いきなり倒れるから」

「心配してくれたのか？」

俺の言葉に、エクレールの耳が赤くなった。

「な、何を言う！ ただ……………驚いただけだ」

そう言うと俺が横になるベッドの横まで移動した。

「医療班が風邪だと言っていたが、いつからだ？」

「……………明確な症状が出ていたのは起きた時からだ」

エクレールの有無も言わせるといった雰囲気、俺は正直に答えた。

「体調が悪いのならば出る前に言わない」

「言った所で、治るわけでもない。これは寝ていて治るようなもんじゃない」

俺の言葉に、エクレールは首を傾げる。

俺は”それに”と付け加える。

「俺が頓挫したら、エクレール一人で出撃になるだろ。何だかそれが嫌だったんだよ」

「そうか」

エクレールが答えた後、部屋内が微妙な空気が漂っていた。

「その、何だ……背後から来た魔物から守ってくれただろ」

「ああ、あれか」

俺は、そのことを思い出しながら呟いた。

「その………ありがとう」

最後の方はすごく小さかったが、なんとか聞き取ることが出来た。

「どづいたしまして」

「~~~~~ッ!?!?」

その俺の答えに、エクレールは顔を真っ赤にして部屋を逃げるように出て行った。

(全く、あいつは……)

俺はそのことに笑いながら思うと、別の問題を考えた。
それは、起きた時から起こっていた症状だ。

「物体化抵抗症状か」

俺達は天界にいる時は実体のない………いわば魂のみの形で過ごす。
これを霊体と呼び、シンク達のような存在を物体と呼んでいる。
こういう世界では霊体でいる訳にもいかず物体化をしなければいけないが、物体化した自分に耐えきれなくなってしまう事が多々ある。
それが”物体化抵抗症状”と言われるものだ。
症状は発熱に眩暈、食欲不振と言ったものが主だ。
治すには天界へ戻るしかない。

(まあ、天界に戻ればの話だけど)

俺は苦笑い交じりに呟く。

(今日は一日ゆっくりと眠らしてもらおうかな)

俺はそう考え、部屋に高濃度の霊力を散布する。

これで、擬似的にはあるが天界と同じ空間を作り出すことが出来る。

勿論、微々たるものであるが、異常状態を直すのには申し分ない。
そしてもう一度ベッドにもぐりこんで寝ることにしたのであった。

第18話 星詠み〜重大な擦れ違い〜（前書き）

今回から星詠み篇に入ります。

ちなみに、タイトルの意味は次回で明らかになります。

第18話 星詠み、重大な擦れ違い

翌日、擬似天界化のおかげか物質化抵抗も収まった俺は、エクレからダルキアン卿のいる場所を聞き出し、そこに向かっていた。

「全く、エクレの野郎」

俺は先ほどエクレに殴られたお腹をさすっていた。

何で殴られたか？

それはほんの数十分前に遡る。

「おはようエクレール」

「……レ」

朝、たまたま見かけたエクレールに声をかけると、エクレールは不機嫌そうに何かを呟く。

「何だ？」

「私の事は、エクレと呼べと言っているんだ！ この前もそう呼んでいただろう！！」

何て言ったのかを尋ねると、エクレールは若干キレながら言った。
ちなみにこの前と言うのは魔物退治の時だ。

「あの時は無我夢中だったからで………分かったから、睨むな！」

俺は目の前で睨むエクレールを必死に止めた。

「エクレー………これでいいんだろ？」

「う、うむ………」

俺の言葉に頷くエクレーの顔はとても赤かった。

「顔が赤いけど、どうしたんだ？　もしかして風邪か？」

俺はそう言いながらエクレーの額に手を添えた。

「う………う」

その瞬間、エクレーの顔がさらに赤くなっていった。

「うああああ………！」

「おぶああああああ………！」

エクレーが思いつきり叫んだ瞬間、俺はお腹（しかも的確に鳩尾）を殴られた。

「う、う、このアホ涉！　勝手に騎士の額に触るな！　この！　この………！」

「痛い！？　ちょっと！　それで蹴るのは反そ　しぶあ………！」

そして今に至る。

「確かにいきなり額を触った俺も悪いが、鳩尾にパンチと蹴るのは無しだろ」

俺はそう文句をたれながら、エクレに教えてもらった道をゆく。

「えっと、ここを右だったよな」

俺は目の前にある分かれ道を右側の方に進む。

「お、あつたあつた」

しばらく歩くと、前方に立派な門が見えた。

例によって上に掛けられていた木には何か書かれていたが、俺には読めなかった。

(誰か呼ぶか)

勝手に入ると、どうなるかは目に見えていたので、俺は大きな声で

人を呼ぶことにした。

「ごめんください!」

「はい!」

俺の声に、中から声が帰ってきた。

その声からユキカゼだろう。

「ああ、渉殿」

「こんにちは」

出てきたのは、俺の思っていた通り、浴衣を着ていたユキカゼだった。

「こんにちはでござるよ。それでどうしたでござるか?」

「ああ、ダルキアン卿殿に用があつてね。今どこにいる?」

俺はユキカゼにダルキアン卿のいる場所を尋ねた。

「お館さまは裏の方で釣りをしているのでござる。渉殿もやってみるでござるか?」

「うーん、そうだね。お願いしようかな」

俺の答えを聞いたユキカゼは、古風な家の中に入っていった。
おそらく釣りの道具を取りに行ったのだろう。

(にしても、犬とか多いな)

俺は自分の立っている周りを見ながらそう思っていた。

一瞬、ここが動物王国のように思えてしまった。

「涉殿ー、取ってきたでござるよー！」

その後、釣り道具を貸してもらい、ダルキアン卿がいる場所へと向かった。

「お館さま」

「ダルキアン卿、こんにちは」

「おお、今日は釣り日和でござるよ」

ダルキアン卿はこっちに気付いたのか、釣竿を持ちながら挨拶してきました。

「ダルキアン卿、ちょっと剣の稽古をつけて頂けないですか？」

「ふむ………分かったでござるよ」

俺の頼みごとに、しばらく考え込むとダルキアン卿はそう答えると釣り糸を引き上げて、横に置くと立ち上がった。

「ついてくるでござる」

そう言われるがままダルキアン卿について行くと、森の中にある広場に出た。

「何か、要望とかはござるか？」

「ええ、ダルキアン卿の使う紋章剣『裂空一文字』のコツを教えてくださいんです」

「ほう、渉殿は拙者の紋章剣が使えるのでござるか？」

俺の言葉に、目を細めて見てくる。

その目からは嘘は言わせないと云った雰囲気漂う。

「ええ、俺の紋章術が一度見た相手の紋章術をまねることが出来る物なんです」

「それはすごいでござるの。しかし、どうしてコツを聞きたいのでござるか？」

「俺がまねるのは”技”そのものでそれ以外は分からないんです」

ダルキアン卿の問いかけに、俺は包み隠さず答えた。

今のままでは威力調整が出来ずに、思わぬ事故を生む可能性がある。

「分かったでござるよ」

そう言って、俺はダルキアン卿から紋章剣のコツを教授してもらったのであった。

「そう言えば今日は勇者殿がここに来ることになっておるのでござるよ」

「シンクが？」

コツの教授も終わり、ダルキアン卿と釣りをしてっていると、唐突にそう切り出した。

「そうでござる。そろそろ来るころであるが……………」

「あ、でしたら自分が迎えに行きます」

俺はダルキアン卿にそう言うと、釣竿を格納庫に入れてそのまま元来た道に戻る。

全てはシンクを驚かすためにだ。

そう、それが俺にとっての受難の始まりであるとも気づかずに。

第19話 星詠み、襲撃と合流（前書き）

はい、また星詠み篇です。

第19話 星詠み、襲撃と合流

シンクを出迎えに言った俺は会う事もなく、フィリアンノ城まで来ていた。

そこで、エクレを探してシンクの居場所を聞いたのだが……

「はい！？ エクレ、もう一回」

「だから、へっぽこ勇者はもう出たと言っている！！」

そんな答えが返ってきたのだ。

俺は慌てて元来た道を引き返す。

「あ、おい！！」

エクレの制止も聞かずに。

「……………」

引き返したのはいいが、俺はさらに困った状況に立たされていた。

「どこどこ？」

そう、道に迷ったのだ。

どうやらどこかで曲がる場所を間違えたようだ。

戻ろうにも、来た道も忘れてしまった。

つまりは、完全に迷子状態だ。

「……歩くか」

俺はそう自分に言い聞かせると、ただひたすらに歩いた。

「ん？」

しばらく歩いた俺は、ある音を聞いた。

そっちの方向に走った。

「川だ！！」

そう、そこにあっただのは川だった。

そして俺は思い出した。

ダルキアン卿と釣りをした場所が川であった事を。

「ここを辿って行けば、目的地に到着する！！」

俺はそう思い川岸に降りると、上流に向かって駆けた。

「なんで、こっちなる」

しばらく進むと、川岸はなくなっていたのだ。

しかも上に行こうにも崖のようになっていて上がれない。

身体能力を駆使すれば行ける高さだが、今の状態ではあまりそう言うのを使いたくはないので、俺はしょうがなく川の中に入って進むことにした。

……………とても冷たい。

そうしてさらに進んだ時だった。

「グオオオオオオオ!!!!」

「うわぁ!?!」

突然川から飛び上がったのは、ものすごい大きさの変な魚みたいな生き物だった。

しかもそいつは俺をまるで飲み込まんとする迫力で口を広げていた。

「吉宗!!!!」

「グオオオオオオオ!!!!」

俺は吉宗を右飛んで避けながら魚に向けて投げつけた。

それは見事魚の腹部分に命中した。

そして俺は……

「わぷ!?!」

全身ずぶ濡れになった。

一応吉宗は魚焼きなどを切ることはできないので、大丈夫だ。それにもしかしたら食材になるかもしれないと思い、吉宗に俺が生成したロープをくりつけて、引きずるように運ぶ。それに伴って俺の足取りもさらに重くなった。そして、俺は上流に向けて進むのであった。

3人称Side

場所は変わってダルキアンが釣りをしている場所。そこには、シンクとダルキアンの二人の姿があった。

「え！？ 涉がこっちに言ったんですか?!」

「うむ、そうでござるのだが、勇者殿は会ってはいないようでござるな」

シンクの驚きようからそう捉えたダルキアンが顎に手を当てて考え込んだ。

「もしかや涉殿は裏道を通られたでござるか？」

「裏道？」

ダルキアンの言葉に、シンクが首を傾げた。

「うむ、勇者殿が来られた道が主流でござるが、途中の分かれ道を

来られた方とは逆に行くと言道につながるのだから。おそろく渉殿はそつちを通られたのかと」

「た、大變！　すぐに探さないと！！」

シンクは慌てて立ち上がる。

そう、手にしていた釣り道具を手放して。

「いた！？　誰だ！！　こんなものを落とした奴は！！」

「この声は……」

「渉！！？」

二人は驚きながら、声のした方向を覗き込んだ。

そこには、水の中で覗き込む二人を睨みつけている渉の姿があった。

S i d e o u t

第20話 星詠みと夢と故郷

俺は気が付くと変な場所に立っていた。

(ここは、どこだ?)

それは一言で言えば恐ろしい世界だ。
周囲は薄暗い雲で覆われている。
時折、雷のような音が聞こえる。

(ここは、フロニヤルド?)

俺はなぜかそう感じた。

それがなぜかは俺でもわからない。
そして目の目に倒れる青年がいた。

(あれって、俺?)

そう、その姿はまさしく俺だった。

「……っぐ」

そこにいた俺の姿をした青年はうめき声を上げながら立ち上がった。
礼装は所々擦り切れており、手や顔にも擦り傷があった。

そのことから、何がしらかの戦闘があったと伺える。
そして、俺が負けたと言う事もだ。

(一体何が)

「ッが!？」

目の前に立っている俺の姿が一瞬だがぶれた。
その理由はすぐに分かった。

(何だ？ あの刀は)

凄まじい妖気を俺に向けて放つ一本の刀があった。

その刀は刃の部分が無かった。

そして目の前にいる俺は、再び意識を失ったのか地面に倒れた。

(何なんだ、これは)

俺は全く理解が出来なかった。

俺はさっきまでダルキアン卿たちの所にいたはずだ。

なんでこのような場所に俺が立っているのか。

そして、一体これは何なのか。

俺には全く理解も出来なかった。

(あれ、さっきの刀は?)

俺が気付いたのは、”俺”に向けて妖気を放った刃のない刀が消えていると言っ事だった。

そんな時、ここに近づく人物がいた。

「む、あそこに倒れているのは……」

「お館さま、間違いないでござる。涉殿です」

(ユキカゼ？ それにダルキアン卿!?)

それはユキカゼとダルキアン卿だった。

「涉殿、無事でござるか！」

「涉殿！」

「う……」

二人の呼びかけに”俺”は意識が戻ったのか、ゆっくりと立ち上がった。

だが、かなりふらふらしている。

「無事で何よりでござる」

「うむ、とここでこの辺に変な刀はなかったでござるか？」

”俺”が無事だったことにほっと胸を撫で下ろすユキカゼに、真剣そうな表情で問いかけるダルキアン卿。

「ッー？」

その声を聴いた瞬間”俺”は驚いた風に見開いた。

「……る」

「ん？ どうしたでござるか？」

”俺”の呟いた言葉が聞き取れなかったのか、ダルキアン卿は”俺”に聞き返した。

「逃げ……る」

”俺”は、二人に対してそう警告を発した。

それがどういう意味なのかは、誰も分からなかった。

だが、それはすぐに分かった。

「うあああああああああ！……！」

「ッ！？ これは！」

「涉殿……まさか……！」

”俺”から発せられる凄まじい妖気に、二人の顔色が驚きに染まった。

”俺”は二人の動揺など無視して、両手に神剣と、俺がここに来たときに拾った短剣を具現化すると、一気に二人の目の前まで移動した。

そして、”俺”は、両手に持つ剣を振り上げて、そのまま振り下ろした。

「殿……！」

「ん……！」

誰かが呼びかける声がする。

「涉殿……！」

「はッ！？」

再び聞こえた大きな声に、俺は飛び起きた。
そこは、先ほどまでいたような異様な空間ではなかった。

「はあ……はあ」

「さっきからうなされていたようでござるが、体の具合でも悪いの
でござるか？」

「あ、いや。ちょっと変な夢を見ただけさ」

俺は心配そうに尋ねてくるユキカゼにそう答えた。
今気づいたが、体中がとても暑かった。

(夢か)

それにしても本当に妙にリアリティのある夢であるように感じた。
あれはただの妄想の産物なのか、それとも……

「涉も、食べなよ」

「……頂きます」

目の前に座っているシンクに促らされるまま、前にある料理に手を
付けた。

「そう言えば、渉殿の故郷の話は聞いていなかったでござるな」

「あ、僕も聞きたいな」

「拙者もでござる」

シンクの故郷の話からなぜか俺の故郷の話になっていた。

しかも、全員が聞きたそうな表情で見えており、どうにも話さないと
言う方法はなかった。

「……俺は、もし帰れるとしても、おそらくここに残るだろうな」

「それは、どうして？」

俺の言葉に、シンクが理由を聞いてくる。

「この世界が故郷より恵まれているからだ」

そして、俺は故郷の話をした。

「俺の故郷はな、とにかく何もない」

「何もない……とは？」

「そのままの意味だよ。水も、木も人もいない只々真っ白な空間。
あるのは青い空だけ。夜もなければ雨も降らない」

ダルキアン卿の疑問に、俺はそう答える。

俺がいる世界、天界はまさしくその通りの世界だ。

「そ、そんな世界で良くいられたよね？」

「そんなの、外の世界を知らなければ、暮らせるもんさ。まあ、外
の世界を体感したから、二度と帰ろうなんて気はないけど」

天界で言い伝えられているジnkクス、それが”下界に行った神族は、二度とここには戻らない”と言うものだった。それもそのはずだろう。

下界の方が天界よりも優れていて、楽しい世界なのだからよっぽどの狂信者でなければ戻りたくもないだろう。

まあ、俺もその戻らない部類の一人になりそうだが。

「そ、そうでござるか。もし永住するのであれば、ミルヒオーレ姫に相談せぬといけないでござるな」

「ま、まあもう少し考えてから決めるとします」

ダルキアン卿の言葉に、俺はそう答えると、そのまま料理を一口食べた。

（まあ実際、世界との契約がある限りここにいるのは難しいんだけど）

それこそが俺が永住を渋る理由だった。

このような下界にいる限り物体化抵抗症状……劣化は止まらない。

今は仮想の天界を構築しているが、それもいつまで持つかは定かではない。

それでもここに残ろうとするのであれば……

（あれを使う……しかないか）

俺はそう考えると、複雑な心境になった。

それは、俺にとっては天敵とも呼べる物だ。

それを使えばここに残ることも十分可能だ。

だが、ここに残ってまで何になるのかが決まっていない以上、それ

をやるのはあまりにも軽率すぎる。

最低でも、ここにいる理由を見つけなければいけない。

全ては、その選択を後悔しないために。

俺は、一人でそう考えながら料理を食べるのであった。

第20話 星詠み、夢と故郷（後書き）

今回は、色々と付箋を貼りました。
次回で星詠み篇は終わります。

第21話 星詠み〜最悪な未来〜（前書き）

いよいよ星詠み篇も終わります。

今回、衝撃の未来が明らかになります。

それでは、どうぞ

第21話 星詠み〜最悪な未来〜

あの後、ダルキアン卿のいた家のような場所からお城に戻ったシンクは、メイド長に半ば強引にどこかに連れていかれた。

俺は、いやな予感がしたためシンクを見捨てて屋根に飛び乗って隠れた。

人間自分が一番大事だ。

まあ俺は人ではないし、人としては最悪な部類に入るが。

「シンクは姫君と密会か」

シンクから伝えられた言葉を呟いた。

「俺はとことん姫の階級を持つものとは縁がないみたいだ」

俺は苦笑いを浮かべながら呟いた。

まあ、昔は姫と言う階級はなかったからそれも当然だろうけど。

「それにしても、星がきれいだ」

俺は隠れるつもりで登っていた屋根から降りることも忘れて、星空を見ていた。

（それにしてもあの夢、本当に夢か？）

俺は考えた。

あの内容が夢と言えるものであるのかを。

夢と片づけるにはかなり無理がある。

それほどきつい内容だったのだ。

しかもリアリティもあった。

(まさかとは思いたくないが、まさか……)

俺には一つだけ心当たりがあった。

ダルキアン卿から聞かされた星詠みでの未来を視るのと同じ効果を持つそれを。

そして、その恐ろしさを。

「……………俺がやるべきことはこの世界の人を守ることじゃない」

俺は自分に言い聞かせるようにつぶやく。

世界の人を全員救うなど不可能だ。

何かしらかの代償ぎせいが必要なのだ。

「俺に出来るのは、最悪の事態を避けること。ただ、それだけだ」

そんな俺の小さな決意は、風によってかき消された。

ガレット獅子団領

その中のある部屋から何かが割れる音が響いた。部屋の中では、レオ閣下が悔しさと苛立つ表情で立っていた。

「くそ、またか！」

レオ閣下はいら立ちをあらわにしながら呟く。

「戦を済ませて帰っても、やはり何も変わらん。いや、かえって悪くなった！」

レオ閣下はそう言いながら悔しそうな表情で上を見た。

その拳は、固く握られていたことから、その悔しさ、苛立ちがどれほどの物であるかが分かる。

「さして強くもないはずの儂の星詠み、なのになぜ、こうまではつきりと未来が見える！」

レオ閣下のやっていたこと、それは星詠みであった。

そしてレオ閣下の前にある映像版に映し出されていた物は、血を流して地面に倒れている勇者シンクと、ミルヒオーレ姫だった。

「ミルヒだけでなく勇者も、この世界の者も死ぬ」

映像版の下に文字が書かれていた。

『「エクセリド」の主ミルヒオーレ姫と「パラディオン」の主勇者シンク、およびフロニヤルド王国にいる者、30日以内に確実に死亡。この映像の未来はいかなることがあっても動かない』

そこには、最悪な未来が記されていた。

「なぜだ、なぜ渉がこの世界の者を……あの二人を殺すのだ!!」

映像には倒れる二人の他に二人のそばに立つ、不気味なほどに無表情の渉が映し出されていた。

その姿は背中に黒く染まった翼があり、髪の毛は黒から銀色に変わっていた。

さらには渉の周りからオーラのようなものが溢れだし、その手には神剣正宗と短剣を持っていた。

「星の定めた未来か知らぬが、かような出来事、起こしてなるものか!」

レオ閣下はそう啖呵を切ると部屋の一角へと向かう。

「貴様を出すぞ、グランヴェール! 天だろぅが星だろぅが、貴様とならば動かせる!」

レオ閣下の視線の先にあるもの、それは……言葉では言い表しようなないオーラを纏っている一本の斧だった。

そして、それが起こるのは翌日の事であった。

第22話 襲いくる夢と宣戦布告（前書き）

ようやく物語も終盤。

ほんのちよっとした伏線を張らしていただきます。

それでは、どうぞ。

(これは夢なんだろう？　なんで俺を襲ってくる？　と言っより……)

「どうして、俺は話せるんだ？」

夢であれば、俺は声を出すこともできない。

なのに、俺は口から言葉を発していた。

そして、俺は上空を見た。

そこにいたのは

「なッ！？」

真っ黒な礼装を身にまとい、黒い翼を広げた”俺”だった。
だが、その異様な姿はそれを俺だと思わせない。

「……………！！！！」

理解できない雄たけびを上げたそれは、俺の方向に陣を展開する。
その形は……

「あれは、闇属性！？」

光に対抗する属性の闇だった。

そしてそれは一気にこっちへと向かってきた。

「ッく、靈言の盾」

俺はそれに対して光属性の壁を形成する。

着弾と同時に、とてつもない重圧が襲ってきたが、なんとか耐えきれた。

「！！」

次は炎属性の神術を放ってくる。
それを、前と同じように盾で防ぐ。

(こりゃ、攻撃しないとまずいな)

「一撃で決める！ 最終審判……レクリエム！！」

俺は両手に持つ神剣を上空に振り上げる。

すると、一本の強大な光となり、”俺”へと向かう

この技は、どんな穢れたものでさえも一気に浄化することが出来る
優れものだ。

出来ないのは、俺自身とバイパスをつなげた場合だけだ。

「！！」

”俺”は雄叫びを上げると再び円陣を展開した。

その属性に、俺は言葉を失った。

「あれは……無属性の反射特化属性とも言われる風属性！！」

無属性は、炎や雷と言った三元属性や光と闇と言った極限属性とは
別の物だ。

これには反射特化型の属性である”風”や、回復に特化した”土”
の二種類がある。

そして、俺の放った技は、最強の威力を誇るレクリエム。
だとすれば、この後どうなるかは想像できる。

レクリエムが”俺”に着弾した瞬間、それは一旦消滅し俺に向けて
放たれた。

これが、風属性の恐ろしさだ。
俺も使おうとしたが、この属性は使うことが出来なかった。

(ここまでか)

俺はあきらめていた。

それは、この技の威力が分かっていたからだ。

どんなに素早く逃げたところで、射程圏内から逃れることは不可能だ。

そして、俺は白く眩い光に飲み込まれた。

「　　です！　早く起きてください！！」

「わああああ！！？」

突然耳に聞こえてきた少女の声に、俺は思わず飛び起きた。

(はぁ……………夢……………だったのか?)

それにしても納得が出来ない。

「渉さん!!! 大変でありますよ!!!」

「な、何!?!」

思考に耽っていると、リコッタの叫び声に引き戻された。

その後、リコッタから伝えられたことをまとめると次のようになる。まず、突然レオ閣下が、ビスコッティに宣戦布告をした。

そしてその懸賞をガレットの宝剣、『魔戦斧グランベール』と『神剣エクスマキナ』が賭けられたとのこと。

しかも、それにはこっちもそれに見合うものをかけなければいけなくなり、それは宝剣であると言っこと。

「話は分かった。とりあえず、着替えたいから外で待っていてくれる? 2分で終わらせる」

「リ、了解であります!」

俺はリコッタが出て行ったのを確認すると、一息ついた。

「今回の、宣戦布告が、あの夢と関係がなければいいんだが」

俺は不安だった。

俺が見た一連の夢。

それは”予知夢”だ。

俺の場合、視ることはかなり少ない。

しかも見たら俺の場合は必ず現実のものとなってしまう。

つまり、俺はこの手でエクレーヤシンク達を殺すことになると言っのだ。

「……………ついに、選択の時が来たか」

俺は再びため息をつくとき、着替え始めた。

そして、着替えが終わった俺はテーブルの上に置いてあったあるものを手に持つと、部屋を後にした。

（最悪な事態だけは回避しないと）

そんな、俺の小さな決意と共に。

第23話 最悪な未来を変える為に（前書き）

今回より、少しずつ山場へと移っていきます。
それでは、第23話どうぞ

第23話 最悪な未来を変える為に

シンクとリコッタ、そしてユキカゼと合流して、外に出た。すると、一部が騒々しかった。そして時たま聞こえてくる少女の声。

「あの子、もしかして……」

シンクも気づいたのか、そう呟いた時、ユキカゼが突然その場所へ向かった

「エミオ、どうしたでござるか？」

「パネトーネ筆頭！ いえ、ガレットからの密偵が騎士団に化けて」

青色の短髪の青年……エミオがユキカゼの問いかけに答えた。

「密偵ちゃうって」

そこにいたのはガレットの隠密部隊のクラフティだった。

「うちはさるお方から、勇者シンクと傭兵の涉宛ての秘密のメッセージを持ってきただけや！」

俺とシンクの姿を見るや否や指を指してそう告げてきた。

「僕宛ての、メッセージ？」

シンクは真剣な表情で、そう呟いた。

俺とシンクはクラフティと共にある場所へと向かっていた。
それは、彼女が持ってきたメッセージに話があるので来るようにと
いった内容の事が書かれていたからである。
ちなみに、俺以外の二人はセルクルに乗っている。

「あ……」

そしてフィリアンノ城を出て少し歩いた森に、黒いセルクルに乗っ
たガウルがいた。

「シンク、それに涉。突然呼び出して悪かったな」

「それで、どうしたの急に？」

「決まってるだろ。今回の戦の事さ」

シンクの問いかけに、ガウルは即答した。

「今回の戦は、ゴドウィンも反対なんだ。どうにも納得がいかねえ
ことも多い」

「こっちでも、ガレットは本気でここを侵略する気なんじゃないか
って」

確かに、道中すれ違う人たちは全員不安げだったのを覚えている。

「いくら姉上でもそれはねえ。ガレットとビスコッティは友好国として、何代も前から支え合ってきた。それをいまさら侵略なんぞ、道義もたたなければ意味もねえ」

確かにそうだ。

なぜ侵略するのか。

それにはそれなりの理由があるはずだ。

俺には、レオ閣下が恨みつらみで侵略をする暴君には思えなかった。だが、その理由は思い当たらない

(いや、もしかしたら……)

俺は推測ではあるが、理由が分かった。

(確か、星詠みは未来を視ることもできるんだっただよな？ もしレオ閣下が星詠みをして、未来を視ていたとすれば)

しかも、その未来が残酷な物であったならば、レオ閣下はそれを避けたいはずだ。

もちろんこれは推測だから間違っている可能性はある。

だが、見当がつくのと着かないのでは大きな違いがある。

気が付けば、二人の話は終わり、ガウルはこの場を去っていた。

「シンク、悪い。一人で戻っててくれ」

「あ、涉!？」

俺はシンクに一言告げて、答えを聞かずにガウルの後を追った。

「ガウル！」

俺はガウルに追いつくと声をかけた。

「何だ、渉？ まだ話があるのか？」

「ああ、渡しておきたいものがある」

いつになく真剣な様子のガウルに五つの腕輪を渡した。

「何だ、これ？」

「それは俺が作ったお守りだ。念じるだけで3回分の防御か、1回分の完全回復をすることが出来る。これをレオ閣下やジェノワーズに渡してくれるか？」

「別にいいけど、どうしてだ？」

俺の頼みに頷くと、ガウルは俺に理由を聞いてきた。

俺は、一瞬誤魔化そうとも思ったが、正直にいう事にした。

「今回の戦で大量の犠牲者が出る可能性がある」

「何！？」

俺の言葉に、ガウルは驚きを隠せなかったようだ。

「どういう経緯かは分からない。だから、万が一の時にこれを使ってそんな事態を食い止めてほしい。俺は戦えないから」

「それって、どういう」

「俺の話はそれだけだ。後それは万が一のとき以外使うなど言っておいて」

俺はガウルの言葉を遮ってそう伝えたと、そのまま二人に背を向けて歩き出した。

（絶対に食い止めてやる。その為ならば、この命、力。すべてをかけてやる）

俺は再び強く決心しながら、フィリアンノ城へと戻った。

道中、花火が打ちあがったことから、ビスコッティは、今回の宣戦布告を受けるようだった。

第24話 開戦の日(前書き)

ようやく、クライマックスに入ります。

どのような展開になるのかを、ご覧ください。

第24話 開戦の日

とうとう戦の日が訪れた。

「……………うん。快調だ」

俺はフィリアンノ城外で、自分の力を確認する。その力は、未だ衰える所を知らない。いや、ここに来る前より快調のような気がする。

「ここが正念場だ」

俺は自分にそう言い聞かせると、フィリアンノ城へと戻った。

姫君から作戦内容を伝えられたのは、戻ってからすぐの事で半分聞き逃したが、重要な事だけは聞くことが出来た。それは、俺がシンクやエクレ達と同じ隊列であること。作戦を聞き逃すなど、武人には重大なミスだが、まだ挽回するチャンスはあるだろう。

「む、涉か。準備は出来たのか？」

「お、エクレ。いいところにいた」

不機嫌そうな表情で、俺を見ながら声をかけてくるエクレに俺はそう返した。

「どういう意味だ？」

「いや、これを受け取ってもらいたい」

そう言いながらエクレに差し出したのはガウル達に渡したのと同じ腕輪と、銀色のさやに入った一本の剣の二つだった。

「何だ？ これは」

「その腕輪は、3回分のような攻撃でも9割のダメージを軽減させるか、1回のみダメージやけがを完全回復することが出来る代物さ」

俺は不思議そうに俺の渡したものを見るエクレに、ガウルにしたのと同じ説明をする。

「もう一つの剣は、名称は一応ラグナロク。通称神殺しの剣だ」
「なッ!?!」

神殺しと言っ言葉聞いてエクレが目を見開いてこっちを見る。

「その腕輪は姫君やリコッタあとは自分で身に付けておけ。そしてその剣と共にエクレに頼みがある」

「な、何だ……頼みって」

真剣な面持ちで俺の頼みを聞くこととするエクレ。

「もし、俺が姫君やシンクを襲った際は、その剣で」

そして俺はその言葉を口にする。

「この俺を貫け」

「なッ！？ で、出来るわけないだろ！」

俺の頼みに驚いたエクレは、猛抗議する。

「それであれば、全員が死ぬことになる。それでもいいのなら、やらなければならない」

「……………」

エクレは何とも言い難い表情を浮かべる。

その両手は強く握りしめられていた。

「何、心配するな俺はそれで貫かれても死ぬことはないから」

「涉………… お前は一体」

俺の言葉に、エクレールが問いかけてきた。

俺はその問いかけの趣旨に気付いていた。

「それは、この戦が終わった時にすべてを話す」

俺はエクレの問いかけにそう告げた。

「全てを終わりにされるのであれば、俺の一番好きなエクレにして貫きたい」

「ッ！？」

俺の言葉に、エクレが今まで以上に顔を赤くした。

(何を言ってるんだ。俺は?)

俺は自分の口から出てきた言葉に、恥ずかしく思いながらすぐに謝ることにした。

この間のように鳩尾への一突きが来たらたまったものではない。

「悪い。変な事を行ったな」

「いや……………」

エクレはそれ以上言葉にすることが出来なかった。

そして少しばかり話をした俺は、そのままエクレに背を向けた。

「あ、姫君やリコッタたちに”有事の際以外では使うな”と伝えておいてくれ」

言い忘れたことを言って、俺はそのまま歩く。

「これで、すべての布石は打ち終わった。後は開戦を待つのみ」

勝負の時はすぐそこまで迫って来ていた。

第25話 開戦と、混乱する戦場

その後、隊列を築いて俺とエクレール勇者シンクと、ダルキアン卿にユキカゼは指定された場所へ向かっていった。
ちなみに、俺はセルクルには乗らずに歩いている。

「勇者殿とエクレールそれに涉殿とは、また一緒の組でござるな」
「はい、残念ながら私がアホ勇者たちの面倒を見ないといけませんので」

エクレーの”アホ勇者”と言う言葉にシンクは落ち込み、ユキカゼはそれを見て静かに笑っていた。

「と言うより、俺はこいつほど馬鹿ではないぞ」
「勇者殿、涉殿。相方とは仲良くしないといけないでござるよ」
「なんで僕に言うんですか！ エクレーが僕をつんけんするんですよ！」

ダルキアン卿の軽い注意にシンクが反論した。

「と言うより、俺のボヤキをスルーしないでください！」
「やかましい、貴様らがアホな事ばかりするからだ」

ジト目で俺達を睨みながらそう呟くエクレー。

「アホな事？」
「勇者殿は、出会った初日に、おっぱい揉んだり服を剥いだりしたらしいのでござります」

何のことかわからないダルキアン卿にユキカゼが説明した。

「ほほう、それはそれは」

「誤解です！！」

二人の声がハモツた。

と言うよりシンクの場合は絶対に違つ。

「と言うよりユツキー！ なぜそれを知っている！？」

「リコから録画したものを見せもらったのでござる」

そう言えば、カメラのような器材もあつたっけ。

「勇者殿もなかなかどうして大胆でござるな」

「あれは本当に不幸な事故で

」

あの時の事を思い出したのか、エクレはセルクルに乗りながらシンクを蹴っていた。

ものすごく器用な事をする二人だ。

俺以外のシンクやエクレ、ダルキアン卿の腕には俺が渡した腕輪がつけられている。

準備は万端だ。

そして、俺達は指定地点へと向かった。

『さあ、午後に入り食事も終えたビスコッティ、ガレット両軍。現在チャパル胡椒地帯で戦闘開始の合図を待っております』

「いいか？ 合図があったら私たちは最短ルートで、その先に抜ける」

「うん」

「了解」

ガレット軍と対峙しながらエクレの指示を頭に叩き込む。

「開幕直後なら皆橋やフィールドを抑えようと躍起になる。私たちなど目にも止めぬはずだ」

「分かった」

「砲術主体！ 砲撃はしなくて結構ですので、とにかくエルマール主席を守って私たちに付いて来てください」

『はい！』

エクレの指示に全員が返事をする。

そして……

火花が打ちあがり戦が始まった。

両軍が一斉に動き出す中、俺達は計画通り駆け抜けようとしたが。

「ヒイツハア！！」

「うおわあ！？」

突然現れたのはものすごい怖い形相をした者達だった。

「獲物がいたぞ」

「全員で囲め！」

「ち、ちよつと！ 話が違つ！」

「ええ！？？」

突然の事態に二人が慌てる。

さらに、俺の横からも同じ連中が迫って来ていた。

「弓放て！！！」

さらに追い打ちをかけるようにガレットからの弓攻撃。

それは二人の前方と横側から。

「横はこつちに任せておけ！！！」

「了解！！！」

僕は二人にそう言うと、この間ダルキアン卿から完全に教わった紋章剣を使う。

「行くぞ！ ダルキアン卿直伝！」

すでに展開してある神剣に、光が灯る。

「裂空、一文字！！！」

そして放たれた一つの閃光は、矢を吹き飛ばす。
だが……

「死ねえ！！！」

「つと！？？」

迫って来ていた顔に切り傷のついた男達5、6人の奇襲にあった。俺はそれを巧みに躲したことでなんとかなった。

「やっぱり動物に乗らない方が機動が良い」

そんな事を呟いている中、どうやら俺は囲まれてしまったようだ。周りには10人の兵士。

たったと付けた方がいいかもしれない。

「お前を倒せばレオンミシエリ閣下から、ご褒美がたんまりと出る。だから、朽ち果てるお!!」

一人の兵士がそう言って周りにいた兵士たちが俺に迫ってくる。だが、それでも俺には笑う余裕があった。

「笑止。たかが10人で俺を倒すことなぞ、不可能！」

俺はそう言い放つと神剣を一振りする。

「神術、第2章……光には祝福を、闇には一時の休みをもたらさん」

俺の声が終わると同時に、白銀の光が俺の周囲を駆け巡る。

そして、それが無くなり残ったのは……獣玉化して眠っている兵士たちの姿だった。

『うおつとお!! これまた二人目の勇者がやりました。一瞬で10人の兵士を行動不能にさせました!!』

しかも一回寝れば3時間は眠り続けるので、戦場復帰はまずないだろう。

合理的な倒し方だ。

「まあ、欠点は、使うごとに霊力を消費することと敵味方の分別がつけられない事位だ」

（合流するか）

俺はエクレの方に合流するのであった。

「エクレ！」

「わ、涉か。無事で何より」

分かってはいたことだが、エクレの態度はどこかよそよそしかった。まあ原因は俺の失言だが。

（なんで、あんなことを言ったんだろう？）

俺は自分の発言の理由を考えていた。

「エクレ　！！！」

「お、勇者、無事だったか」

慌てた様子で合流してきたシンク。

「まずいよ。僕が……って言うかパラディオンが狙われている」
「パラディオンって神剣だったよな？」

僕の疑問に、シンクが頷いたことで答えた。

「そのようだな。だが作戦は変えられん。念のためパラディオンは武器化させないようにした方がいいな」

「うん。だから武器も拾ってきた」

目の前にはガレットの軍が迫って来ていた。

「二人とも、あれは俺に任せてはくれまいか？」

「涉？ ……まあいい、頼んだ」

俺の提案を聞き入れたエクレは、駆け出そうとするのを止めた。

「感謝する。では……神術・第4章、咎人達は眠りについた」

さつき使ったのとは別の術を使う。

見かけ状変わったのは、砲撃タイプになった事だけだ。

ただ、これの射程範囲内と眠りにつく時間はかなり増えた。

現に、俺達が見えていた敵軍のほとんどが一気に減った。

「さあ、行くぞー！！」

「お、おい！ 先に行くな！」

先に走り出した俺に一喝しながら、エクレとシンクは駆けだした。

しばらく走って谷間の場所をエクレとシンク、そしてリコッタと進んでいる時だった。
スリーズ砦の方角から、花火のようなものが打ち上げられた。
それは、ある重大な意味合いがあった。

「リコからの合図」

「本当に本陣への急襲があるとは」

信じられないとばかりに呟くエクレ。

「これで確信が出来ました。レオ様は私に何か隠し事をしていました」
今までいたリコッタは煙と共にその姿を姫君の姿へと変えた。
そう、これは急襲がある可能性を考えた計画だった。
つまり、今スリーズ砦に居るのはリコッタと言う事だ。
そんな時、一羽の鷹が走る俺の横に降り立った。

「……………グラン砦に物騒な武器を持って待ち構える敵陣を確認。数は約15から30人！」
「そ、その鳥は何だ？」

鷹から伝えられた情報を伝えると、怪訝そうな表情で鷹を見ながらエクレが聞いてきた。

「こいつは俺の式神。指示を出せばできる範囲内で色々やってくれる、優秀な相棒さ」

俺は無言で式神にエクレの方に移動するように指示を出すと、それを受け入れたのか、エクレの目の前までふわりと移動した。

「この際だから触ってみればどうだ？ 大丈夫だ噛みつかないから」
「そ、そうか……………では」

エクレはおっかなびっくり式神の頭を触る。

「触り心地が良いな」

「そうだろ？」

「へえ、僕にも触らせて

」

そんな時、シンクが式神である鷹に触ろうと手を伸ばす。

「あ、おい！ やめ

」

「いい！？」

忠告するのも遅く、シンクは鷹に指をかまれた。

「式神は指示を出したこと以外はしないんだよ。無暗に手を出すと反撃されるから気を付けると言おうとしたのに」
「それを早く言っただらば！」

何とも変な雰囲気となってしまった。

「エクレ、リコッタはこっちに合流するんだったよな？」

「そうだが」

「だったら、こいつに護衛させようか？」

俺の提案にエクレはしばらく考えると”ああ、頼む”と答えた。

「おい、追加指令だ。スリーズ砦から出るリコッタの護衛をしろ」

俺の指示を聞いた鷹は高く羽ばたくと砦の方へと向かった。

そして俺達も、グラン砦へと向かうのであった。

第26話 混沌と化し始める戦場

グラン砦が見え始めた時、それは突然起こった。

「ッ!？」

「どうしたの？ 涉」

突然息をのんだ俺に、シンクが訪ねてきた。

「式神とのリンクが消滅……消滅時の情報から矢での奇襲を受けたらしい。護衛対象は矢が直撃したが無事とのことだ」

どうやら式神では耐えられない威力だったらしい。

そんな矢を射れるのは一人しかない。

そして、こっちでも式神の情報通り、物騒な武器をこちらに向けてきた。

「うえええ!？ 銃!？ 大砲!？」

「勇者、この間教えた紋章術、間違いなく出せるな？」

敵の武器を見て驚くシンクに、エクレが淡々と聞いた。

「こ、こないだって、槍の奴？盾の奴？」

「盾だ！ 貴様が防げ！ 私と涉が切り込む！」

「あいよ、了解！」

今さりげなく俺を混ぜたよな!？

しかもシンクは前に出て行くし。

そして浴びせられるのは数多もの銃撃。

シンクは紋章術で展開した盾で、

「神術・第1章、全ての災厄は今取り除かれた」

俺は神術でそれを防いでいく。

「シンク、放たれた大砲を俺がいる上空に弾き飛ばして」
「了解！」

俺は守りっぱなしは嫌なので、シンクに指示を出した。
それと同時に大砲は放たれ、俺は所定の位置に着く。

「だああありやあああ！！！」

『な、なにいいい！？ 勇者シンク、追尾弾をもう一人の勇者殿に弾き飛ばした！！』

シンクは砲撃弾をしつかりと俺のいる場所へと飛ばした。

「ホールド」

俺はそれを手でキャッチすると、爆発しないように固定させた。

「目には目を、歯には歯を！！」

そして、それを思いつきり撃った者達がいる方へと投げ飛ばす。

『もう一人の勇者、素手で追尾弾を投げ返しました！！』

「エクレ！」

「閃空、大一文字！！」

エクレの紋章剣が炸裂した。
さらには俺が打ち返した追尾弾もある。

「ホールド、解除」

そして次の瞬間、追尾弾は大爆発し、守っていた敵陣をほとんど倒した。

だが、俺が気がかりだったのは……

「空に雲が……」

突然空に浮かび上がった薄黒い雲だった。

どこかしらかマイナスエネルギーの値が増えてきたような気もする。そんな状態をよそに、俺達は砦内に侵入した。

砦内にある階段を登り切り、ドアを開く。
そこはやや広い場所だった。

『全く待ちくたびれたぞ』

レオ閣下の声とともに目の前にあった楕円形にレオ閣下の顔が映った。

『そこにおるのはたれ耳と勇者に、涉殿じゃな。儂は今この砦の最上部、天空武道台におる。ここまでこれた褒美にわしとの一騎打ちのチャンスをくれてやろう』

映像の前まで移動した俺達は映像を見続ける。

シンクは姫君をかばっていた。

『グランベールも、エクスマキナもここにある。これを奪えばポイント的に貴様らの勝利で確定だろうな。無論一人ずつでは叶うまい。仲良く二人で掛かるがよからう』

それは、完全な挑発であった。

『儂は貴様らを倒しパラディオンを奪った後、ミルヒの陣をぶちのめしに向かう！』

レオ閣下の言葉に、姫君がさらに怯えた。

『さあ、上がってくるがよい！』

それを最後に映像は消えた。

3人称 S i d e

「はあ……」

「レオ様」

天空武道台では挑戦状をたたきつけたレオが一息ついていた。その様子を、心配そうに見つめるガレットのメイド長のルージユ。

「なに、問題ない。待っておれば何も知らない勇者とたれ耳が、パラディオンを運んで来よう。それだけでも星が変わるやもしれん」「はい……」

そう、彼女の計画では、ここにやってくるのはシンクとエクレールの二人であると踏んでいたのだ。そして、レオは雷が鳴り響く空を見る。

「それにしても、国をかけての大戦じゃと言うのに、何と言う空模様じゃ」

空模様を見て呟いた時、天空武道台に来る唯一の移動手段であるものが到着を告げた。

そして、そこにいる者二人がドアの方へと視線を向ける。ドアが開いた時、そこに立っていたのは……

「お邪魔致します。レオンミシエリ閣下」

「ッ!？」

大きな剣を持っているミルヒ姫と、その横で不敵の笑みを浮かべ、神剣を構える涉だった。

それは、少し前に星詠みで見たものと、ほとんど同じ構成となっていることを示した。

こうして、続々と悲劇は迫って来ていた。

S i d e o u t

覚醒まで残り、1時間26分

第26話 混沌と化し始める戦場（後書き）

次回は、魔物戦まで行きたいと思います。

第27話 目覚める者（前書き）

すみません、魔物が登場するところまでになりました。

第27話 目覚める者

「ここからは私一人で行きます」

レオ閣下の挑戦状を聞いた姫君が、突然そう言い出した。

(自分で話し合う気が。だが……)

俺は嫌な予感がしてならない。

だからこそ、少しでも意見をすることにした。

「それは承認できませんね、姫君」

「え!？」

俺の言葉に驚いた様子で見てくる姫君。

「私もご一緒に行かせていただきます」

「私一人で大丈夫なので、涉さんは」

「でしたらお聞きしますが、上に到着した際に攻撃されたらどうするのですか? 奇襲攻撃に対応できるのですか?」

俺は性格が悪いなと思いつつ問い詰める。

「今のレオ閣下は宝剣を奪うために躍起になっている。どのような事が起こるかは予測も出来ない。そんな状況で姫君を一人で行かせると、大問題だ。護衛役として一人つく必要がある」

「おい、涉! 姫様に何ていう事を」 親衛隊長は黙ってる!」
「ッ!？」

俺に怒鳴ってくるエクレに怒鳴り返して黙らした。

「護衛には自分が付きます。もし嫌な場合でしたら、貴方には眠って頂きます」

「ッ!？」

俺は神剣の吉宗を展開して姫君に向けて構える。

吉宗なので、切ることはできない。

よってただの脅しだ。

「分かり……ました」

姫君は声を震わせながら了承した。

(こりゃ、後で謝った方がいいな)

姫君が上に向かう準備をしながら俺はそう考えるのであった。

昇降機に乗り、武道台へと向かう中、姫君は大剣を手に俺は神剣二本を手に無言となっていた。

「先ほどは無礼の数々、申し訳なかった」
「え？」

俺の謝罪に、姫君が驚いたような声を上げた。

「俺も衣食住を見て貰っている恩もあるのでな、これくらいしなければ罰が当たる」

「そんな、もともとは私のせいで……」

「確かにそれはあれだが、いい出会いもたくさんあった。だからこそ今の俺は姫君の懐刀。姫君の身を守り、姫君の命を聞く……ただそれだけだ」

俺は自分に言い聞かせるように姫君に告げた。

そっだ、今の俺は懐刀だ。

相手が向かってくるのであれば、手を汚してでも主を守らなければいけない。

「勿論、二人の話し合いを邪魔する気はありません。到着し次第、自分は離れた場所で待機します」

「ありがとうございます」

「お礼を言われるほどの事ではないですよ」

お礼を言ってきた姫君に、俺は苦笑い交じりに答えた。

「貴方とこうしてお話したのは初めてですね」

「そうですね、自分も姫君とともに話すのは、これが初めてです……と、到着しましたよ」

昇降機が一番右側を指示したのを見て、俺は気を引き締めた。

そして、扉が開く。

「お邪魔いたします。レオンミシエリ閣下」

姫君が前を見据えて声を上げると、昇降機を降りた。

俺も一歩遅れて昇降機を降り、奇襲に対応できる位置に立った。

「レオ様が国の宝剣を賭けて戦われるのであれば、私も宝剣を手にこの場に来ないといけないと思い、失礼ながら勝手に推参しました」

レオ閣下の表情は目が見開かれており、かなり動揺しているようにも見えた。

(俺と姫君の二人で来ることが予想外だったのか、それとも……)

俺が思考に耽っていた時、レオ閣下のそばにいたメイドのような人が、短剣を手に姫君に向かって行くのが見えた。

「はあ!!」

間一髪のところまで姫君の前に立ち神剣二本で防ぐことに成功した。

「分かりやすい奇襲どうも!!」

「お叱りは後でいくらでも！今は説明している時間がありません!!」

神剣と相手の持つ短剣に火花が散る。

「なッ!?　しま　」

俺は支点をずらされ、そのまま前のめりになってしまった。

倒れるのは免れたが、相手は姫君の所に向かって行こうとした。

「きゃあ!？」

その瞬間、姫君から発せられるエネルギーによって吹き飛ばされた。そして姫君の手にはピンク色の、二回り小さな短剣が握られていた。だが、その剣からは異様なものを感じることから宝剣であることはすぐに分かった。

俺はすぐに奇襲を仕掛けてきたメイドの人に剣を突き付け、身動きを制限する。

その間、俺は考える。

(どうも嫌な感じがする。これは空模様のせいなのか?)

周りの雰囲気少しずつではあるが、悪くなっているのに俺は気付いていた。

それは、姫君とレオ閣下が言い合っているからではない。

(まさかとは思つが、プラスのエネルギーが消えかけているのか?)

それならば今の雰囲気にも説明がつく。

(だとすれば)

「ッ!？」

突然動悸と激しい眩暈が俺を襲った。

まるで、体の奥底から揺さぶられたかのような気持ち悪さを感じる。しかしそれもほんの一瞬の事だった。

『グラナ浮遊砦攻略戦に参加中の皆様にお知らせします』
「ん？」

突然聞こえてきたのはそんなアナウンスだった。

『雷雲の影響か、付近のフロニヤ力が、若干ではありますが弱まっています。また落第の危険もあることから、いったん戦闘行動を中断してください。繰り返します』

(フロニヤ力が弱まっている……俺の思った通りか)

俺はアナウンスを聞きながら自分の推測があっていたことを確認した。

「あの皆さん、屋根のあるところへ」

青髪のメイドの人が提案するとゆっくりと歩いて行った。

「二人とも」

俺は対峙している二人にそう告げる。

この時俺は、説明がつかないほど焦っていた。

二人はゆっくりとだがメイドの人のいる所に向かって行く。

そんな時、突如としてマイナスエネルギーが増幅した。

「コトツ！？」

その次の瞬間、地震が発生した。

(これはまずい……)

増幅し続けるマイナスのエネルギー、総称邪気。
その瞬間、武道台が宙に浮かび始めた。

「ミルヒ！」

「レオ様！」

名前を呼びあう二人だが、俺は空を見ていた。

（あれが、邪気の原因か）

俺の視線の先にあったもの、それは

とてつもない邪気と闇の力を秘めている漆黒の球体だった。

覚醒まで残り、1時間

第28話 超えられないもの(前書き)

いよいよ魔物戦です。

第28話 超えられないもの

上昇を続ける武道台。

上には紫色の球体がある。

「あれは、このあたりの土地神さま？」

姫君がその球体を見て声を上げるが、それはないと思った。土地神がこのような邪気に包まれているはずがないからだ。

「いや、違う」

俺の予想は当たっていたようで、レオ閣下が否定した。
おそらくこれは……

「昔ダルキアンに聞いたであろう？ おそらくは、あれが昔地に封じられたである禍々しき魔物であろうよ」

その次の瞬間だった。

「グオオオオ！！！」

獣のような雄たけびが俺達を襲った。

俺達は耳をふさぐ。

その次の瞬間、いたるところから炎柱が立ち上がる。

「ッ！？」

さらに俺達の後ろの方でもそれが上がり、その衝撃で姫君が前のめ

りに倒れた。

「ミルヒ！」

レオ閣下の声を遮るように魔物は雄叫びを上げる。

その雄叫びにはどこか苦しみのようなものが感じられた。

そしてとうとう魔物の姿が露わになった。

その姿はまるで狐を醸しだたせる姿だが、魔物という言葉にふさわしく、とてつもない邪気が発せられていた。

さらにその周りにはまるで魔物を守るように、紫色の何かが浮かび上がる。

姫君が横にある宝剣を手にした瞬間だった。

「グオオオオオオオ！！！！！」

宝剣に反応した魔物が雄たけびを上げると、地面から草の茎のようなものが現れた。

その先端は鋭い刃物となっていた。

「はああ！！！」

突然の事で硬直していた姫君の前に立ち、レオ閣下は攻撃を防ぐ。

「でやああああ！！！」

そして斧で茎を切り裂いた。

「ミルヒ、無事か！？」

「は、はい　　ッ！？」

ミルヒの安否を確かめるレオ閣下だが、その背後には先ほどの茎が再び姿を現していた。

「レオ様！ 危ない」

それを見た姫君は俺よりも早くレオ閣下の前に回り込むと、宝剣を横に構えて茎の攻撃を防ごうとする。

「駄目じゃ！ ミルヒ！」

俺は急いで姫君の前に回り込み、防ごうとする。
だが……

「ッ！？」

半歩届かず姫君は二本の茎によって切り裂かれた。
さらに横からも茎が迫る。

「障壁！」

俺は急いで姫君を覆うように障壁を構築する。
そのことよって茎の先端に貫かれなかったが、跳ね飛ばされてその先にあつた紫色のベールに飲み込まれてしまった。

（くそッ！）

俺は不甲斐なさから心の中で舌打ちをした。

（いや、あれがあるからまだ大丈夫）

しかし俺はすぐにそう結論を出した。
姫君やそのほかの者達には”保険”を渡してある。
それがあある限り問題はない。

(こつちから治癒をかけるか)

俺はそう考えると姫君がつけている腕輪を経由して治癒を施す。

「貴様あああ!!」

そんな時姫君がさらわれたことに憤ったレオ閣下が黄緑色の気力を
上げながら叫び声を上げた。

「れ、レオ閣下落ち付　ぐあ!？」

必至に止めようとした俺は、突如膨れ上がった気力に吹き飛ばされ
た。

そのままレオ閣下は魔物に向かって突進する。
様々な攻撃をかわして魔物に一発攻撃をするが、紫色の何かによつ
て下の方に叩き付けられた。

「レオ閣下!？　ツ!？」

俺は慌ててその場から離れた。

次の瞬間轟音を立てて紫色の帯が俺の立っていた場所に振り落され
た。
もし少しでも回避が遅れていたら、俺はあれに叩き潰されていたか
もしれない。

「俺に攻撃したな？　ならば、貴様の末路は決まってる!!」

神剣が夥しい光に包まれる。

「轟け！！ 最終審判、レクリエム！！」

俺は必殺級の特技を魔物に放つ。

「グオオオオオオ！！！！？」

レクリエムを食らった魔物は悲鳴のようなものを上げるが、倒れる気配がない。

「何！？ なぜ倒れない！」

俺は驚きを隠せなかった。

最高威力を持つあれを食らっても、びくともしないのはあの短剣以来だ。

(まさか、あいつの邪気が濃すぎるのか！？)

それ以外に思い付かなかった。

邪気の量ではなく質が濃いために、俺のレクリエムは通用しなかったのだ。

「グオオオオオ！！！！」

思考に耽っていたために、俺の目の前にまで茎のようなものが迫っていたのに気が付かなかった。

「ッ！？ 炎天よ、我を守る盾となれ！！」

俺は急いで盾を形成し、攻撃を防ぐ。

(よし、まだいける。質が高いのならそぎ落とすまで)

俺は起死回生を狙い、神剣に靈力を込めようとした時だった。

「ッ!？」

体の内側から揺さぶられるような揺らぎが起こった。

(こんな時に劣化かよ!)

「ッ!？ しまっ
」

俺はさっきの揺らぎで盾が消えたことに気が付いた。

それに気が付いた時には、茎の先端にある刃物が目の前に迫っていた時だった。

俺はそれを躲すが、その先には紫色の帯が振り下ろされようとしていた。

「がああ!？」

俺は体を切り裂かれ、そのまま地面へと落下する。

それは先ほどのレオ閣下を彷彿とさせるものであった。

薄れゆく意識の中、俺が見たのは魔物が下に降りて行く姿。

そして、地面に叩き付けられたときの背中の痛みだった。

覚醒まで残り、40分

第29話 星流と覚悟（前書き）

なんだかキャラ崩壊が起きているような気が……
そしてなぜか唐突の真名暴露の回です。

それでは、どうぞ

第29話 星流と覚悟

俺は立っていた。

(ここは……………またフロニヤルドか)

周りを見渡すと、よく見た景色だった。

そう、グラナ砦から少し離れた場所に俺は立っていた。周りは暗く、よく見えなかった。

いや、声は聞こえた。

『み、見てください!! 暗闇の空に星が!!』

(空?)

ナレーションの声に、俺は上空を見上げる。

その空は真っ黒だった。

そこに流れる数多の流れ星。

はつきり言って不気味であり、恐ろしげであった。

『た、大変です!! 空に何かがうか

』

そこでナレーションの声が途切れた。

それからすぐに俺が視たのは、暗闇のはずなのにその姿がくっきりと見る事の出来る”何か”だった。

「……………ツグ！」

「あ、目が覚められたんですね！」

突然意識が戻った俺が最初に感じたのは、体中の痛みと、奇襲を仕掛けたメイドの人の声だった。

「レオ閣下は？」

「あ、レオ様は……………」

メイドの人の戸惑うような視線の先には横たわっているレオ閣下の姿があった。

腕には包帯を巻いている。

「む、起きたようじゃな」

「ええ、おかげさまで」

空を眺めていたレオ閣下の言葉に、俺は普通に反した。

「……………さて、と」

「な！？ 動かないでください、あなたは今大けがをされて

」

「それがどうした？ たとえ足がちぎれても、俺は動き続ける」

メイドの人の生死の声を遮り、俺はそう言つとゆっくりではあるが

端の方へと向かって歩く。

「行つてはダメだ」

それを止めるのはレオ閣下だった。

「お主が行けば、ミルヒと勇者が死ぬ」

「……………それがあなたが視た物ですか？」

レオ閣下の言葉に、俺は驚くこともなく聞き返す。

その問いかけに、レオ閣下は無言で頷いた。

「なるほど。では、いいことを教えましょう。未来は例え過程は変わっても、結果は変えられないものです。変えればそれは、破滅しかないのですから」

「私は！ 私は、ミルヒと勇者を死なせたくはない！！」

俺の冷酷な言葉に、レオ閣下は今まで聞いたことのないほどの悲しい声色で訴えた。

「貴方は、素晴らしい。自分には特定の人物を守るなんてことは出来ないんです。出来るのは最悪の事態を回避することだけ」

俺は自分の不甲斐なさに笑うしかなかった。

「レオ閣下、腕輪は一回も使っていませんね？」

「う、うむ。使つてはおらぬが……………」

「一応保険は掛けてあります。万が一の時の切り札はエクレールに託してあります。もしもの事態の時は、彼女の背中を押してくれませんか？」

俺の言う保険、神をも殺すことのできる剣は、エクレが使おうとしない限り何の意味もないのだ。

だからこそ、俺はレオ閣下にエクレの背中を押す掛を頼んだのだ。きっと彼女はそれを使う事を戸惑う。

彼女は普段はあれだが、優しい性格だと言うのは俺でもわかるのだから。

「さて怪我の方も癒えた事ですし、行きますか」

俺は気合を入れると胸元から一つの巾着袋を取り出す。

中には普通の石が2つ入っている。

その意志の名前は霊石。

文字通り、この石には純度の高い霊力がみつしりと詰められている。これをのむことによつて、俺は霊力を回復することが出来る。

俺は霊石を一つ取り出すと、徐にそれを口の中に入れて飲み込んだ。次の瞬間、体中から力が漲るような感覚がした。

「リミットブレイク・ブート2!」

俺は声高々に叫ぶと、封印を2段階解除した。

「きゃ!?!」

「ぐ!?!」

その風圧に、後ろにいた二人がうめき声を上げた。

「神術・第1章、偽の者には小さき羽が生える」

俺は神術で背中に羽音を生えらせる。

空中飛行が出来るようにするためだ。

「待て、お主……渉、お前は何者だ？」

そして一歩踏み出そうとした俺に、レオ閣下が問いただした。

「はぁ………これが終わるまでは名乗るまいと思ったんですが、致し方ありませんね」

俺はそこまで言うと、その場で半回転してレオ閣下たちの方を見た。

「俺………我は、世界を統治せし三神が一人、世界の意志、小野渉だ！」

俺は声高々に自分の真名を名乗るのであった。

覚醒まで残り、20分

第30話 戦いの終わり(前書き)

本作もとうとう30話です。

今回で魔物編は終了となります。

第30話 戦いの終わり

「さ、三神とは……世界の意志とは何だ」

「世界を創造する創造の神、世界にとつての毒を排除する裁きの神、そして世界を安定させる世界の意志の総称が三神だ」

俺はレオ閣下に二つの質問の答えをまとめてした。

「……………」

「時間がない。俺は行くぞ」

俺はレオ閣下たちにそう告げると、グラナ砦から飛び降りた。

3人称 S d e

封印が解け、現れた魔物の背中にシンクは立っていた。

その姿は体中に怪我をし、頭から血を流し、着ていたマントはボロボロであった。

「姫様！ 姫様！！」

シンクは半透明の球体内に入っているミルヒ姫に、球体を殴りながら必死に呼びかけていた。

「はあ……はあ……駄目だ、僕の声が届いてない」

シンクは数歩後ずさりをして、息を切らせながら呟いた。
その表情は非常に悔しげであった。

「諦めるのか？」

「え?!」

そんな時、突然かけられた声に、シンクは慌てて辺りを見回す。
そんなシンクの前にゆっくりと降り立つ人物がいた。

「わ、涉!?!」

その人物は涉であった。

Side out

俺は、空を飛んで魔物の元に向かっていた。

その道中、莖のようなものが地面から生えてくる。

さらにその先にはピンク色の何かがかっち向かってきていた。

「邪魔するな!!」

俺は正宗を横に振りかぶる。

すると、白銀の刃となり莖やピンク色の者を次々に薙ぎ払って行く。
そして俺はさらに速度を上げた。

やがて魔物の姿が見え、背中には半透明の球体を必死にたたき続けるシンクの姿があった。
だが、それをやめると、シンクは数歩後ずさりをする。

「はぁ……はぁ……駄目だ、僕の声が届いてない」

聞こえてきたのは、そんな言葉だった。

その言葉に、俺は我慢できなかった。

「諦めるのか？」

「え?!」

俺は静かにシンクに問いかけつつ、ゆっくりとシンクの前に降りて行く。

「わ、涉!?!」

俺を見たシンクの表情が驚きに満ちる。

「曲がりなりにも勇者と呼ばれたお前が、そんな風に諦めてどうする」

「だったら……だったら僕はどうすればいいんだ!! いくら呼びかけても僕の声は姫様には届かない! どうすれば」

俺の言葉に、シンクが激昂した。

その言葉には悔しさが感じられた。

「簡単な事だ。諦めなければいい」

「え?!」

シンクの言葉を遮ってはなつた言葉に、シンクは意外そうな表情で俺を見る。

「諦めるな！ 抗え！ それが弱者に出来る唯一の事だ。 まだ死んだわけではない、だったら諦めずに呼びかけ続ける！ 何でもかんでも諦めてたら、救えるものも救えないぞ！！」

俺はこの時、どうしてここまで感情をあらわに出して怒っているのかが分からなかった。

「たとえその姿が醜く、滑稽でもお前の努力を馬鹿に出来る物はこの世界には存在しない。 だから、抗え！！ 男を見せろ！ 勇者、シンク・イズミー！！」
「ッ！？」

俺の言葉に、シンクが息をのんだ。
そして表情が変わった。

その表情は、力と可能性に満ち溢れていた。

「うん、その表情だ。 お前は引き続き呼びかけ続ける」
「分かった」

俺の指示にシンクは頷く。

「俺はこれからこの魔物に干渉して、弱体化させる。 ただし、その間は俺は意識を集中させるからお前たちのフォーローには回れない。 やれるな？」

「うん、出来る！！」

俺は力強いシンクの返事を聞くとそのまま背を向けた。

背後からは、姫君に呼びかけるシンクの声が聞こえた。
それを聞きながら、俺は神剣を二本取り出す。

「すう……はぁ……」

そして意識を集中する。

（俺の持つ霊力すべてを注ぎ込んで、こいつを弱まらせる！ 浄化は出来ないがそのくらいならできるはずだ）

そう思い、俺は詠唱を始める。

「我、光溢れし者。わが名の下、剣を通し全てを浄化せし光となれ
！！」

詠唱が完成すると同時に、俺の体中から力が溢れだす。
その力は、神剣へと集まっていた。

（ああ、ようやく分かった）

俺はその時、さっきの疑問が分かったような気がした。

（俺は、重ねてたんだな、あの弱り切ったシンクに）

俺が生きていた時、何も目標を持たず打算で生きていた俺よりは何億倍もましな人間に怒る権利はないかもしれないが、あの姿を見ていたら口から出ていたのだ。

「はぁ！！！！！！」

そして俺は今まで考えていたことを振り切るように、二本の神剣を魔物の背中に突き刺した。そこで俺の意識は途切れた。

覚醒まで残り、5分

第30話 戦いの終わり（後書き）

次回はオリジナルストーリーになります。

【閲覧注意！】第31話 変えられぬ未来／覚醒のとき（前書き）

今回の内容に、残酷な描写があります。

それが苦手な方は読まれない事をお勧めします。

なお、読まれてからの非難はおやめください。

【閲覧注意！】第31話 変えられぬ未来／覚醒のとき

俺は気が付くと、どことも知れぬ場所に倒れていた。

「……………つぐ」

体中に走る痛みを耐えながら、俺はゆっくりと立ち上がった。その時だった。

「ッが!？」

突然、俺に凄まじい妖気が流れ込んできたのだ。そのあまりの妖気の濃さに、俺は再び意識を失った。

「……………殿、……………るか!」

「涉殿!」

「う……………」

次に聞こえてきたのは、聞いたことのある二人の声だった。俺はその声に応えるように、ゆっくりと立ち上がった。

「無事で何よりでござる」

「うむ。ところで、この辺に変な刀はなかったでござるか？」

そこにいたのはユキカゼにダルキアン卿だった。

そして俺が無事だったことにほっと胸を撫で下ろすユキカゼに、真剣そつな表情で問いかけるダルキアン卿。

俺は、その光景既視感を覚える。

どこかで見たことがあるのだ。

（何処だ、どこで見た）

俺は必死に記憶を手繰り寄せ、そして見つけた。

（これって、あの時の予知夢と同じ！）

そつだ、前に見た予知夢の内容そのものだった。

何処かわからない場所に傷だらけで倒れる俺、一度起き上がるもすぐに気を失ってしまう光景。

そして、俺はその先に起こることを思い出した。

「ッ！？」

俺はその未来に息をのんだ。

「……る」

「ん？ どつしたでござるか？」

俺の呟いた言葉が聞き取れなかったのか、ダルキアン卿は俺に聞き返した。

「逃げ……る」

俺は二人に警告を発した

その次の瞬間、俺の中に入り込んだ妖気が一気につごめき始めた。

「うああああああああ！！！！」

「ッ！？　これは！！」

「涉殿……まさか！！」

俺の悲鳴を聞いた二人は、驚いた様子で俺を見る。

俺の体は、勝手に神剣を二本具現化して、二人の目前へと迫っていた。

（やめる……………）

俺の願いもむなしく、俺の体は二本の剣を振り上げて、二人にめがけて振り下ろした。

だが、その斬撃を二人は間一髪と言ったところで躲した。

「うああああああ！！！！！！」

そしてそれを見た俺は、再び二人にめがけてものすごい速度で駆け出す。

「つく！　裂空、一文字！！」

ダルキアン卿はそんな俺に向けて、紋章剣を放った。

防御をすることなど念頭に置いてない特攻だ、喰らえば俺は怪我では済まない。

「があ!？」

ダルキアン卿の斬撃が、俺の体に見事に命中し、後方に吹き飛ばした。

自分の体なのに、まるで他人事のように感じる。
自然と痛みはなかった。

「すまない、涉殿。許してくれ」

ダルキアン卿の謝る声が聞こえた。
逆だ。

俺がダルキアン卿に謝る方だ。

俺の暴走と言う最悪の未来を変えてくれたのだから。

(本当にそうなのか?)

ふと、心の中で疑問を口にした。

どうもこれで終わりのような気が俺にはしないのだ。

それを証明するかのように、俺の自我はそこで突然途切れた。

3人称Side

ダルキアンにやられ、地面に倒れている涉。

そもそも、涉がこうなったのは、二つの呪いが同時に作用していることによる。

渉がフロニヤルドに来たときに拾った短剣、妖刀。

そして魔物となる元凶の妖刀。

その二本が渉の中でうごめいているのだ。

さらには、それを浄化する霊力も使い切ったことが災いし、渉は体に乗っ取られたのだ。

そして、とうとうその時が訪れた。

「なッ!？」

致命傷を負ったはずの渉が立ち上がったことに、ダルキアンは驚きを隠せなかった。

その渉は両手を大きく広げ天空を仰ぎ見る。

「うあああああああああ!?!?!?!?!」

そして雄叫びを上げた。

その雄叫びは、地面を………空気を震わせる。

「お………おおお

」

渉から発せられるのは紫色のエネルギー……妖気が濃縮された邪気だ。

そして突然の閃光に、ダルキアンとユキカゼは目を閉じる。

「ッ！?!?!?」

閃光が晴れ、目を開けた二人はその光景に声が出なかった。

その光景は、空は真っ黒な闇に覆われている。

それは雷雲などと言うものではない。

そして、前よりもさらに薄暗くなった中、異様な存在感とオーラを放っているのがいた。

「渉……………殿？」

ユキカゼが疑問形で呼びかける。

それも当然だ。

今の渉の姿は、それを知るものには想像もできないほどの変化を遂げているのだ。

髪の色は黒く、背中に申し訳程度についていた白い羽根は、真っ黒に染まっていた。

服装も灰色と青色の礼装が、真っ黒になっていたのだ。

それは、まさに……………

「これは……………魔物」

魔物、そのものだった。

いや、魔物と言うのも生易しい。

言うなれば 破壊神だろう。

「そんな……………馬鹿な」

ダルキアンは信じられないと言った様子で、つぶやいていた。そして、渉は目を開けた。目の色は透き通った青から、血が混じったかのような紅へと変わっていた。

「……………」

再び上げた雄叫び、それは世界すらを揺るがすほどの物だった。

「ッ!？」

そのあまりのすさまじさに、二人は一步下がってしまう。魔物退治をしていた二人でさえ、そうさせてしまうのだ。そして、その動きが二人の運命を決めた。

「がああ!？」

突然風を切るような音がしたのと同時に、ユキカゼの悲鳴がダルキアンの耳に聞こえた。

「ッ!？ ユキカ ……」

ユキカゼの方に視線を向けようとしたダルキアンは、体を切りつけられた痛みと共に地面に倒れた。

薄れゆく意識の中で、ダルキアンが見たのは、赤い液体のついでいる魔物から引き抜いた妖刀と、短剣を手にした渉の姿だった。

深い谷底、三人の人影。

そのうちの二人は地面に倒れ、体からは赤い液体を流している者。そして、そのそばに佇む”魔物”。

「！！！！」

再びの雄叫びをあげ、”魔物”はその場を飛んでいく。

残されたのは、致命傷を受けた二人の体を覆う、やわらかい光だけだった。

涉が予知した悲劇。

それが今開幕を告げた。

悲劇は、まだ終わらない。

【閲覧注意！】第31話 変えられぬ未来／覚醒のとき（後書き）

いかがでしたでしょうか？

本当に申し訳ありません。

まだしばらくこの内容が続きそうです。

ですが、必ずハッピーエンドにさせますので、温かい目で見守ってください。

それでは、これにて失礼します。

【閲覧注意】 第32話 絶望の現実（前書き）

今回も閲覧注意です。

読まれる際は自己責任でお願いします。

【閲覧注意】 第32話 絶望の現実

3人称Side

渉が魔物化した瞬間、勇者シンク、ミルヒーレ姫の二人は渉のいた場所からやや離れた場所にいた。

「これは、一体……」

シンクは押し寄せてくる”何か”に眉をひそめた。それは、渉が発した雄叫びの際の物だった。

「姫様！ 掴まって！」

「は、はい！」

この場にいたら危険だ、と言う事を本能で感じ取ったシンクはトルネーダーでその場を離れようとする。

親衛隊長のエクレールと合流できれば、何があっても対処ができると言う考えの元だ。

だが、その決断は遅すぎた。

『み、見てください！！ 暗闇の空に星が！！』

実況のナレータが慌てた口調で状況を実況する。

シンクとミルヒーレ姫は、空を見上げた。

雷雲よりも暗くなった空には、数多の流れ星があった。

だが、それは美しいと言うよりは、不気味さの方が勝るものであった。

「た、大変です！！ 空に何かがうか

ナレーターが慌てた様子でそう告げた瞬間、空の方から爆音が響いた。

「「ッ！？」」

二人は、慌てて爆音のした方向を見る。
そこには……

「な、何だ……あれは」

空高くに浮かび上がる魔物化した涉がいた。

シンクは信じられないとばかりにその魔物を見ていた。

「……！！」

魔物が声を発するとともに、黒い円陣が魔物の前に展開される。
その円陣は地面に……シンクとミルヒオーレ姫へと向けられていた。

「ッ！！ ディフェンダー！！」

シンクは、それが危険な物であることを悟り、盾を展開するとミルヒオーレ姫をかばうように前方に出て盾を構える。

それと同時に、魔物化は黒いエネルギーの塊が放たれる。

それは、シンク達が使っていた紋章砲のようなものだった。

だが、異なるのは、そのエネルギー源が”闇”であると言う事。

「ぐッ！！」

腕に伝わる圧力に、シンクは顔をゆがめる。
黒い傍流は留まるところを知らない。

「うおおおおお!!!」

シンクは支点をずらし、自分の建っている場所の横側に受け流した。

「シンク、大丈夫ですか！」

「な、何とか」

シンクの身を案じるミルヒオーレ姫にシンクは、息を切らしながら答える。

「はあ!」

シンクは紋章を展開する。

それはフロニヤルドに来たときに最初につかった紋章砲を行使するためだ。

そして、シンクは紋章砲を放つ。

それは一直線に魔物へと向かい、命中すると放った本人も、それを見ていたミルヒオーレ姫も予想していた。

しかし……

「!!!!!!!!」

「なッ!?!」

魔物に直撃する寸前に魔物が雄たけびを上げると同時に、砲撃は放った本人の元へと向かっていた。

シンクはそれを盾で防ぐことで難を逃れた。

「ほ、砲撃が返ってきた……」

それは、反射だった。

魔物は、シンクの攻撃を跳ね返したのだ。

(あいつは上空にいて、まともに戦う事も出来ない。紋章砲を使っても今のように跳ね返される)

シンクはこの時、ようやく退路がないことに気付いたのだ。

攻撃をしようにも空高くに浮かび、したら跳ね返されると言う悪循環。

正面から戦っても勝つことが出来ない。

(どうする……どうすれば)

シンクは、必死に打開策を考える。

それは戦闘時においては、最も最良の手だ、

だが、今回のそれは目の前に未知数の強さを持つ魔物がいる時の対応としては、最悪の選択だった。

「シンク、前!!」

「ッ!」

ミルヒオーレ姫が必死に叫ぶ声に我に返ったシンクが見たのは、目の前まで迫る妖刀と短剣を振り下ろそうとしている魔物の姿だった。

「が!」

「きゃあああ!」

そして、魔物はシンクとミルヒオーレ姫を切りつけた。

それは一瞬の事だった。
地面に倒れ伏す二人、そして二人の周囲は赤く染まる。
それはユキカゼ達と同じ状態であった。
二人の体が光り始める光景もだ。
奇しくも、それはレオ閣下の視た光景とほとんど一致していた。

その頃、エクレールとリコッタの二人は急いで向かっていた。

「さっきの紋章砲はシンクさんの物です！」
「と言うことは、二人の身に危険が迫っていると言う事だ！」

それが急いでいる理由だった。
そして、二人はシンク達がいる場所へとたどり着いた。

「シンクさん、姫!!！」
「勇者、姫様!!！」

地面に倒れているシンクとミルヒオーレ姫を目の当たりにし、慌てて二人の元に駆けよる。

「ッ！！」

「これは……………一体」

リコツタは、二人から流れている赤い液体を見て目をそらし、エクレールは状況が呑み込めなかった。

その時、エクレールは空気の歪を感じた。

「ッ！？ リコ！！」

それは、ほとんど勘だった。

エクレールはリコツタを跳ね飛ばす。

その次の瞬間、轟音を立てて魔物が二人のいた場所に落ちた。

「あ……………ああ」

それを見たリコツタは体を震わせていた。

「あれは、一体……………ツぐ！？」

エクレールは突然肩に焼けるような痛みを感じた。

見れば、肩から赤い液体が流れていた。

そして、目の前にいる魔物の両手には剣が握られている。

そう、彼女は魔物の攻撃を食らっていたのだ。

そして、地面に佇んでいた魔物はゆっくりと、二人の方を見た。

「ひッ！！」

「ッ！！」

それを見た二人は、そのあまりのオーラに一歩後ずさる。

それは一瞬の事だった。

気づいた時には、魔物は二人の目の前まで来ていた。それはシンク達と同じパターンだった。魔物は剣を振り上げ、それを振り下ろそうとする。だが、そこで奇跡は起きた。

「どおりやああ!!」

男の声とともに、飛んできた何かが魔物を吹き飛ばしたのだ。

「!!!!?」

魔物はその突然の攻撃に叫び声をあげる。

「大丈夫かあ、たれ耳!」

その男の声に、エクレールとリコッタは声のする方を見る。

「ゴドウィン!!」

そこにはゴドウィンとその横にレオ閣下、ガウル達が立っていた。

第33話 かすかに見えた希望の光（前書き）

今回は閲覧禁止ではありません。

ちなみに、どうしても展開が速くなり過ぎたような気が……

第33話 かすかに見えた希望の光

「勇者！ ミルヒ！！」

レオ閣下は二人の姿を見つけると、慌てた様子で駆け寄る。

そしてすぐに息があるかを確かめた。

やがて、かすかに息があるのが分かったレオ閣下はほっと胸を撫で下ろした。

「一体、どうなってるんだ？ 空には流れ星が流れてるし二人は怪我してるし」

「私にもわかりません。ただ……」

ガウルの問いかけに、エクレールは首を振ってこたえと、魔物のいた方向に顔を向ける。

それに合わせてその場にいた者が、魔物に視線を向けた。

「……………！！！！！！」

「きゃあ！？」

「つく！？」

「うおわあ！？」

世界をも揺らす勢いの雄叫びに、その場にいた全員がよろけた。

「こ、こりゃあ、とんでもない奴だ

ゴドウィンが冷や汗を流しながら呟く。

それだけでも、その雄叫びの凄まじさが伝わるだろう。

すると、魔物はゆっくりと上空へと飛んでいく。

「こりゃ、まずいな……」

「ええ、あの高さでは私達には手も足も出ません」

ガウルの呟きに、エクレールが答える。

二人が空中でも戦えるのはせいぜい地上から約10mが限界だ。それ以上の高さにいる魔物とは、まともやり合うのは難しい。

「でしたら、こうすればいいんです、よ!」

ベールはそう言いながら上空……魔物が浮かんでいる方向に弓を構えると、矢を射た。

その矢は、緑色の軌跡を描きながら魔物へと向かう。

そして、その場にいる全員が当たったと思った瞬間だった。

「!」

「えっ!」

ベールは突然の事に反応が出来なかった。

「きゃああ!」

その結果、自分の放った矢が自分に直撃し、ベールは後方に吹き飛ばされた。

「攻撃が、跳ね返された?」

状況を冷静に見ていたノワールが静かに呟く。

彼女もまた、魔物の持つ反射の餌食となったのだ。

「……！！」

魔物が声を発するとともに、黒い円陣が魔物の前に展開される。そして、それは一気に放たれた。

「ツク！！ 裂空、十文字！！」

「魔神閃光波！！」

エクレールは十字型のエネルギー刃を、レオ閣下は矢を射ることで相殺しようとする。

だが、二人の攻撃は一瞬にして闇に飲み込まれた。

「なッ！？ 全く通用しない！！」

二人は驚きつつもその場から離れる。

次の瞬間、二人の立っていた場所に黒い傍流は着弾した。

「一体、あれは何なんだ」

「あれは……………」

ガウルの疑問に、レオ閣下は静かに答える。

「あれは、渉が魔物化した姿じゃ」

「なッ！？」

再びの驚きだった。

「れ、レオンミシエリ閣下、こんな時に冗談は」

「冗談ではない！ 姿かたち違えど、星詠みで見た通りだ」

ゴドウィンに反論するとレオ閣下は静かに呟く。

「信じたくはねえが、おそらくその通りなんだろうな」

ガウルはレオ閣下の言葉を肯定する。

それは、渉の開戦前の行動と、この場に渉がない事を考えての事だった。

「そして、奴を倒すカギを握っておるのはたれ耳、お前じゃ」

「わ、私が!？」

レオ閣下の言葉射、エクレールは驚いた様子で答えた。

「渉曰く、たれ耳に切り札を託しているらしい」

「切り札……………まさか」

エクレールは今まで背中に背負っていた、銀色のさやに入った剣を手にする。

「それが、渉の言っていた切り札か」

「はい、神殺しの剣と言う名前で、もしものときはそれで自分の体を貫けと言っていました」

ガウルの問いかけに答えるエクレールの手はかすかに震えていた。今、彼女には運命の選択を迫られていた。

それは、手にある剣を使って魔物を貫くか、もしくはそれをせずに自分たちが犠牲になるか。

まさにやるかやられるかの状態。

そんな選択肢を突き付けられている状態で、震えるなど言う方が無理な話だ。

「して、どうするのじゃたれ耳？ 一応渉はたれ耳に頼んでいる様子だからそれを尊重するが、お主がやらぬのであれば、儂がやるう」
「ッ！！」

レオ閣下の言葉に、エクレールは肩を震わせる。

エクレールの頭の中にあるのは、渉との思い出の数々だ。それが彼女の頭の中で永遠と流れていた。

「……………やります」

彼女が言った声は、か細い声だった。

それは、いつもの彼女を知るものであれば予想もできないほど不安と、恐怖に満ちているものだった。

そんな時、彼女の持つ剣に異変が起こる。

「ッ！？」

突然剣が輝き始めたのだ。

そして光は膨れて行き、そのまま彼女たちを包みこむ。

その光は一瞬で消えると、何の変化も内容に見える。だが、唯一違うのは……

「しかし、どうやってあそこまで行くのじゃ？」

「セルクルに乗ってもあれの餌食になるだけ」

その場にいる者全員に希望と言う名の力が、満ちていたことだ。

「だったら、拙者の出番でいじめる」

「ユキカゼー！」

突然の声に、全員が声のした方を見ると、そこにはふらつきながらもかろうじて立っているユキカゼの姿があった。

「遅れてごめんでござる。魔物化した涉にやられて気絶していたでござる」

「だ、大丈夫でありますか？ ユッキー」

「この通りでござる」

心配そうに問いかけるリコッタに、ユキカゼは大丈夫であることをアピールしながら答えた。

実際問題、なぜ彼女が無事なのか、それは涉が全員に渡した保険の腕輪による。

致命傷を受けた彼女たちは、腕輪が自動的に治癒術式を発動させるように仕掛けていたのだ。

それによって、一命をとい止めたのだ。

これが、涉の考えた”最悪な事態を回避する布石”である。

そして、それは今最終段階になろうとしていた。

「拙者が、背負ってあそこまで行くでござる。そこを」

「私がこれで貫く、と言うわけか」

ミオン砦戦の時に上空に舞ったユキカゼだからこそできる方法だった。

「後は、攻撃をどう防ぐか、か」

「それなら、左手にある腕輪に防御と念じるだけで、3回分攻撃から身を守ってくれるらしい。これも涉の保険だったんだな」

しみじみとつぶやくガウル。

対するエクレールは、その腕輪を何とも言い難い様子で見つめる。

「それでは、エクレ、拙者の背中に」

「わ、分かった」

エクレールはユキカゼにおぶさるように背中にしがみつく。

「それでは、一気に行くでござるよー!!」

「ッ!!」

その声と同時に、エクレールを突風が襲う。

それは、二人が宙を舞ったことを意味する。

二人は一気に魔物の場所まで飛んでいく。

「
!!」

それを危険と察知した魔物が声を発するとともに、黒い円陣が魔物の前に展開される。

そして放たれる黒い霧。

(守ってくれ! 涉!!)

彼女がそう念じるとともに、エクレールとユキカゼの前方に透明な膜ができ、それが魔物の攻撃を防ぐ。

「今でござるよー!!」

「はい!!」

エクレールはユキカゼから離れて、その時の勢いそのまま魔物へと迫る。

右手には渉が渡した神殺しの剣。

「はああああああ!!!」

それが今、魔物の体を貫いた。

「!!!!」

「ツグ……………」

エクレールは魔物から発せられる衝撃波に吹き飛ばされる。

そして、そのまま地面に向かって落ちていく。

離れていた場所にいた為、ユキカゼは間に合わないかった。

このまま地面に落ちると覚悟していたエクレールは、不意に落下の感覚がしなくなったことに気付く。

そして、ゆっくりと閉じていた目を開けると、そこにいたのは……

「ありがとう、そしてお疲れ様。エクレール」

優しい笑顔を向けている渉の姿だった。

第34話 負の象徴を倒すために

俺の意識が再び戻る。

そこはフロニヤルドの空だった。

下には真つ逆さまに落ちていく緑色の髪をした少女。

(っつて、落ちているのっつてエクレ!?)

俺は急いで急降下する。

そして、彼女を受け止めた。

「ありがとう、そしてお疲れ様。エクレ」

ゆっくりと目を開く彼女に、俺は優しく微笑みお礼と労いの言葉をかけた。

「渉！」

驚いた様子で俺を見ながら名前を呼ぶエクレ。

「お前、本当に渉なのか？」

「俺は正真正銘の、小野 渉だよ」

用心深い彼女の様子に苦笑いを浮かべながら、答えた。

と、そこで彼女は今自分の置かれている立場が分かったのだろうか、顔を赤くした。

俺はエクレをお姫様抱っことやらをして抱えていたのだ。

「お、降ろせ！ 手を離せ」

「降ろせって、今ここで手を離したら真っ逆さまだぞ!？」

エクレが暴れて抵抗するので、俺は急いで地面に降り立った。

「はい、到ちや……ぐは!？」

エクレに思いつきり殴られた俺は、二、三步よろけた。

「き、ききき貴様! よりにもよって私にあのような!?!」

怒るのかてれるのか、どちらかにしてほしい。

「はいはい、それはまた後で。まだ終わってはいないぞ」

「それは、どういう意味で　　っ!？」

俺が上空を見るのにつられるようにそこにいた人たちも空を見上げる。

空には無数の流れ星と、未だ物々しい雰囲気を纏って浮かび上がる魔物の姿があった。

「そんな!？ 涉はもとに戻ったはずだ!」

「あくまで俺はあいつの中にあつた光の部分です。彼女がやったのは、俺とあいつを分離することですから」

そう、あの剣には分離の作用もあるのだ。

そのおかげで、俺はこうして外に出ることが出来るようになったのだ。

「」と言う事はよ、つまり「」

「ああ、あいつを倒せば世界は守られる」

ガウルの言葉に俺は頷くと、全員表情が明るくなった。それは、希望に包まれたものだった。

「だが、あいつは上空に浮かんでいる。どうやって戦う」「
「そんなの簡単さ。地面に落とせばいい」

俺はそう答えると、エクレから神殺しの剣を受け取り、そのまま魔物の方へと肉厚する。

「その翼、折らせてもらおうよ。閃！」

閃光のような剣筋で、俺は魔物の翼を切り落とした。

「……………?!?!?!」

けたたましい叫び声を上げながら、魔物は地面に落ちて行った。

「どうだ？」

「な、何と規格外な攻撃をするのじゃ、お主は」

俺を待っていたのは、呆れたような視線だった。

「さて、これから最終決戦だ。ファールタンさんとエクレ、レオ閣下意外はシンク達とユキカゼの護衛を」

俺はその場にいる全員に指示を出していく。

「ユキカゼはまだふらついている。だから一時休み。それ以外の名前の出てない人は三人に攻撃が届かないように守って。俺はそこま

で手はまわせないから」

「分かった」

「心得た」

「了解やで」

俺の説明に、それぞれが頷く。

「さて、と」

俺は巾着袋から最後の霊石を取り出す。

そして俺はそれを飲み込んだ。

その次の瞬間、体中に力が巡ってくる。

「リミットブレイク・真名解放!!」

そして俺は最後の封印を解いた。

それは世界の意志としての本当の能力であり、真の姿でもある。

俺の手には神殺しの剣。

味方陣も限界に近い。

だが、勝機はある。

「よし、行くぞ!」

そして、俺達の最終決戦は幕を開けたのであった。

第35話 決戦(前書き)

魔物編の最終決戦です。
少々短くしすぎましたが。

第35話 決戦

「まずは一発」

俺は手に握っている剣に霊力を込める。

本来は紋章術などを使うのがセオリーだが、この姿を考えると神術を使う方が効率がいいのだ。

「神術、第6章……闇に堕ちた者は光の裁きが待っている！」

一閃の光が魔物を貫く。

「……！！」

魔物が悲鳴を上げるが、それをしり目に、俺は後ろにいるレオ閣下たちに声をかける。

「皆、後に続いて！」

僕の横からレオ閣下とエクレが飛び出して魔物へと向かう。

「ああああああ！！」

そしてそれぞれが持つ武器を魔物に振り下ろす。

「……！！！？」

臨時で作り上げた陣形は俺とファールブルタンで、魔物の気をそらしその隙をついてレオ閣下とエクレが切り込むと言ったものだ。

その後、怯んでいる間に俺達の後ろに避難する。

それを魔物が弱るまで繰り返す。

弱ったところで俺の必殺技を使って倒すと言うのが作戦だ。

かなり危険な陣形だったが、時間もなかったためにこういう事となったのだ。

攻撃を終えた二人は最初の位置に戻る。

「……………」

すると、魔物は凄まじい速度でこっちに迫ってきた。

それは常人には決して眼にもとまらぬ速さであろう。

だが……

「俺にはお見通しだ。降り注げ、レイン・ソード」

俺には魔物の動きがスローモーションのように見えていた。

そんな魔物に、俺は数多の剣を放ち迎撃する。

「……………!?!」

突然の攻撃に魔物は驚くが、素早い動きでそれを交わすと俺達と距離を取った。

どうやらこっちに接近すればどういつ目に合うかを学んだようだ。

だが、接近戦をしないとすると、後に考えられる攻撃は、遠距離攻撃だ。

「……………!?!」

魔物は雄叫びを上げると、黒っぽい魔法陣が俺達に向けて展開する。

「気を付ける渉！ あれは黒い霧の紋章砲のようなもので攻撃してくるやつだ！」

それを見たエクレが俺に警告を出す。

「上等！ 自らの攻撃は自らで受けよ！！！」

俺も前方に魔法陣を展開する。

それは、あの魔物から奪った力の一つだ。闇を含んだ攻撃が俺に向かって放たれるが、俺の魔法陣に触れた瞬間、まるで鏡に触れたかのようにそのまま魔物の方へと戻って行った。

「！！！」

それは反射の魔法。

神が正反対の力を使うと言うのは、意外にもおかしく思える。

「エクレ！」

「裂空、十文字！！！」

俺の言いたいことが分かったのか、エクレは紋章剣を魔物に放つ。魔物はその攻撃を剣で防ぐが、十字のエネルギー波に隠れるようにして突進していた俺には気づかれなかった。

「光の中に闇は無し！」

魔物を切りつけた。

それから少し遅れて、俺が切りつけた場所が爆発する。

「……………?!?!?!」

「予想以上に弱いな」

「まあ、あいつの核がめちゃくちゃに弱っているし、俺が外に出たことで魔物が弱体化しているからだがな」

エクレの指摘に、俺は魔物から眼を話さずに答えた。

実際にどうかはわからないが、弱体化していることは確かだ。

（あれ、やるか）

俺は考えをめぐらす。

俺の必殺技”レクリエム”をやるのかどうかの判断だ。
今魔物は非常に弱っている。

これならば、妖刀ごと浄化できるだろう。

だが、魔物の力は無限大だ。
何が起こるかは分からない。

「はあ……………はあ」

横にいる仲間を見ると、三人とも肩で息をしていた。
仲間ももう限界。

俺の霊力も6割を切った。

（一か八か、やってみるか）

俺はそう判断するとファールブルタンに、指示を出す。

「ファールブルタン、あれをやるからあいつの動き、少しの間だけ抑えてくれる？」

「分かりました」

ファールブルタンが頷いたのを確認した俺は、詠唱を始める。

「孤高を抱きし愚かなるものよ、我が歌を聞きたまえ、其が築くものはただの破滅の道のみ」

神殺しの剣に夥しい光が纏う。

神剣には劣るが、それでも威力は申し分ない。

「さすれば、すべてをわが名のもとに浄化してくれよう。聞くがい我が魂の歌を！！レクリエム！！」

詠唱が終わると同時に剣を魔物のいる方向に振り下ろす。

その次の瞬間、眩い光が一直線に魔物の方へと向かって行き、そして魔物に命中した。

「！！！！」

魔物は断末魔を上げながら、光に飲み込まれた。

その瞬間、俺の視界は光で覆われた。

それがどのくらい続いたのかは分からないが、光がゆっくりと薄らいでいく。

そして光が無くなった時、俺が目にしたのは戦の時の晴れた青空だった。

「勝った……のか？」

「ああ」

エクレの呟きに、俺は簡潔に答えた。

そして俺は魔物が立っていた位置に向かう。

勝利の景品としては、色々あれだな

俺は苦笑いを浮かべながら、地面に突き刺さっていた神剣吉宗正宗を抜くと格納する。

そしてその横にあったのは二本の妖刀だった。

「大丈夫なのか？ これ」

俺は前のようにならないために、手をかざして邪気を調べる。その結果邪気のようなものは一切出なかった。

「でも、なぜに神剣になるんだ？」

俺は思わずそう呟いた。

そして妖刀を手にエクレ達の方へと戻る。

「わ、涉殿、それは妖刀じゃ!？」

「何で物騒な物を手にしているのだ!!」

妖刀を見た二人の剣幕に、俺は若干押され後ずさった。

「あ、あのな、これもう妖刀ではなく、神剣になってるぞ」

「はい?」

二人の驚きも理解できる。

今まで忌々しい呪いを持った剣だったものが、いきなり間反対の聖なる剣になっていると聞けば、誰だった呆然とするだろう。

「おそらく、俺のあれが強すぎて妖刀が神剣に変わっちゃったんだろ?」

「何と言う非常識な……」

二人の呆れたような視線がとても痛々しく感じられた。
こうして、魔物戦は幕を閉じたのであった。

第36話 正直な心（前書き）

ようやく恋愛系らしくなりました。
果たしてこれでいいのかは別ですが。

第36話 正直な心

今俺は、背中に生えた大きな翼と霊力で空を飛んでいる。
俺の両手に握られている四本のひもの先には……。

「うつひょく、見晴らしが良いな」

「だが、少々不安定でござるな」

「ここでまさかお茶を飲めるとは、思ってもいなかったでござるよ」

大きなかごの中で、まったりと和んでいるユキカゼやダルキアン卿、
ジェノワーズやガウル、シンクに姫君、そしてエクレとリコッタに
レオ閣下がいた。

なぜ、こうなっているのかと言うと今から10分くらい前にさかの
ぼる。

魔物を無事に倒すことのできた俺達は、俺の霊力を使い怪我をした
者達に治癒を施した。

そのおかげか、怪我を指摘を失っていた人たちは意識を取り戻した
のだ。

だが、そこで一つだけ大きな問題が生じた。

それは、疲労と怪我でフラフラ状態になった人たちをどうやって連

れて行くかだ。

歩いて行かせると言うのは残酷すぎたので、俺が出したのはひもがついた大きなかごだった。

ゴドウィンは歩けるとのこと、かごに乗ったのはそれ以外のユキカゼやダルキアン卿、ジェノワーズの三人にガウルと、シンクに姫君、エクレとリコツタにレオ閣下の11人と言う大人数だ。そして今に至る。

「貴様ら！ 人が苦勞している中、何まったりと和んでるんだ！！」
「お前は怪我をして疲れている姫様に、歩けと言う気か！」

エクレの的を得た反論に、俺はそれ以上何も言えなくなった。

「って、その三馬鹿！ 暴れるな！！」

「馬鹿って言う方が馬鹿」

「そつやそつや！」

「……はあ」

俺の注意に反論するジェノワーズの三人に、俺は思わずため息が出た。

エクレの気持ちがとても分かったような気がした。

「しかし、空を飛べるとはすごいでござるな涉殿は」

「それはどうも」

ダルキアン卿の感嘆の言葉に、俺は愛想なくお礼を言う。

どうして俺がここまでごねているのか、それはかごの重さだ。

どんなに軽い人が乗っても、それが11人となればかなりの重さだ。しかもその重みは俺の手にずっしりと来ているのだ。

もし一本でも紐を離せばかごは不安定となり、乗っている人たちを

危険にさらすことになる。

俺達が向かっているのはフィリアンノ城。

そこまであともう少しと言うところまで来ていた。

だが実際問題俺の意識はもうろうろ状態だった。

霊力を大量に使ったのもあるが、神格を失ったのもまた大きな要因の一つでもあった。

「大丈夫か？ さっきから微妙に揺れているが」

「……………大丈夫だ」

俺の身を案じてくれるエクレに感謝しながら、俺は最後の力を振り絞る。

今ここで俺が意識を失ったら全員が怪我では済まなくなる。

そしてようやくフィリアンノ城に到着した俺は敷地内でゆっくりと下降して行く。

急下降すると危険だ。

「はい、到着だ」

「お疲れでござる、涉殿」

「ありがとう、わた

（ッく、もうダメ……………だ）

俺は誰かのお礼の言葉を聞きながら、その場で意識を手放した。

「ん……」

次に俺が目を覚ますと、そこはフィリアンノ城の俺に割り当てられた部屋だった。

窓から差し込むオレンジ色の光が、今の時刻が夕方であることを告げていた。

「目が覚めたか」

「……エクレか」

声のした方……俺のすぐ横を見ると、椅子に腰かけたエクレの姿があった。

「何だ、私では不満か？」

「いや、そう言うわけではないが……」

エクレの様子に違和感を感じつつも、俺は聞きたいことを尋ねた。

「俺、あの後どうなったんだ？」

「あの後、倒れた渉を私とスットコ勇者で部屋まで運んだ。それと……」

エクレの答えによれば、意識を失った俺をシンクと一緒にエクレが運んでくれたようだ。

そしてその間姫君とレオ閣下による謝罪会見のようなものがあったらしい。

「しかし、ここは何だか雰囲気が違うな」

「そうか？」

「そうに決まっている。何だか外と世界が違うような気がする」

俺はエクレの感受性の豊かさに、驚きを隠せなかった。

世界が違うと言うのは紛れもない事実だ。

なぜなら、俺が回復しやすいようにこの部屋を、簡易的に天界化させてあるからだ。

それが分かるにはかなりの感受性が必要だ。

理由は分からないが、そうらしい。

「その……悪かった」

「ん？ 何がだ」

突然下を向いて俯いたエクレに、俺は上半身を起こした。

「渉の胸を貫いたことだ」

「ああ、あれか。それなら別に何にも思っていない。逆に感謝してるぐらいだ」

エクレの口から出た言葉に、俺は思い出しながら言うと、最後にそう言った。

「もしエクレがやらなかったら、全員は助かってもなかったし、俺もこうして話すこともできなかっただろう」

「……お前は本当に馬鹿だ」

俺の言葉に、絞り出すようにして呟いたエクレの言葉に、俺は思わずこけた。

「言うに事欠いて馬鹿かい」

「馬鹿も馬鹿、大馬鹿だ！ 自分を犠牲にして何になると言うんだ
！！」

俺の胸ぐらをつかんで叫ぶエクレ。

だが、すぐにハツとすると、手を離してはつが悪そうに後ろを向いた。

「犠牲失くして事は成し遂げられない。であればその犠牲は俺が最適だ」

「……それは、お前が世界の意志とか言う神だからか？」

エクレの言葉に、俺は息が止まりそうになった。

「どうして、俺の真名をエクレが」

俺が世界の意志であることは、レオ閣下にしか言っていないはずだ。

「レオ姫から聞いた。お前が何者であるかを」

「そうか」

なぜか俺は心がすつきりとしていた。

今までにないほどの清々しい気分だ。

「一つ訂正、俺が自分を犠牲にするのは神だからと言うのもあるが、俺自身の償いだ」

「償い？」

エクレの言葉に、俺は無言で頷いた。

「昔の俺……神になる前だが、極悪非道の事をしたんだ。その償いだ」

「……………」

俺の言葉に、エクレは何も言わない。

「それにしてもエクレは信じるんだな、俺が神であると言う事」

「信じるも何も、あの姿を見れば納得がいく。それに渉るが規格外であったことにも納得できる」

やはり、神様「白い翼と言う図式は、全世界共通らしい。」

「ありがとな、エクレ」

「え？」

突然の俺のお礼に、エクレが声を上げた。

「エクレのおかげで、俺を束縛していたものが無くなった。自由になれたんだ」

「……………」

「それと、それに伴って一つ重要な事をエクレに言わなければいけない」

俺は無言のエクレに、そう声をかける。

「俺は今まで自分の気持ちに背を向けて生きてきた。俺自身にある責務を理由にしてな。だが、その責務もなくなった今から、俺は自分の気持ちに素直になって生きて行こうと思うんだ」

「そうか。それで、それが私に言いたい事と、どういう関係がある

「？」

俺の前置きに、エクレが首を傾げながら問いかけてきた。

「そつだな。……エクレ」

「な、何だ？」

訝しげに返事をするエクレの顔を真正面から見て、俺は自分の素直な気持ちを告げた。

「俺は、エクレの事が好きだ」

「……………え？」

俺の気持ちに、エクレはすつとんきよな声を上げた。

「勿論、一人の女性としてだ」

「……………!!!」

俺の言葉の意味を理解したエクレは、顔を赤くした。

「あー、悪い。俺って不器用だからあまり気の利いた言葉が言えないんだ」

「あ……………その……………」

ここまで顔を赤くして狼狽えている彼女を見るのは、初めてのよう
な気がする。

「まあ、嫌なら忘れてくれ」

「いや……………ではない」

エクレは小さな声だが、呟いた。

「え？」

「そ、その私も……お、お前の事が、す、すすす好きだ！」

今度は俺が驚く番だった。

まさか、俺の一方的な気持ちを受け取られるとは、思っても視なかったからだ。

「そうか………」

「~~~~ツ!!」

エクレは恥ずかしさのあまり、顔を赤くしていた

そんなエクレに俺はベッドから起き上がると、彼女の前まで移動した。

「エクレ」

「な、何だ！」

俺はエクレにずっと右手を差し出した。

「色々と問題もあるかもしれないが、これからも宜しくな、エクレ」
「……ああ」

エクレはそう答えながら俺の右手を握った。

それは、俺とエクレが恋人と言う関係になったと言う意味でもあった。

第37話 男同士の語り(前書き)

第名に関するものが、1割だけと言つて。

第37話 男同士の語り

エクレに告白をした後、エクレは部屋を後にし、俺も少し横になつてから部屋を後にした。外はすっかり真つ暗だった。

「おや、渉殿ではないか」
「む、ロランか」

俺の返事に、ロランは苦笑いを浮かげる。
どんな人にも呼び捨てにするのは、俺の専売特許だ。
そう思いたい。

「ちょっと、話があるんだ。付いて来てくれるか？」
「……はい」

俺はロランに言われるがまま、後をついて行つた。

「ここならいいだろう」
「それで、話とは何ですか？」

人気のない場所まで連れてこられた俺は、間髪入れずに本題を切り出した。

「そうだな……エクレールと恋人になったらいいね」
「なッ!? どうしてそれを!」

ロランの切り出した言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

「妹の様子を見ていれば嫌でもわかるさ」
「そうですか」

ロランの答えに、俺は納得した。
家族のほんのちよつとした変化に気付く可能性もある。
俺にはその経験がないから何とも言えないが、おそらく家族とはそういうものなのだろう。

「エクレールは少々じゃじゃ馬だけど、よろしく頼むよ」
「……反対しないんですか?」
「反対………ね。そう言う気持ちはなかったかな」

俺の問いかけに、ロランは少しばかり困ったような表情を浮かべると、そう答えた。

「でも、俺は彼女を怪我をさせてしまいました」
「いや、あれも騎士だ。むしろ名誉の負傷と言う奴さ」

ロランは優しく言うと、俺の肩に手を置いた。

「でも、エクレールを幸せにすること。それだけは約束してほしい」

「分かりました。小野渉、この命に代えてでも幸せにして見せます」
ロランの言葉に、俺は背筋を正して答えた。
言われなくても当然の事だが、それでも改めて再認識することが出来た。

「そうか。では、また後でな渉殿」

「あ、すみません。エクレはどこに行きましたか？」

「エクレールなら、露店の方に行つたと聞いている」

俺の問いかけに答えると、ロランは今度こそと言わんばかりに、俺の前から去って行つた。

「露店の方に行きますか」

俺も露店の方へと向かうのであつた。

「JJJJJJJJ」

今俺は森のような場所を歩いていた。

ぶつちやけ迷子だ。

前方には明るい場所があることから、おそらくまっすぐ行けば露店がある所に出られるのは確かだ。

「おや、渉さん」

「ん？」

誰かに呼ばれて振り返ると、そこにはヴィノカカオ、ファールブルタ、グラフィティの三人が立っていた。

「何だ、三馬鹿か」

「誰が馬鹿ですか！」

俺の三馬鹿と言う言葉に反論する三人。

「それはともかく、こんなところで何をしてるんだ？」

それを無視して俺は問いかけた。

「ガウル様を探してる。きつと迷子」

「きつと露店の所にもいるんじゃないか？」

話を聞くところ、露店に向かっている最中ガウルとはぐれてしまっただけらしい。

目的地は一緒なので、露店の方に行こうと言うことになったのだとか。

まあ、見方を変えると、この三人が迷子になっているとも思えなくもないが。

「あれは、リコッタさんにユキカゼさん？」

「ん？ あ、ほんとだ」

露店まであと少しと言ったところで、露店の陰に隠れるように座っている、リコッタとユキカゼの姿があった。

「よおし、そこでござる。もっと、ぐぐっとお」
「ぐぐっとお」

二人の背後に近づいた俺は、二人の肩を叩く。

「ん？」
「ん？」
「お？」

叩かれたことに気付いた二人は、こっちに振り返る。

「はあい！」
「お二人揃って何されてるんですか？」

クラフティとファールブルタンが二人に声をかけた。
そんな時、ガウルの声がある。

「よう！ シンク、たれ耳！」
「……………む」

声のした方向には、ガウルがエクレとシンクが座っている場所に向かって行く姿が見えた。

その後、合流した俺達は、色々な食べ物を用意して少し離れた場所にシートを引くと、そこで食事をとることとなった。

「しっかしおめえら、二人して大した活躍をしゃがったな」

「いえ」

「まあ、色々ありました」

骨付き肉を豪快に頬張るガウルの言葉に、エクレとシンクが答えた。

「それに魔物騒動と会見の後、うちの姉上、つきものが落ちたみたいになさっぱりしてしまっただけ。詳しい事情は聞いてねえけど、後で俺にも教えてくれるってさ」

「そうなんだ」

ガウルの声に、シンクが相槌を返す。

「後、バーナードに聞いたんだけど、戦興業も元のペースに戻すらしいぜ」

「それは何より」

ガウルの知らせに、エクレが喜びながら答えた。

「戦も終わってよかったも片付いて」

「魔物も退治されて」

「ビスコッティとガレット領国に再び平和がってことで」

クラフティとヴィノカカオ、ファールブルタンの順にまとめて行った。

……………料理を頬張りながらだが。

「そうならば何よりでござるな」

「ホントであります」

そしてユキカゼとリコッタもそれに続いた。

「戦は中途半端に終わっちゃったが、結果よければすべてよしだ」
「だね、ほんとによかった」

そして、俺達は笑いあった。

(ホントに良かった。ホントに)

その光景を見ているだけで、そう思えてしまう。
失ったものもあるが、それ以上に今この光景は価値のあるものだった。

「あ、そうだ涉。ココナプツカ食べる？」

「は？」

何かの料理の名前だろうが、少しばかり意味が分からなかった。
そんな時、リコッタが不意に立ち上がった。

「リコ、どうかしたか？」

「ああ、学院のみんなが緊急で連絡が欲しいとのことで」

エクレの問いかけに、エクレはどこか影を落としたような表情で答えた。

「あら」

「勇者さま、ガウル殿下。自分はちょっと野暮用で出るであります」

「はい」

「おお、行って来い！」

リコッタの言葉に、シンクとガウルは快く送り出す。

「……………」

だが、俺にはそれが嘘であると言っ事が分かった。
どことなく表情が曇っていた。

おそらくは手にしている巻物が原因だろう。

その後、俺達は姫君の臨時ライブを見るのであった。

第38話 条件と選択（前書き）

今回、いよいよ渉の身の振り方が、明らかになります

第38話 条件と選択

姫君のコンサートが行われた翌日、俺とシンクそしてユキカゼに姫君はパレードで外を歩いていた。

リコッタは途中で学院の方に行くとのことで、先に抜けて行った俺としては出る資格がないと言って断ろうとしたが、言い包められる形で出るようになった。

まあ、妥協案として、俺は後ろの方にいた騎士団に混ざって歩いたが。

シンク達はとても楽しそうだったのが、印象深かった。

「ふう」

夜、割り当てられた部屋に戻った俺は、一息つく。

戦いも終わり、平和な日常が戻り、そして守るべき者も出来た。

俺の得た物はかなり大きかった。

だが、その代わりに失ったものもある。

（ま、俺にはどうでもいいことだが）

俺にとって失ったものと言うのはその程度の認識だった。

なぜなら失ったものは、俺の責務なのだから。

「ん？ 誰だ」

考えに耽っている俺を止めたのは、ドアのノックされた音だった。

「涉様、こんばんはであります」

ドアの外から声が出たかと思うと、ドアが開いた。
そこに立っていたのは、リコッタだった。

「どうしたんだ？ 目が赤いが」

「え……あ、あの、実は」

リコッタの目がかすかに赤くなっている理由を尋ねた俺だが、その
答えがすでに分かっていたため俺はリコッタの言葉を遮った。

「勇者送還の儀の事だろ？」

「え！？ な、何で涉様がそのことを」

俺の予想は正しかったようで、リコッタが驚いた様子で俺に訪ねて
きた。

「それは俺の力で見たからさ」

「力……ですか？」

「俺が世界の意志と言う神だと言うことは聞いているよな？ それ
の能力さ」

よく分かっていないリコッタに、俺はさらに続けて答えた。

そして俺は片手を上げると手のひらを上に向け、少しでも意識を集
中すると、俺の手の上に無数の文字が浮かび上がった。

「こ、これは何でありますか？」

「それはこの世界のすべての情報が敷き詰められているデータベース。リコッタの様子がおかしくなったのは学院からの便りを受け取ってから……リコッタたちが調べていたのはシンクを元の世界に戻す方法。それだけの情報があればこれにはすぐにあり付けるさ」

それはまさにデータベース。

この世界にあるありとあらゆる情報がこれでもかと言つほどに敷き詰められているのだ。

管轄外の世界で、核を失った俺に出来るのはこれを参照することだけだ。

「それで、リコッタの要件はこのことか？」

「はいであります」

俺はリコッタの答えを聞いて一息つく。

「しかし、ここでの記憶をすべて失って、ここには来れないなんて何ともひどい話だよな」

俺は苦笑い交じりに呟いた。

「まあ、この勇者送還の儀は、召喚された勇者がその役を断った際に行くものだから、当然と言えば当然なのかもしれないが」

「涉様は、本当に何でも知っているんですね」

俺の言葉に、リコッタはどことなく悲しげな声を上げた。

「知っていても、それを伝えることはできないのさ。どう取り繕う

と俺は観測者オブザーバーだからな。出来るのは人々が自分の力で道を切り開く
のを見ているだけさ」

「それでもすごいでありますよ、渉様は」

「渉」

俺は、今まで気になっていたことをリコッタに言う事にした。

「え？」

「俺には様付けは不要だ。何だか背筋がぞくぞくして居心地が悪い
んだ。いつその事呼び捨てにでもしたらどうだ？」

俺の言葉に、リコッタは鳩がめ鉄砲を食らったような表情を浮か
べていた。

「で、では涉さんで」

「はい、よろしく」

呼び方を直したところで、俺はもう一度話を戻すべく口を開いた。

「とは言えリコッタ、お前は誤解をしている」

「誤解、でありますか？」

俺の言葉にリコッタは首を傾げながら聞いてくる。

「まず、厳密に言えば俺は勇者召喚の儀を受けてはいない。だから
送還の儀を受けることは不可能だ」

彼女の召喚の儀の自己とは言え、俺は召喚の儀を受けずにここに来
たようなものはずだ。

だとすれば、送還の儀は出来ない。

「次に、俺は記憶などを失ってまで、元の世界に戻ろう何ていう気はこれっぽっちもない」

それが一番の理由でもあった。

俺が見た情報の中に、『勇者はフロニヤルドで得た物を元の世界に持ち帰る事は出来ない』と『一度送還された勇者は二度とフロニヤルドに来る事は出来ない』と言う条件があった。
そんなマイナスを負ってまで、俺は天界あそこに戻る気はない。

「それって……」

「ああ、俺は」

「

そして俺は自分の取った答えを告げた。

「
ビスコッティに永住する」

第39話 模擬戦〜最初で最後の真剣勝負〜（前書き）

今年ももう少しで終わり……。

今回も内容が少々あれですが、どうぞ。

第39話 模擬戦〜最初で最後の真剣勝負〜

翌日、俺は練習場に向かっていた。

「あれ、涉？」

「お、シンクか。どうしたんだ？」

ちょうど鉢合わせになったシンクに、俺は聞いてみた。

「僕はエクレに稽古をつけて貰おうかなって」

「そうか……なあシンク、一つだけいいか？」

「え、何？」

俺の言葉に、首を傾げるシンクに、俺は今までやりたかったことを頼むことにした。

そして僕とシンクは練習場に来ていた。

そこでお互いにそこにあつた普通の剣を構える。

「それじゃルールを確認する。紋章術の使用は禁止、どちらかが降

参するか、武器が壊れればその人の負けだ。これで双方ともいいな
?」

「はい、問題ありません」

「僕もです」

ロランの確認に、俺達は頷いた。

俺がシンクに頼んだのは、模擬戦だった。

一度でもいいから、どちらの剣筋がいいのかを鑑みておきたかった
のだ。

俺のハンデは、シンクと同じ、普通の剣を使うことだ。

「シンク、ここでは神とか神じゃないとかなんて関係ない。全力で
来い」

「了解！」

「それでは、始めッ!」

お互いに言葉を掛け合ったのを確認したロランの合図により、俺と
シンクの最初で最後の全力での模擬戦が幕を開けた。

「ふっ!」

「はっ!」

シンクが振りかざす剣を、横に避けることで躲す。

「はぁぁあ!」

そこにまるで狙っていたかのように、シンクは横なぎに剣を振りか
ぶっていた。

「甘い!」

「ツク!!」

俺はそれを、手にしていた剣で軽く打ち流すと、体勢が崩れたシンクにめがけて俺は剣を振り下ろす。

だが、シンクもすぐに体勢を立て直し剣の腹で受け止めた。

「つち！」

俺は舌打ちをすると、剣を押し出して後方に下がる。

シンクも俺から距離を取った。

「中々やるな。先の戦いで見についたのか、それともシンクに元々あったのか……」

「そつちこそ」

俺の評価に、シンクはそう返してきた。

確かにシンクは強い。

前の魔物戦で感化されたのか、元から素質があったのかは分からない。

だが、目の前にいる者はかなりの腕だ。

俺も手を抜くわけにはいかない。

「はああ!!!!」

「やああ!!!!」

俺が一步踏み出すのと同時に、シンクも俺に向かってきた。そしてお互いの剣が交わった。

Side out

3人称Side

「すごい……」

シンクと渉の模擬戦を見ながら、静かに呟いたのは、エクレールであつた。

それは渉の強さか、それともアグレッシブな動きで交わしながら反撃をするシンクか。

答えは両方だ。

渉からの剣劇を、練習で培ってきたアグレッシブな動きで躲し、隙を見て反撃をするシンクの動きからは素人の雰囲気などは一切なかった。

言うのであれば、剣の達人にも匹敵するほどだ。

(剣筋はそこまで良くはない。それでも渉と渡り合えてる)

渉の引き締まった表情を見たエクレールには、彼が本気で戦っていることが分かった。

いつになく真面目な表情をしていたからだ。

(それなのに自分の時は……)

エクレールは、前の模擬戦の時の事を思い出していた。

その時、エクレールは渉に完全に遊ばれていた。

勿論、だからと言って彼女が弱いと言うこと” 〃 ”ではない。

だが、エクレールの心の中では、どこか悔しさがあつた。

(今度は今の渉の表情をさせるほど、強くなって見せる)

エクレールは、渉達の模擬戦を見ながらそう強く心に誓うのであった。

Side out

「はああ!!!」

「やああ!!!」

俺とシンの剣が互いに交差してせめぎ合う。

俺はすぐに後方に下がり、乱れた息を整える。

何度目の打ち合いかは分からない。

シンはかなり強い。

いや、強くなり続けていた。

(恐ろしい、この戦いで自己学習をしてやがる)

そう、シンは不思議なことに、模擬戦で自己学習をしながらどんどんスキルを、身につけていたのだ。

剣筋だけがすべてではない。

剣の扱い+体の動きだ。

剣筋が良くてもぼさっと突っ立っていれば、よほどの剣筋でなければ不利となる。

ある程度は動かなければならない。

シンクは後者の動きの方が優れていた。

(このままだったら負けるッ!!！)

「ふうー……………」

俺は心を静かにしながら息を吐く。

そして俺は剣腹を根元から、人差し指と中指でなぞる。

「古賀流……………」

俺は静かに流派を口にしながら、一気にシンクの前に移動する。

「ッ!?!」

シンクは慌てて剣を横に構え、俺の攻撃を防ごうとする。
だが、それは無駄に終わる。

「爆裂!!！」

「ッぐ!!！」

俺は一気に剣を突き刺した。

紋章術や紋章剣、神術を使わない剣術の一つ。

自分自身で創り出した流派で、うまく行けば相手の剣は砕けているはずだ。

そして、俺の放った渾身の技は、うまく行きシンクの剣を貫いて俺の剣が、のど元に突き付けられていた。

「これで

ッ!?!」

”俺の勝ちだ”と言おうとした瞬間、俺の持っていた剣は音を立てて刃の部分が砕けた。

どうやら、普通の剣では今の一撃に耐えきれなかったようだ。

「そこまで！ 今回の模擬戦は、引き分けとする」

それを見届けたロランは、動揺を隠した様子で告げた。

俺は一步下がるとお辞儀をすると、片づけを始めた。

こうして、俺とシンクとの真剣勝負は、引き分けという結果で終わった。

第39話 模擬戦〜最初で最後の真剣勝負〜（後書き）

やはり、戦闘描写はまったくダメだなと実感しました。

第40話 衝撃の事実／語らい（前書き）

今年最初の投稿は、かなり短めかつ、話めちゃくちゃな内容です。

本当にすみません。

第40話 衝撃の事実／語らい

シンクとの勝負を終えた俺達は、シンクと共にユキカゼ達がいるお屋敷に来ていた。

「こんにちはー」

「いらっしやーい!」

シンクの声に気付いたユキカゼが片手を振る。

俺はその後ろにいた。

「お邪魔します！ 子狐、元気になりました？」

「ああ、もうだいぶな」

シンクはダルキアン卿の元に駆けよると、今はぐっすりと眠っている子狐を覗き込む。

俺も、シンクにつられるようにして、子狐を見た。

「同じ土地神の同胞として、この子は拙者がちゃんと躡けるぞいやるよ」

「そっかあ」

縁側に座っていたユキカゼが俺達の横に移動しながらそう言った。

「つて、ええ!? 土地神？」

「ん!?」

少しだけ遅れて、俺達はユキカゼの口にした事実、驚いた。

「あれ？ 言ってなかったでござるか？ 拙者土地神の子でござるよ」

「ユツキー、神様？」

「うむ。尊敬して良いでござるよ」

そう言っつてユキカゼは胸を張った。

それを見ていたダルキアン卿は静かに笑っていた。

その後、ユキカゼは静かに語り出した。

昔、魔物によつて村を荒らされ母親を失くしてしまった時に、ダルキアン卿に拾われたらしい。

「フロニヤルドでも、国が亡びる事つてあるんですね」

「まあ、かれこれ150年以上も前の事故な」

「ひ、百!？」

ダルキアン卿の言葉に、驚きを隠せないシンクをよそに、二人は話を進めていく。

「ここ百年あまりは魔物も現れず、危険な争いもなく、太平の世でござるよ」

「拙者とユキカゼは魔物封じの技を持つゆえ、ここ数十年はビスコッティを拠点に、時より諸国を旅し、魔物を封じて回っているのでござるよ」

「もしかしてダルキアン卿も？」

「いや、拙者は人でござる。ちよつと訳があつてな」

シンクの問いかけの意図が分かったのか、ダルキアン卿は答えた。その訳がどういふものなのかは分からないが、本人としても言いたくはないことだと思つた俺は、考えないようにした。

その後、シンクはダルキアン卿と共に、彼女以外には扱えない”神狼滅牙”と言う剣術を教わっていた。

「それにしても、ユキカゼが土地神か……まんまと騙されたものだ」

「あはは……申し訳ないでござるよ」

俺の嫌味に、ユキカゼは苦笑い交じりに答えた。

「確かに、言ったらいつたで崇められるか実験動物にされるか迫害を受けるかのどちらかだろうしな」

ちなみに、俺は全部が嫌だ。

崇められるような存在でもないし。

「拙者もでござるよ。まさか涉殿が私よりも位の高い神だとは思ってもいなかっただでござるよ」

「お互い様だな」

俺はそう答えると、稽古をしている二人の方を見た。

「ユキカゼ、お前は今まで人助けとかを”数字的”に考えたことはないか？」

「ないでござるよ」

「そうか……………」

俺は、ユキカゼの答えを聞いてほっと胸を撫で下ろした。

もしユキカゼが、俺と同じ過ちを犯そうとしているのであれば、それは止めなければいけない。

それが俺の使命だからだ。

「一応忠告。もし数字的に考えたら、足元をすくわれるから気を付けるよ」

「……………心得たでござる」

俺の突拍子もない話に、ユキカゼは何かを思ったのか、真剣な声で返事をした。

それから色々話し、シンクの稽古が終わったのを見計らってお屋敷を後にするのであった。

第41話 真剣勝負と二度目の正直？（前書き）

明るい雰囲気になっているかどうか……

どしどしと見てくださ

第41話 真剣勝負と二度目の正直？

夕方、風月庵を後にした俺達だったが……

「あ痛たた……さすがに一日でできるようになってのは、無理があった」

「当たり前だろ。一日でできたら、その方が驚きだ」

俺は左腕を回しながら呟くシンクに、そうツッコんだ。

俺の場合は……いつか機会があったらやってみよう。

「おー、シンク！ 涉！」

「あ、ガウル！」

「ジェノワーズも」

俺達に声をかけてきたのは、シンクと同じようにセルクルに乗っている、ガウルとジェノワーズの四人だった。

「何だ？ どつか出掛けてたのか？」

「ちよつと風月庵に」

ガウルはシンクのそばまで移動しながら問いかけ、シンクはそれに答えた。

「あ、シンクに涉、お土産持ってきたよ」

「ホント！？」

クラフティの言葉に、シンクは嬉しそうに聞き返した。

そして差し出されたのは青色で所々に赤い線が入っている、風呂敷

のようなものだった

「ガレット名産詰め合わせ」

「里帰りに持って行ってください」

ヴィノカカオと、ファーブルタンの二人が続けてシンクに声をかけた。

「ありがとう……いいの？」

「姉上が持って行けっさ」

「そっか」

ガウルの言葉に、シンクは嬉しそうに受け取っていた。

「にしても、涉はどうしてセルクルに乗らないんだ？」

「俺としては、セルクルに乗る事に意味があるのかが甚だ疑問なのだが」

俺はいまさら疑問を投げかけてきたガウルに、そう聞き返した。

「大体、昔の人間はな、こうやって徒歩で戦に出かけた物さ。それを思えばこれも日々の訓練のようなものさ」

「そう言うものなのか？」

俺の答えに、シンク達は首を傾げていた。

「……何だろう、この俺だけがおかしなことを言っている感は。」

「それにセルクルに乗ると、色々な事で不便………がああああ！！！！？」

「あははは！ 涉がセルクルに噛みつかれてる」

俺の言葉を遮るように、頭を加えられる俺を見て、クラフティが笑う。

「悪口を言うから起こったんだな、きつと」

「おいこら！ 何とかしてくれ！！ って、俺を浮かび上げらせてどうする気……まさか、このまま運送は勘弁してくれよ……！！？」

結局、俺はそのままお城まで啜えられたまま、運ばれることになった。

このことで、セルクルに乗る気がさらに無くなったと言うのは、関係ない話だ。

どうして、シンクの所にガウル達が来たのか、彼曰く『まだ決着がついていない』とのことだ。

そして、その決着をつけるべく、今日の前で繰り広げられているのは、決闘だ。

そう、それはいいのだ。
それは。

「ぐぬぬぬぬ……！！」

「うづうづう！……！」

「お、ガウ様強い、ガウ様強い！ でも、シンクも負けてない！」

決闘の実況をするクラフティ。

何故かガウルの実況が多いような気もするが、それもまあいいだろう。

問題は……。

「なぜに決闘が腕相撲なんだよ！？」

決闘の種目だった。

と言うより、もう腕力の勝負になってるし！
いや、そもそもこれで決着がつくのか？

「お待たせ、飲み物もらってきましたよお」

「ごめんべー！………さんを働かせてえ！！！」

飲み物を取りに行っていたファールブルタンが、トレイに飲み物を乗せて戻ってきた。

「いえ、あッ！？」

なに、その”あッ！？”って

答えはすぐに出た。

「へブ！？」

聞こえたのはコップの割れる音、そして

「うわあ！？ この馬鹿！！ またか？ またやったのかあ！？」

「うわあ！！ ごめんなさい、ごめんなさい、いやあ！！」

ガウルの怒鳴り声とファールブルタンの悲痛な声だった。

感じるのは、俺の頭の上にある”何か”と頭から垂れる液体のようなもの。

それはとても甘かった。

「いやはや悪かった」

「シンクと渉も、これからはベールが背後に立った時は気を付けてな」

「あ、うん。よく分かった」

あの後、顔を吹きながらガウルとクラフティの注意を聞いていた。

俺は顔をタオルで拭き、さらに頭に乗っているガラス片を取り除く作業も残っているが。

（何で俺だけコップごと来るのかねえ？）

俺は、心の中でぼやいた。

その後、ガウルに言われて、お風呂に入ることとなった俺達、だが蘇るはここに来た当初の”あれ”。

「シンク、忘れ物をしてしまった。先に行つててくれ」
「あ、うん。分かった」

俺はシンクに嘘の理由を告げて、その場に残った。
地味にシンクと一緒にいた時の、俺の不幸遭遇率が高いのだ。
そして、時間を見計らつてお風呂場へと向かう。

「あのおく、実は先ほど、掛け布を掛け間違えちゃつて、こちらに入つてるの女性だけで間違いないですよね？」

そして、脱衣所にたどり着いた時、メイドさんの声が聞こえた。
どうやら、いやな予感は的中だったようだ。

「だ、大丈夫です！ 女子が一人だけでーす！」

（あーあ）

俺は、遠くから聞こえてきた姫君の”ウソ”にため息をこぼす。

「ありがとうございます〜！ ちゃんと直しておきましたから〜」

（直っていることは非常にありがたい）

しかし、女子が一人なわけがない。

いくら馬鹿とは言え、あれだけここの文字を勉強したのだ。
間違えるとは思えない。

だとすれば、シンクは自ら女湯に飛び込んで行つたことになる。
シンクがそつという事をする奴ではないことは確かだ。

つまりは、掛け布が間違つていた状態の時、男湯となっている女湯

に入ってしまったと言うことだ。

「……………ま、いつか」

考えるだけで頭が痛くなりそうなので、俺はそこで一旦区切ると、服を脱いで男湯の方へと向かった。

男湯の入った俺は、体を（特に頭の方を徹底的に）洗い、湯船に入ると一息つく。

「一人でこのスペースを独占すると言うのも何だかあれだが、まあいいか」

ただ、一つだけ問題なのは

「私の名前、憶えてくれますか？」

「えっとそれはもちろん」

女湯から聞こえる、シンクと姫君の話し声だ。

聴きたくないのに聞こえてくる、この何とも言えない気持ちは何だろう。

「ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティ。ミルヒです」

「えっと……ミルヒ」

「はい、シンク」

「……………」

まるでカップルのやり取りを聞いているような、そんな感じがするのは、俺の心が荒んでいるからなのだろうか？

「ああははは！！」

「盛り上がっている所悪いんだが！」

俺は耐えられず、女湯にいる二人に声をかけることにした。

「姫君を呼び捨てにしたら、”姫様を呼び捨てとは何事だ！！”みたいなことを言って緑色の髪の人が怒ると思うんだが」

「はッ！？ そうだった！ この呼び方は人前ではできない。間違いないで怒られる！」

率直に言おう。

今、俺の頭の中には般若のように恐ろしい表情で怒っている、某親衛隊長とメイド長の姿が浮かびあがった。

それから後も、二人の会話は続いた。

「うーん。でも僕は”姫様”の方が呼びやすいんだよね。例えば…

…」

そこで、シンクは一旦区切った。

「姫様、お手！」

「はい！」

「姫様、おかわり！」

「はい！」

「よおし、よしよし、姫様偉い、姫様可愛い」

「何ででしょう、こんな単純な事なのに、何だかとても楽しいんだわ」

女湯から聞こえてくる、和やかな声。

それは、もしそばに誰かがいたら、即シンクは地獄を見るような物の数々だった。

だが、一つだけ言わせてほしい

（あいつ、今完全に姫君を”犬”扱いしなかったか？）

俺は、その考えを、忘れることにした。

と言うより、俺の方もかなり失礼だな。

俺は、心の中で苦笑いを浮かべながら、湯船から上がるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8133w/>

DOG DAYS ~ 誤召喚されし者 ~

2012年1月12日02時40分発行